

---

I S イノウエ シンカイ

七四

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS イノウエ シンカイ

### 【Zコード】

Z0183W

### 【作者名】

七四

### 【あらすじ】

ORCA旅団No.5、真改。

最初の五人の一人。

多くの人々を犠牲にして人類の未来を開く計画、クローズ・プランを先導する革命家、マクシミリアン・テルミドールの護衛として最後の戦いに挑んだ彼は、多くの未練を残したまま散った。

その未練故か異世界に生まれ変わった彼は、今度こそ悔いなく生き

るために、再び戦うことを決意する。

世界最強の兵器、<sup>インハイ-シト・ストラトス</sup>「ISのパイロット」、「井上真改」という名の少女として。

## プロローグ 終止（前書き）

皆さん、はじめまして。

タイトルから液体を操る力を持つ戻りぐすタイプの彼を想像した方はごめんなさい。

私、あのゲームやってないんです…。 いずれ手を出さうと思つてゐるんですが…。

この作品の主人公は、作中で4文字しか台詞がないクセに何気に熱い設定を持つ方の彼です。

真改さんのことはA C シリーズの中でも特に大好きなんですが、自身小説を書くのが初めてなこと、原作内の彼が極めて無口な剣豪以外にキャラがほぼ不明なことなどから、「こんなのは真改さんじゃねえ！」と感じる方も多いとは思いますが（真改さんに限つた話ではありますんが）、大目に見ていただけると助かります。 それでは、楽しんでいっていただけると幸いです。

## プロローグ 終止

「お前たち、やはり、腐つては生きられぬか」

通信機越しに聞こえる声。

傍らに立つ、巨大な機械仕掛けの鎧を身に纏つた男の声。

人類の未来を守るため、現在の人間に犠牲を強いる道を選んだ男の声。

己が、守ると誓つた男の声。

静かな、しかし様々な想いの込められたその声を聞き、真改は一步、踏み出した。

アルテリア・クラニアム。

汚染された世界から逃れるため人類が移り住んだ、空に浮かぶ振り籠にエネルギーを供給するための、巨大な施設。

世界を緩やかに破滅させる猛毒を垂れ流す、人類の罪の具現。

クラニアムに着いたのは、自分達が先だつた。

人類の黄金の時代のため、ここを制圧、破壊しようとした矢先に、来客が二人、訪れた。

邪魔が入った、とは思わない。

何故ならばその二人は、自分達にとって、クラニアム以上に重要な標的だからだ。

もつとも、自分と相棒は、目的としている相手が違う。彼の相手は、プラス・マイアン真鎧の乙女。かつては友人であり、今では決定的に道を違えた彼女とは、自らの手で決着を付けると、そう言つていた。

ならば彼の邪魔をさせぬことが、彼の剣たる己の役目であり。

プラス・マイアン真鎧の乙女の戦友であるカラードのリンクスとの戦いは、己が望む

ことでもあった。

かくして、四機の最強にして最悪の兵器による、人類の未来を賭けた戦いが幕を開けた。

アサルトライフルから撃ち出された弾丸を、クイックブーストで避ける。

避けた先に回り込むように放たれたミサイルを、マシンガンで撃ち落とす。

強い。

黒いネクスト、ストレイドとの戦いを始めてから数分。真改は、追い込まれていた。

ストレイドは、中量級二脚機にアサルトライフルとミサイルを装備した、バランスの良い機体だ。

機動力に優れ、装甲もある程度の攻撃には耐えられる。

武装は命中率を重視し、火力不足はアサルトアーマーで補う。あらゆる戦況、あらゆる相手に対応できる、良く言えば万能、悪く言えば器用貧乏なその機体を、カラードのリンクスは完璧に使いつなしていた。

対する真改の操るネクスト、スプリットムーンは、完全な接近戦特化型だ。

ストレイドと同じ中量級二脚機だが、継続的な機動力よりも短距離、短時間の瞬発力に優れ、武装は牽制用のマシンガン、攪乱用の闪光

弾、そして一撃必殺の威力を持つレーザーブレード。

この機体を見て接近戦を挑んで来る者はまずいない。いるとすればそれはただの阿呆か、スプリットムーンと同じ接近戦特化型の機体を操る者である。

そのどちらでもないカラードのリンクスは、距離をとつての射撃戦に徹していた。

真改にとつては圧倒的に相性の悪い相手。それでも彼は、勝てると考えていた。

己の実力を過信していた訳ではない。彼は自分の非才を十分に理解している。

だからこそ、近付いて斬る、ただそれだけを磨き上げ、他の一切を切り捨てて来た。

その真改にとつて、アルテリア・クラニアムという戦場は己に地の利があった。

空のない、限定された空間。さらに、施設内の様々な大型装置が自由な機動を邪魔する障害物となる。

それらに気を取られ、僅かでも動きが遅れれば、その隙に一息に間合いを詰め、斬り伏せる

それを為すだけの能力が、己とスプリットムーンにはあると、歴戦の猛者である真改は知っていた。

だが。

「ツ……！」

ミサイルの爆炎を目眩ましに飛来したアサルトライフルの弾丸が、スプリットムーンの装甲を抉る。

即座にクイックブーストを発動、反撃を仕掛けるが、ストレイドは既に剣の届かぬ距離まで後退している。

そこに叩き込まれる、アサルトライフルの連射。

先程から、この繰り返しだ。

初めこそこちらの間合いを見切るためか、必要以上に距離をとり、命中弾も多くはなかつた。しかしほんの数度の攻防で、間合いどころか機動や攻撃のタイミングまで見切られ、以降は防戦一方だ。絶え間ない被弾により、プライマルアーマーも一向に回復しない。無様に逃げ回るだけの己とは逆に、ストライドは狭い戦場を障害物などまるで無いかのように縦横無尽に飛び回っている。

(……想像以上、か。よもや、これほどとは……)

数多のリンクスを打ち倒して来た敵を、侮っていたわけではない。ただ、この男の強さがヒートの領域を遥かに超えていただけのことである。

(……神話において、力こそ神である、か。ならば、この男は……)

だが、相手が誰であろうと、それこそ神であろうと、真改に退く気は微塵もなかつた。

何故ならばこの男は、己の仲間を、己の仇敵を、葬ってきた男なのだから。

暴力ではなく、知力でもって戦つた、若き謀略家がいた。自分の命すら駒の一つと見ていた彼は、勝てぬと解つていながら、自ら死地に赴いた。

理想でも、信念でもなく、友に殉じた大男がいた。

どんな時でも騒がしかつた彼は、自らが捨て駒であると解つていながら、最期まで楽しそうに笑つていた。

誰からの理解も求めず、狂氣の思想を掲げた異端者がいた。

無意味な虐殺を行おうとした裏切り者だが、何ら言い訳をせず、自分の思想の為だけに生きた彼のことが、真改は嫌いではなかつた。

かつて宝石と呼ばれ、天才的な実力と気高い魂を持った女性がいた。

戦いの中に産まれ、戦いに生き、戦つて死んだ彼女が、その先に何を求めていたのか、結局聞くことは出来なかつた。

若者に未来を託し、ただ一人で戦場に散つた老人がいた。

彼は腐り果てて行く世界を決して見捨てることなく、年老いて猛毒に蝕まれた体で、自分達を導いてくれた。

そして。

目的もなく、ただ与えられた仕事をこなすだけの毎日を過ごしていたところ。

己はまだ、非才を補う経験もない未熟者だった。

弱かつた。

あまりにも弱かつた。

強大な敵との戦いに挑む彼女を、ただ見送るしか出来ないほどに。

数日後、彼女の武装の一部と、彼女の最後の戦いの記録が戻つて来た。

遺体はない。

優れたリンクスだった彼女の体は、死してなお冒涜としか言いようのない研究に使われた。

彼女と戦い方が似ていた己に武装が引き継がれ、参考資料として戦

闘記録の閲覧を許可されたに過ぎない。

ディスプレイ以外に明かりの無い暗い部屋の中、彼女の最期を見る。

かつては伝説的なレイブンだつたというアナトリアの傭兵と、鴉殺しと呼ばれた彼女の戦いは熾烈を極めた。

お互いの機体は動くことが奇跡と言えるほどに大破しており、AMSから逆流してくる痛みは常人ならば発狂するほどのものだらう。それでも彼らは、眼前の敵を滅ぼすべく戦い続ける。

そして、決着。

振るわれた刃は、届くことなく。

放たれた弾丸は、無慈悲にコアを貫いた。

彼女の機体が、動きを止める。ネクストの機能停止だけでなく、搭乗者も致命傷を受けたのだろう。

一瞬の静寂。

そして、痛みを堪えるような、漏れ出しそうになつた悲鳴を噛み殺すよつた、小さな息遣いのあと。

彼女の、最期の言葉が紡がれた。

ガシュン、と、マシンガンと閃光弾をバージする。残弾も少

なく、なにより田の前の相手にこんなものは役に立たない。ならば、少しでも機体を軽くするために、邪魔な荷物は捨てるべきだ。

同時に、オーバードブーストを起動。

瀕死の己とは対照的に、ストレイドはほとんど無傷と言つていい。

独特のチャージ音が、クラニアムの一角に響く。

例え奇跡が起つれば、ザーブレーードを直撃させたとしても、逆転は不可能だろう。

背部のブーストユニットに、光が収束する。

もはや、己の敗北は決定していた。もとより、己に勝てる相手ではなかったのだ。

オーバードブーストが発動する瞬間に合わせ、クイックブーストを発動させる。

だが、それでも。

総身を碎くほど凶悪なGの中、歯を食いしばり、彼女の剣を起動する。

最期まで、足搔くのだ。

我が身を顧みないその加速に、相手は一瞬、反応が遅れ。

(……せめて、一太刀……！)

紫色の極光の刃が、黒い装甲を切り裂いた。

動かなくなつた機体の中、霞む視界にカメラアイから直接映像が送られて来る。

真鎧ブラス・メイデンの乙女との決着が付いたのだろう、相棒がカラードのリンクスと戦っている。

彼女の剣はスト레이ドに大きな損傷を与えたが、やはり倒すまでには至らなかつた。

無茶な加速の反動で動きが止まつたところに反撃を受け、既にボロボロだつた機体は大破。

だが最後の一撃により、相棒も多少は楽になるだろう。

(……ここまで、か……)

意識が薄れて行く。AMSによりネクストと繋がつてゐるリンクスは、ネクストの機能停止と共に死ぬ。

今、カメラアイから送られて来る映像も消えた。己の命の灯火も、間もなく消えるだろう。

『誇つてくれ。それが手向けだ』

(……アンジH……)

死の間際に思い浮かんだのは、彼女が最後に遺した言葉。

(……そうか。己は……)

人類の黄金の時代のため。

志半ばで倒れていった仲間達のため。

それらも決して間違いではない。

だがそれらは、ORCAの戦士として戦つてきた理由だ。  
カラードのリンクスに執着していた理由は、一つだけ。

己は、証明したかったのか。

彼女を倒したアナトリアの傭兵。そしてそれを打ち倒した、カラードのリンクス。

彼に勝てば、証明できると思ったのだ。

剣に固執した彼女を、不可能に挑み無様に死んだ愚か者だと笑う者達に。

銃に頼らず、只管に剣を振るい続けた彼女の想いが、間違いなどではなかつたのだと。

傭兵ではなく、騎士として在りたいと語つた彼女の願いが、美しいものであつたと。

力こそが全てのこの世界で、自らの信念を貫き通したその生き様が、尊いものであつた。

その彼女に憧れて戦い続けた己が、彼女から受け継いだ剣で人類の未来を切り開くことが出来れば

犬死にではなかつたと。

証明できるかと、思ったのだ。

だが、それは叶わなかつた。

この大事な局面で自らの我が儘のために戦い、しかし満足のいく結果は得られなかつた。

挙げ句その尻拭いを、守ると誓つた筈の相棒に押し付けることとなり、その結末すら見届けることが出来ない。

(……何も為せず、何も得られず、何も遺せず、何も守れず……)

このままでは、死にきれない。

彼女の用に、潔く避けそうもない。

あんなにも憧れていたのに、あの背中を追い掛けて、ここまで来たのに。

彼女のそれにはまるで及ばない、惨めな終わり。  
その未練が、寡黙な彼に最期の言葉を紡がせる。

「…無念…」

## 第1話 再誕（前書き）

ようやく出来た第1話。新生真改の、ある朝の1コマです。  
真改さんのキャラはほぼ捏造、設定だけパクったオリキャラと化してあります。

それでもいいといつて下さい。

## 第1話 再誕

ふと、目が覚めた。

枕元の時計を見ると、時間は午前5時の数分前。<sup>おれ</sup>いつもは5時に起きるので、目覚ましがなくとも習慣で起きる「<sup>おれ</sup>」にとっては誤差の範囲である。

（……懐かしい夢を見たな……）

「<sup>おれ</sup>」がまだ「井上真改」という少女でなく、「真改」という男であつたころの夢。

主観的な時間では、もう15年も前のことだ。

今日のちょっとした早起きは、昔の夢を見たことが原因かも知れない。そんなことを考えつつ、念のためにセットしてある目覚まし時計を解除する。

ベッドから起き上がり（個人的には布団の方が好みはある）、まずは今日の体調を確認する。夢の中の「<sup>おれ</sup>」の体は、爆発的な加速に耐えられるよう極限まで鍛え抜かれていたが、少女となつた今の体はなんとも華奢で頼りない。

しかし今日までに風邪の一つもひいたことがないことを考えると、見掛けによらず頑丈ではあるようだ。どうやら、今日も体調になんら異常はないようである。

タンスを開けてジャージを取り出し、寝間着から着替える。

己の服はほとんど妹達が選んでいるのだが、白地に黒のラインが入ったジャージはともかく、薄桃色のパジャマは正直勘弁して欲しい。「<sup>おれ</sup>」にお洒落とか言われても困る。

（……）

いつまでも考えていたつて埒が開かない、もつ慣れた（諦めた）ことだ、と無駄な思考を停止する。とにかく、日課を始めよ。タンスに立てかけてある竹刀袋に入つたままの木刀を手に取り外に出ると、入念な準備運動をしてから駆け出した。

「よひ、シン。おはよひ」

「……」

竹刀袋に入れた木刀を背負つて走り込みをしていると、同じようく木刀を背負つた少年に話し掛けられた。

織斑一夏。

己とは十年来の付き合いになる、所謂幼なじみである。

「相変わらず無口だなあ。挨拶くらいはした方がいいぜ」

「……」

返事をしない己に構わず話し続ける一夏を無視し、再び走り出す。いつもと変わらぬ己の様子に苦笑を浮かべ、一夏も己に続いて走り出した。

こいつはこいつからか、いつやつて己の鍛錬に勝手に付いて来るようになつた。

やめて欲しい。

別に一夏が嫌いなわけではない。むしろこの少年の、真つ直ぐで今

時珍しいくらいに男らしさとこころは好感が持てる。

问题是、こいつの体质（？）にある。

モテるのだ。異常なほどに。

こいつの魔の手（無自覚）に掛かつた少女は、己達の通う学校だけでなく、周辺の他校にも多数存在する。

そのことに、本人だけが気付いていない。己と一夏の共通の友人である五反田弾などは、一夏のことを朴念神などと呼んでいたが、言い得て妙である。

そんな一夏と行動を共にし、渾名で呼ばれる己には、周囲の女子からの強烈な視線が突き刺さるのだ。話すのが苦手な己が彼女達に上手い説明など出来る筈がなく、そもそもどう説明したところで聞きはしないだろう。

数ヶ月前に祖国に戻つたもう一人の幼なじみは上手く立ち回つていたが、己にはそんな真似は出来ない。

結果己は、一夏に好意を寄せる少女達から理不尽な対応をされ、一夏がそんな己を庇い、少女達の視線がさらに凶悪になる、という悪循環が出来上がっている。そして当然、こいつは自分が元凶であることに気付いていないのだ。

今こうして一人で走つているところを一夏を知る少女に目撃されようものなら、確実に厄介なことになる。

その危険を少しでも減らすべく、最近では走り込みの開始時間をさらに早めることを割と真剣に考えている。

「俺達ももう受験だな。俺は藍越学園を受けるつもりなんだけど、シンはどうするんだ？」

「……エス学園……」

走りながらの一夏からの質問に、素直に答えた。無視してもこいつは繰り返し尋ねて来るだろう。学校で聞かれることは避けなくてはならないので、このタイミングで聞かれたことはむしろ幸いと

言える。

「IIS学園? すごいな、シンは。剣もめちゃくちゃ強いし、シンならきっと殴かるよ。」

「……」

根拠のイマイチわからない信頼を寄せてくる幼なじみに、呆れを含んだ視線を送るが、気付いた様子は皆無である。

「人気あるもんな、IIS学園。女の子はみんなあそこを目指すもんなのか?」

「……」

まるで己が世間の流行に乗つて進路を決めたかのような言い方。確かにIIS学園には世界中から多くの受験者が集まり、倍率は凄まじいことになっている。

IISは、元々は宇宙開発を目的に開発され、その戦闘力の高さから軍事転用され、今ではスポーツとしての側面が強くなっている。また、女性しか乗れないという特殊性、IISの世界大会であるモンド・グロッソの出場者達のほとんどが、実力だけでなく容姿にも優れていたことなどから、IISをファッショニズムのように、IIS操縦者をアイドルのように見る風潮は、次第に強くなっている。それがIIS学園の受験者の増加、ひいてはIIS学園の生徒達の能力を更に高めることに繋がっているのも事実である。

だが己がIIS学園入学を目指す理由は、そんなミーハーなものではない。

己がIIS学園を受験する理由は、主に二つある。

一つは、IIS学園で優秀な成績を収めれば、将来がほとんど約束されること。幼い頃に両親を失い、孤児院に引き取られて生活している己は、孤児院に恩返しがしたいと常々考えていた。アルバイトを

すると申し出たこともあったが、

「子供はそんなことを考えなくていい。今は今しか出来ないことをしなさい。その手助けをするのが私たちの仕事なのだからね」と一蹴された。論戦で己に勝ち田などあらう筈もなく、己の歳では保護者の承諾なしにはアルバイトはできないので、早々に諦めることにした。

そこで考えた次の策が、ISの操縦者となることである。世界の軍事バランスそのものと言えるISの操縦者には、一般人には到底得られないほどの富と名誉が与えられる。ISの世界大会、モンド・グロッソで優勝でもすれば、あらゆるものが手に入るだろう。

当然、そこ至上までの道は険しいものだ。捕らぬ狸の皮算用と笑われても仕方ないが、戦うしか能がない己には、これくらいしか思い付かなかつたのだ。

もう一つは、単純に力を求めてのことだ。

なにかしらの問題があつたとして、暴力でもつてその対処にあたるのは愚の骨頂である。暴力は問題の根本的な解決は出来ず、それどころかさらなる問題を生み出す要因となる可能性が極めて高いからだ。

だが、暴力に対抗できるのは、暴力だけだ。力無き者がいくら声を上げようと意味はない。

暴力でもつて我欲を満たそうとする者から大切なものを守るためには、相手を超える暴力が必要となる。

そしてこの世界における最大の暴力は、言うまでもなくISである。かつて自身の無力により大切なものを失つた己が、それでも尚無力でいるなど許されない。

ISという「力」は、必ず手に入れなければならないのだ。

だがここで、一つ大きな問題がある。

並走する一夏に気付かれないよう、そつと視線を落とす。走るリズムに合わせて揺れる、ジャージの左袖。その中には、本来あるべきものがない。

(……こんな体で、『』までやれるものか……)

一夏はこの話題になると、途端に元氣をなくすのだ。これは『』が勝手にやつたことの結果であり、一夏が気に病むことではないと繰り返し言つてはいるが

そんな言葉に頷くような輩ならば、初めから罪悪感に苛まれはしない。

(……これも、『』の無力が招いた結果か……)

思えば、剣道を学んでいる一夏が稽古に一層熱を入れ始めたのも、己が左腕を失つたからだ。

まるで自らを罰するかのように稽古に打ち込む姿には鬼気迫るものがあり、剣の腕も異常な速度で上達している。

普段は普通にしているが、見えないとひどれだけ無茶な鍛錬をしてしているか、わかつたものではない。

『俺、強くなるから。シンのことも、千冬姉のことも、みんなのことも守れるくらいに、強くなるから』

病院のベッドに臥せる『』の隣で、懺悔するように紡がれた、誓いの言葉。

一夏が『』の鍛錬について来るのは、『』を打るには『』よりも強くなら

なくてはいけないと思つてゐるからなのかもしない。  
あまりに純粹で優しい、この少年らしい思いではあるが、己には一つ、懸念がある。

お前の言つ「みんな」とは、どれだけの人々を指してゐるのか。

全てを守ることなどできはしない。

己を倒した男も、あれほどの圧倒的な力を持つていながら、「現在」を守るために「未来」を生贊に捧げた。  
どれほどの力があろうと、全てを守ることは不可能だ。  
だが一夏は、それを本氣で目指しているように見える。  
そして、不可能を追い続けた者の末路を、己は

『 誇つてくれ 』

「 シン~おい、シン!~」  
「 ッ……」

焦つたような声で、意識を現実に引き戻される。  
目の前には、心配そうな幼なじみの顔。

「 大丈夫か? どうしたんだよ、突然ぼーっとして。なんか顔色も悪いし、今日はもう切り上げて  
「 ……無用……」

不覚。

一夏に呆けた顔を見られた、ことではない。  
己は今、「彼女」のことを

「ツ……！」

頭を振り、先程の考えを搔き消す。

己の「彼女」に対する思いは、今もなお微塵も色褪せてはいない。あの頃と変わらず、己は「彼女」の背中を追い続けている。銃弾やミサイル、レーザーが飛び交う戦場を、剣でもつて切り抜けてきた「彼女」。

時代遅れの戦い方にこだわり続け、傭兵でありながら決して企業に媚びることなく、自らの魂にのみ従つた「彼女」の人生に憧れ、己は剣を振り続けている。

しかし五体満足でも「彼女」の足下にも及ばない己が、片腕で「彼女」に追いかけることができるのか。

そんな不安が、「彼女」を侮辱するような考え方を呼び起した。

(……ふざけるな……)

左腕のことは後悔していないなどと言ひながら、こんなにも未練があるではないか。そななものは何の役にも立たない。

悩む暇があるのなら、失った左腕を補うだけの鍛錬をしなければならないというのに。

(……何を、弱気になっている……)

かつて自分達が駆つたものとは似て非なる未知の兵器に片腕で挑むことが、そんなにも恐ろしいか。嵐の様な銃撃にも臆することなく切り込んだ己が、なんたる体たらく。

屈強な肉体を失つた今、精神すらも鎧び付けば、己に何が残ると言

うのだ。

無様な最期を迎えた昔の夢を見たせいか、どうにも思考が悪い方に流れてしまつ。

「いつこいつ時は、走るに限る

「……競争……」

「くつ？て、おこちよつと待て、卑怯だぞシン

「……」

目的地は、毎朝素振りをするのに使つている公園。  
自らを叱咤するべく、いまだに心配そつな顔をしている一夏を置き去りにして、全力疾走を開始した。

## 第1話 再誕（後書き）

真改さんの背負うハンデは、全開だと少し強すぎると思つたからです。

なにせ本人は参加していないとはいえ、たった26機で世界中の國家を解体した兵器のパイロットだったわけですから。

彼女が一夏くんと一緒にIFS学園に入学するのは、もう少し先です。

## 第2話 ある朝の「J」と（前書き）

第2話は、1話の一夏視点です。

一夏から見た真改さんは、無口でカッコいい剣士。

コミュニケーション能力皆無な真改さんと、立てた旗の数も折った旗の数も天下一の一夏くんは、もしかしたら結構いいコンビかもしれません。

## 第2話 ある朝の「」

「よへ、シン。おはよひ」

「……」

日課である早朝のランニングをしていると、俺と同じよひで走る幼なじみの姿を見つけた。

俺の挨拶に一瞥をくれただけで返事もせずに走り続けるこの少女の名は、井上真改。

重要文化財に指定されるほどの大業物を鍛え上げた、江戸時代の刀工と同じ名前である。

彼女の親が一体何を考えて娘にそんな名前を付けたのかはわからないうが、この寡黙で質実剛健を地で行く少女には似合っているようだと思ふ。

「相変わらず無口だなあ、挨拶くらいはしたほうが多いと思つぜ」「……」

初めて出会ってからの10年間、何度も言い続けて来たことだが、いまだにこいつから「おはよう」と言わたることはない。変わらない幼なじみの様子に苦笑を浮かべて、結構なペースで走り続ける背中を追い掛ける。

真改は、俺こと織斑一夏の幼なじみであり、俺は彼女のことシンと呼んでいる。

背は俺より少し低いくらいで、同年代の少女の中では高めだ。体つきは華奢だが、猫科の猛獸のような瞬発力を秘めている。腰まで真っ直ぐに伸びた綺麗な黒髪を本人は邪魔に思っているが、彼女の妹達により、いまだに切られることなく良く手入れされてい

る。

整った顔立ちに、刃のような鋭い眼差しが印象的で、十分美少女と言える容姿なのだが、その寡黙に過ぎる性格からか浮いた話は全く聞かない。

「俺達ももう受験だな。俺は藍越学園を受けるつもりなんだけど、シンはどうするんだ？」

「……IS学園……」

正直答えが返ってくるとは思ってなかつたが、答えの内容そのものはそれほど意外なものではない。

IS学園は女子に非常に人気があり、剣士として並外れた技量を持つシンが、それを活かすためにIS操縦者を目指すのは自然な流れだろう。

「IS学園？ すごいな、シンは。剣もめちゃくちゃ強いし、シンならきっと受かるよ」

「……」

そう、シンは強い。

俺は小学生の時に学んでいた剣術を一旦は辞めたものの、中学生になつてから改めて剣道部に入った。俺と千冬姉にはシンとはまた違つた事情で両親がいないが、第1回モンド・グロッソ優勝者である千冬姉のおかげで、経済的にはかなり恵まれている。

いずれ自分の力で金を稼げるようになるために卒業後の就職率が高い藍越学園を受験するが、今は自分の目的のため甘えさせて貰つている。

人一倍鍛錬に打ち込んで来た自負はあるが、才能にも恵まれていたのだろう。去年と今年、剣道の全国大会で二連覇を果たし、高校生相手でもそつそつ負けはない。

それでも、シンにはまるでかなわない。

毎日のように打ち合いでしているが、まだ一度も勝てていない。

シンは千冬姉と並ぶ、俺の目標の一つなのだ。

「人気あるもんな、EIS学園。やつぱり女の子は、みんなあそこを  
目指すもんなのか？」

「……」

やつぱり返事をしないシンに一方的に話し掛けながら、陸上選手も  
びっくりなスピードで走り続けるシンについて行く。

（まつたく、そんな細つこい体のどこにそんなスタミナがあるんだ  
よ）

俺の目標であり、憧れでもあるシンが、世界最強の兵器であるEIS  
を学ぶため、EIS学園を受験する。

嬉しくないわけではない。シンが自分の望みを話してくれることが  
ど、滅多にないのだから。

だが。

（どんどん遠くに行つちまつなあ）

EISは、女性にしか反応しない。

男である俺には、どう足搔いたところで動かせはしない。世界を変  
えるほどの最強の力、それを俺は、決して手に出来ないので。

（シンを守るつて大口叩いといて、情けねえな……）

追い続けた目標が、絶対に手の届かないものとなつた。目標は高い

方がいいとは言つが、ものには限度つてものがある。  
だがそれでも、諦めるつもりはない。

シンが工学園を田指すのは、予想していなかつたわけではないし、  
なによりも

その程度で折れるほど、柔な決意をしたつもりもない。

俺は俺にやれることをやるだけだ、その内希望も見えてくるが、と、  
自分でも楽天的と思つことを考えていたら、ふと、シンがどこか上  
の空なことに気付いた。

心なし、表情もいつもより険しい。

「シン? おー、シン……」

「ツ……」

心配になつて顔を覗き込むと、珍しく驚いたよつなするシン。

ちょっと可愛い、と思つたのは秘密だ。

「大丈夫か? やつしたんだよ、突然ぼーっとして。なんか顔色も悪  
いし、今田はもう切り上げて」

「……無用……」

心配はいらない、といつことだらうか。

シンはほとんど喋らないし、喋つてもかなり短いが、それだけで大  
体の意味は通じる言葉を口にする。

一言で足つる場面でしか話をないとも言つが。

とにかくいつもの様子に戻つたシンは、

「……競争……」

と呟くと、突然ダッシュを開始した。

一瞬呆ける俺。

そして、今の言葉をようやく頭が理解した。

「へ？て、おいちょっと待て、卑怯だぞシン

ー！」

目的地は恐らく、いつもの公園だろう。

そこで素振りをしてから再び走つて帰る、というのが、いつもの朝の流れである。

若干フライング氣味に走りだしたシンを慌てて追い掛けながら、俺の顔は自然と笑っていた。

剣の技量では足下にも及ばないが、純粹な体力勝負で女の子に負けるなど、男の意地プライドが許さない。

（絶対に、勝つ！）

体も大分温まつて來た。

ここはひとつ、全力勝負といつじやないか

ー！

（498、499、500、501、502、……）

シンとの競争のゴール、名前も知らない小さな公園に着いた俺達は、

それぞれが背負っていた竹刀袋から木刀を取り出し、素振りを始めた。

先ほどの競争は、僅差でシンが勝つた。

シンはフライングしたからな、同時に走り出してれば俺が勝つてた、と男らしくない言い訳はない。しないつたらしない。

俺が使う素振り用の木刀は特注品で、芯に鉛が仕込んであり、かなり重い。

これを使い始めたころはふらついていたが、慣れた今は普通に振れるようになった。

部活の仲間が俺を化け物でも見るような目で見るようにもなった。

( 622、623、624、625、626、…… )

黙々と素振りを続けながら、ちらりとシンを見る。

シンが使っているのは普通の木刀だが、女の子の細腕、それも片腕で振るには十分重いはずだ。

だがその切っ先には微塵もブレもなく、見事な剣閃を描いている。素振りひとつとっても、技量の違いがこれほどはっきり出る。シンに追いつくのは、まだ遙か先のことになるだろう。

( 704、705、706、707、708、…… )

眩い朝日が、二人しかいない公園を照らす。周囲の家からは少しづつ朝の生活音が聞こえ始め、木刀が風を切る音に混ざる。実に清々しい朝。今日は、きっと良く晴れるだろう。

( ..... 800、801、802、803、804、..... )

一振り”と銳く息を吐き出し、必殺の意思を込める。

素振りをする際には剣の軌跡や足運びだけでなく、一振りに込める

気迫こそが重要だ。

どんなに上手いフェイントも、そこに殺氣がなければ達人相手には容易く見切られる。

命を懸けた遣り取りでは、お互の体力、技術、そして精神が勝敗を分けるのだ

というのが、シンからの受け売りである。

(908、909、910、911、912、……)

両腕はもうパンパンで、握力も限界が近い。

歯を食いしばりながら素振りをする俺とは対照的に、シンは相変わらずの無表情だ。

いや、良く見ると、その口元が、ほんの少しだけ緩んでいる。

十年の付き合いがある俺でも、どうにかわかる程度の表情の変化。これがシンの笑顔であり、彼女が笑うのは剣の稽古をする時と、彼女が育てている花壇の世話をするときくらいだ。

無口・無表情・無愛想の三拍子が揃っているのが、井上真改という少女なのである。

「……1000…ふはあ、どうだ、よつやくこいつを千回振つたぞ  
！」

「……次は一千……」  
「……<sup>スバルタ</sup>ですな真改さん！？」

特注品の木刀を千回振ることは、シンからの宿題である。

数ヶ月前にこの木刀を作ったとき、シンは感触を確かめるよう一回振ると、ぼそりと

「……千回振れ……」

と言つたのである。

正氣がコイツ、とも最初は思つたが、いざ初めてみると振れる回数がみるみるうちに多くなり、同時に腕も引き締まつて行つた。そして今日、念願の宿題達成と相成つたわけだが、真改先生は褒めるどころかさらなる宿題を出して來た。

(この調子で一万回振れとか言い出さねえだろつな……)

シンなら言いかねない。彼女は割と精神論者なのである。

「さてと、もういい時間だし、そろそろ戻るわ」  
「…………」

俺はこれから帰つてシャワーを浴び、朝食を作つて食べ、学校に行く準備をしなくてはならない。

シンは料理はしないし出来ないが、毎朝花壇の手入れをしている。彼女が住む孤児院の花壇はそれなりの広さがあつて見事に花が咲いており、近所では評判になつている。

当然、手入れにはそれなりに時間を掛けるので、あまり帰るのが遅くなると学校に間に合わなくなる。

「よい、しようと

疲労からかいつも以上に重い木刀を竹刀袋にしまつと、背中に背負つて走り出す。

息は多少荒いが、来たときよりも速いくらいのペースでしばらく走り、いつもの場所でぐるりとシンの方を向き、

「じゃあ、また学校でな

「……」

いつもの別れの挨拶をして、それぞれの家に帰つて行つた。

## 第2話 ある朝の「J」と（後書き）

真改さんが花を育てる理由はまたいづれ。  
次回は「J」世界における真改さんの初陣です。

### 第3話 入試（前書き）

真改の入学試験。

試験会場については捏造です。

### 第3話 入試

「……すげえ大きさだな」

「……」

「己」と一夏が並んで見ているのは、本日それぞれが受験するE.S学園と藍越学園、その他多くの学校の入学試験が行われる多目的ホールである。

なぜこんなにも巨大な場所を用意する必要があったのかは不明である。

まず目的の試験会場に辿り着くことが第一の試験とでも言つのか。

「うし、じゃあ行くか。お互い、頑張ろうぜ」

「……」

試験前最後の1ヶ月間は朝の鍛錬をせず、お互いの勉強に集中していた。

もつとも「己」は実技試験があるので、その訓練は続けていたが。

そして一夏も、1ヶ月も鍛錬を削つて作った時間を無駄にする「己」となく猛勉強を続けていた。

「……一夏……」

「んあ？」

流石に緊張しているのか、どこかそわそわしている様子の一夏に声を掛ける。

己に名前を呼ばれたことがそんなに意外だったのか、間抜けな声を出す一夏に向けて、拳を突き出す。

「……勝つて」「……」

「……ああーー！」

ガツン、と互いの拳をぶつけ合い、それぞれの会場へ歩いて行つた。

(……こいか……)

手元の試験案内と田の前の扉のプレートを見比べる。己が今日受けるのは実技試験。

筆記試験は先日済ませており、手応えも十分だ。

生まれた時から精神的に成熟し、コツコツと勉強を続けていた己からすれば当然の結果ではある。

ネクストのパイロット、リンクスにも、ISのそれに匹敵する知識が求められるのも理由の一つだ。

扉のノブに伸ばした掌にうつすらと汗が滲んでいるのを見て、自分が柄にもなく緊張していることを知る。

(……一夏のことば言えんな……)

深呼吸をひとつしてから、扉をノックする。

「……入ります……」

面接試験ならば絶対にNGな声で断りを入れ、ガチャリ、とノブを

回して扉を開けた。

「あ、受験生の子？ それじゃあ、向こうで準備して。すぐに試験が始まるから、急いでね」「……」

受付と思われる女性に言われるまま、準備を始める。中学校の制服からIJSースに着替え、起動準備状態のIJS、打鉄に向き合つ。

打鉄は、日本のIJS開発業者、倉持技研が開発した第一世代型量産機だ。

防御重視のバランスの取れた性能に、様々な距離と状況に対応出来る充実した武装。

クセがなく扱い易いので、IJSパイロットの育成を主に世界中で使われている、デュノア社製のラファール・リヴィアイブと並ぶ名機である。

己も何度か乗る機会に恵まれてはいるものの、本格的に動かすのは今回が初めてだ。

打鉄に乗り込み、機体に背中を預ける。かしゅ、という空氣の抜けるような軽い音と共に、装甲が体に密着する。

パワードスーツであるIJSは、パイロットの体に連動して動く。当然、左腕のない己は打鉄の左腕を動かすことはできない。

実技試験の内容は、IJS学園の教官と戦うこと。

『なるほど、適性はあるようだな。

認めよつ。

今この瞬間から、君はリンクスだ

』

かつて、異世界における最強の兵器、ネクストを操っていた己の、生まれ変わってから最初の戦いが始まる。

「始まる、な」

IJS学園の試験会場を一望できる採点者席から、これから始まる戦いの様子を眺める。

対戦カードは、私の後輩にして元日本代表候補生、山田真耶と、私の実の弟、織斑一夏の幼馴染みである、井上真改。

山田君の実力は良く知っているが、井上については未知数だ。

井上に初めて会ったのは十年前。親のいない私達姉弟は孤児院経営者の唐沢さんに招待され、私はそれを受けた。

一人で一夏を育てる決意をした私は、一夏を親のいない子供達と触れ合わせて一種の情操教育をすると同時に、一夏を育てていくためのアドバイスをしてもらおうと考えたのだ。

唐沢さんは世間を知らない小娘の身の程知らずな決意を笑うことなく、むしろその思いに真摯に応え、将来に向けた様々な助言をくれた。

余裕を無くし、触れたもの全てを切り裂く抜き身の刀のよくなつていた当時の私にとって、その数時間の会話はまさに救いだった。

「今日はありがとうございました」

「ひづらこそ、また来てくれる嬉しさ。若い子の話はすく参考になるし、楽しいからね」

孤児院の玄関を開けると、夕暮れの中、元気にはしゃいでいる子供達の姿。

両親を失い、行き場を見失つて心に深い傷を負つた幼い子供達が、あんなにも楽しそうに笑っている。

人の心を癒やすことがどれだけ難しいか、私は身を持つて知つている。

あの子達の傷も完全に癒えたわけではないだろうが、ああして笑えるというだけで、その成果は素晴らしいものだ。

と、そこで、孤児院前の広場の一角にある花壇で土いじりをしている、弟と同じくらいの歳の黒髪の少女を見つけた。

自分でも、その子に何を感じたのかはわからない。だが、なんとか気になつたのだ。

「あの子は井上真改。先月、交通事故で家族を亡くしてね。うちで引き取つたんだ」

広い花壇を、時折肥料を混ぜながら、小さな手に持つた熊手で一心に耕しているその少女に、何を感じたのか。

私は、思い切つて声を掛けてみることにした。

「」

「……」

返事がない。

無視されていいるわけではなく、少女は一寸手を止めて「ひりを一警してから、視線を戻してまた土いじり始めた。

「ええと……。

私は、織斑千冬といつ。君の名前は？」

「……」

やはり、答えは返つてこない。

私は不安になつた。

この子は、その事故のショックで、言葉を失つたのではないか。

「この子は、もしかして……」

「いやあ、君が考へてる「ひと」は、多分違つと想つよ。

真改はたまにだけど、ちゃんと話すし。」「

唐沢さんの言つ「たまご」とこののは、本当に稀なことなんだろうと、根拠もなく確信した。

「多分、私が君に名前を教えたのが聞こえてたんじゃないかな。知つてることを改めて聞くな、つてことだと想つよ」

「そう、ですか……」

そんなことを語じてから、子供達と遊んでいた一夏がとことこ走つて來た。

「千冬姉、もう帰るの？」

「え、ああ、そうだな、そろそろ暗くなるし、もう帰るか……」「そつか……。

あれ、アイツは?」

「ああ、あの子は……」「……」

私が答えるより早く、一夏は少女のところに走つて行く。

「おー、イチ」

「まあまあ、子供同士の会話は大事だよ。

ちよつと見ていいよ！」

見る人を安心させる、ほんわかとした笑顔を浮かべながら少女は、とを言う唐沢さん。

その言葉に従い、しばらく見守る」とである。

「なあ、お前、なにしてるんだ？」

まずは皿山紹介から始めんか！――

あまりにもあんまりな第一声に怒りと呆れが湧いてくるが、一夏は我慢だ。

ちなみに唐沢さんは、まつまつまつ、と笑っている。

「なんだこれ、花壇か？なにか植えるのか？」

「……」

「向こうでみんなと遊ばないのか？。一人じゃつまんないだろ？」

「……」

「なんか言えよな。返事はちゃんとしなやこって、千冬姉が言つて

たぞ」

「……」

話し続ける一夏に対し、無言を貫く少女。  
無口にもほどがあるだろ？。

「あ、そういえば、初めて会う人にはまず自己紹介しなさいって、千冬姉に言われてたつけ」

「……」

「俺は、織斑一夏。」

真っ直ぐに少女を見て、一夏が名乗りを上げる。

「お前は、なんて名前なんだ？」

続く問いに、少女は作業を止め、一夏を真っ直ぐに見返して、自らの名を口にした。

「井上真改」

それが、私達織斑姉弟と、井上真改との出会いである。

(111まで付き合いが続くとはな)

あの頃から、容姿以外はまるで変わらない。

極めて無口な性格からは想像もつかないほどに熱い魂を秘める井上

が、「力」を求めていたことは知っている。

その理由を語るつとはしないが、想像するのは容易い。

生身での戦闘技術においてはすでに私と並ぶほどであり、私が井上に勝てているのは体格差と、井上が片腕だからでしかない。

(だが、ISでは生身のよつにはいかんぞ)

眼下には、動作を確かめるように、機体各部を動かしている井上の姿。

右手にはやはり、接近戦用のブレードを持つている。

(見せてもらひづれ、お前の力を)

そして、試験開始のアナウンスが響き渡った。

『それでは、試験を開始してください』

試験開始のアナウンスが響くが、すぐには攻撃しない。

今回の受験生は千冬先輩の弟さんの幼なじみで、剣の腕前はある千冬先輩が褒めるほどのらしいが、ISでの戦闘は今回が初めてと聞く。しかしISでの戦闘経験がある受験生なんてどこかの国家代表候補生くらいのもので、ISに触ったこともないという受験生の方が多いくらいだ。

なので、まずは様子見、受験生が多少は操作に慣れてきたころを見

計らつて、小突くような攻撃から始めるのが私の試験である。

目の前の少女は、最初に私を一瞥しただけで、今はこちらを見もせずに機体の調子を確かめている。

展開したブレードを振つたり、軽くスラスターを噴かせてみたり。そんな様子を見ていると、ひとつ気付いたことがある。

（本当に、左腕がないんだ……）

ふと、少女がこちらを見、不意打ちぎみに突撃して来た。  
いきなりの拳動に少し驚くが、ブレードを展開している以上接近戦を挑んでくることは予想済みなので、下がりながらアサルトライフルを撃つ。数は少ないが、狙いは正確に。

受験生の対応を見るための攻撃だ。

さて、この子はいつたいどうするのか。  
銃弾を避けるか、装甲まかせな突撃か、それとも判断が間に合わず  
に、棒立ちになるか。

大抵は、そのいずれかだった。だが目の前の、刃のような鋭い瞳で  
私を見る少女は、全く予想外の行動をとった。

あらうことか、ブレードで銃弾を切り落としたのである。

「え、ええー？」

当たらない弾は完全に無視、当たる弾だけを切り捨てながら、一層速度を上げて突っ込んでくる。

いまだかつて見たことのないトンテモない対応にびっくりして動きを止めてしまった私は、あつという間に問合ひを詰められ

ブレードの一撃が、ラファール・リヴィア イブの装甲に叩き込

まれた。

(……浅い……)

銃弾を切り落とすという、動作の精密さの確認を兼ねた行動で試験官の驚愕を誘い、その隙に接近、一撃を見舞つたまでは良かつたが

(……やはり、貫けぬか……)

HSのパワーアシストを片腕分しか受けられない己では、どうしても攻撃が軽くなる。

既存の兵器の中でも飛び抜けた防御力を誇るHSの皮膜装甲スキンバリヤーを破るには、片腕の斬撃では足りない。

そして先ほどの奇策は、一度は通用しない。

(……もとより、策を練るほどの頭もない……)

ならば、実力で近付いてみせよ。

驚愕から立ち直り、油断のない眼で己を見る試験官。

己には様子見など無用と判断したのだろう、向けられる銃口はふたつに増え、そこに込められているのは、紛れもなく戦意である。

(……ここからだ……)

己は何を為せるのか。  
己は何を得られるのか。  
己は何を遺せるのか。  
己は何を守れるのか。

己の剣は、果たして「彼女」に届くのか。

全ての答えは、この道の先にあるかもしない。  
この一戦は、スタートラインに立つためのものでしかない。

(……必ず、勝つ……)

放たれる弾丸は、苛烈にして精密。  
スラスターを噴かせて回り込みながら、己は一度目の突撃を開始した。

(さっきのは驚いたけど……)

ブレードの直撃を受けたにもかかわらず、シールドエネルギーはそれほど減っていない。  
やはり片腕では、攻撃力に限界がある。

（銃が得意だつたなら、また違つたんだらうけど……）

手に持てる銃器はひとつだけだが、そのひとつを大型のものにしたり、他にも肩に装着するタイプのものもある。いずれにせよ、剣一本よりはやりようがあつたはずだ。

あるいは。

（片腕のハンデを補うくらい強力な武器があれば、もしかしたら…）

思い出すのは、私が尊敬し、憧れる先輩の姿。彼女の振るう剣は、触れただけで相手に致命的なダメージを与える、絶対的な威力があった。

あれに類する武器をこの少女が手に入れたら、きっと凄まじい使い手になるだろう。

とにかく、この少女を相手に油断は禁物だ。

試験だからと気を抜いていると、負けるのは私のほうだ。

受験生は試験官に負けても合格できるが（というより勝つ者はほとんどいない）、この試験は先輩も見ているのだ。

無様なところは見せられない。

左右の手に持つたアサルトライフルを連射する。

井上さんは、蛇が地を這うような機動で銃弾を回避し、時にブレードで弾丸を切り捨て、あるいは弾きながら接近してくる。私は下がりながら撃ち続けるが、足止めにもならない。

接近、剣の間合い。

「ぐう……！」

「…………」

一撃でダメなら連撃、そう言わんばかりの猛攻。

私も咄嗟に展開した接近戦用ブレードで応戦するが、剣の技量では相手にならない。

どうにか凌げてこるのは、彼女が片腕だからに過ぎない。

(なんとか、距離をとらなこと………)

グレネードを展開し、足元に発射する。

爆風と破片でダメージを受けるが、それは井上さんも同じだ。爆風に押される形で間合いが離れ、その勢いのまま距離をとる。武装をマシンガンとショットガンに変更、正確さよりも弾幕で接近を阻む戦術。

その武器を見た、井上さんの判断は一瞬だった。

避け切れないとみるや、多少の被弾を気にせず、最低限の回避と防御で一気に突っ込んで来たのである。

(そんな、なんて強引な………)

だが、理に適つている。

近付かなければならぬ以上、どこかでダメージを受ける覚悟が必要になつてくる。

ならばそれは、少しでも消耗が少ない、早い方がいい。

(それにしたつて、弾幕に飛び込むことを少しも躊躇わないなんて

……)

人は傷付くことに対し、本能的な恐怖を持っている。

いくら装甲に守られているからといって、銃火器という十分過ぎる殺傷力を持つ兵器に対し身を晒す恐怖は、私でも拭いきれない。

それをこの少女はやつてのけた。

死や痛みを恐れない狂人でも、根拠もなく自分は大丈夫と考えている愚か者でもない。

死ぬことの恐ろしさも、傷付く痛みも良く理解した上で、それでも勝つためにあえて危険を犯す

彼女は、戦士だ。

(だけど、私だって!)

確かにその剣技や判断力は凄まじいが、ISの扱い自体はまだ未熟だ。

近付くにつれて、被弾率が上がっている。

着弾の衝撃に機動を阻害され、前進も回避も鈍くなっている。

マシンガンとショットガンの集中砲火を受け、井上さんの機体にダメージが蓄積していく。

グレネードの爆発によるものと合わせれば、そろそろ限界が近いはずだ。

それでも、井上さんはかなり距離を詰めてきている。

もう一度だけ、彼女の猛攻を凌がなければ、私の負けだ。

グレネードをいつでも展開出来るように準備する。

さつきと同じ方法が通用するとは思えないが、正攻法で凌げるものでもない。

(さあ、最後の……！？)

井上さんは、連撃を仕掛けて来る。

片腕しか使えず、十分なパワーアシストを受けられない以上、一撃ではISの防御力を突破できないからだ。

その認識は、余りにも甘かつた。

銃弾を受けながらも突撃して来た井上さんは、間合いに入る直前、背中と両足のスラスターを使い、前進しながら高速で回転し始める。機体の重量、突進の勢い、回転の遠心力、スラスターの推進力。それらが、左腕を補つて余りある威力をブレードに与え。

「ツ……！」

私の首目掛けて、刃が振り抜かれた。

己の最後の一撃は、試験官が刃の軌道上に咄嗟に滑り込ませた銃身に威力を減殺され、仕留めるには至らなかつた。

無茶な機動の反動で硬直している隙に、ひしゃげて使い物にならなくなつた銃に変わつて取り出した一丁のアサルトライフルの連射を浴び、シールドエネルギーが底をついた。

(……昔、似たような負け方をした気が……)

あと一步まで追い詰めたが、結局は負けた。

「己は、スタートラインに立つことすら出来なかつたのだ。

「お疲れ様でした！井上真改さん、でよかつたですよね？すごく強  
いですね！」

「…………」

試験官が晴れやかな笑顔で話し掛け来るが、己はもう関係ない。  
さてこれからどうするか、と考えていたら、

「左腕のことがあるので心配でしたけど、これならきっと合格です  
よー。」

試験官のその言葉で思考が停止した。

「あ、あれ、どうしたんですか？  
そんなに驚いた顔して……」

「…………負けた…………」

己の返答に、試験官はキョトンとして、

「試合の勝敗で合格不合格が決まるわけじゃないですよ。  
まあ当然、勝つたほうがいいですけど」

え、 そうなの？

「HISを学ぶためのHIS学園の入学条件が、 HIS学園の教官に勝つ  
」とじや 本末転倒じやないですか

「…………」

「………… 言われてみれば、確かに。」

じゃあなんだ、「己」は勝つ必要のない勝負に、あんなに必死になつて  
いたのか？

初撃に姑息な奇襲まで使って？

「け、けど、井上さんは腕のこともありますし、評価は他の受験生  
より厳しくなりますから、あれくらいの試合内容のほうが……」

「……」

己の様子から心境を正確に読み取つたのだろう、試験官が慰めの言  
葉を掛ける。

なるほど確かに、片腕というハンデがある以上、アピールポイント  
は多いにこしたことはない。

どうにか気を取り直した己に、試験官が笑顔で告げる。

「試験はこれで全て終了です。

お疲れ様でした、合格発表は後日になります。今日は帰つて、ゆつ  
くり休んでください。途中、事故などに気を付けてくださいね、家  
に帰るまでが試験ですから」

「……」

お決まりの台詞を口にする試験官に頭を下げ、試験場を後にする。  
やれることは全てやつた、後は結果を待つだけだ。

妙な達成感のある疲労を感じながら、「己」は帰り支度を始めた。

「す」いですね、彼女。さすが、織斑先生が言つだけはある

隣で先ほどの井上の戦いぶりを評価している同僚の言葉に、私も同意する。

「私も、まさかこれほどとは思つていませんでした」

井上の剣の腕は知つていたが、あの動きは鍛錬や才能だけでは到底説明が付かない。E.S.か生身かは別にして、銃火器で武装した敵との戦闘経験が、豊富にあることは確実だ。

孤児院暮らしの少女が、いつたいいつどいでそんなものを身に付けたのか。

（お前は、何者なんだ）

弟と仲のいい少女。

元世界最強という私のことを考えれば、一夏の利用価値は計り知れない。

自然、一夏の交友関係には気を配つていて。そんな一夏の幼なじみであり、普通の人生を送ってきた筈の少女が、初の戦闘で歴戦の戦士を追い詰めるほどの戦いを見せた。

疑うなというほうが、無理がある。

心情では、私は井上を信じたいと思つてゐる。

思い出すのは、数年前。

第2回モンド・グロッソ決勝戦直前で、一夏が誘拐されたという報せを受け、一夏が捕らわれているという廃工場に向かつたとき。

そこには、一夏と一緒にモンド・グロッソの観戦に来ていた、井上真改の姿があった。

周囲には銃で武装した男達が倒れていた。一夏誘拐の犯人達だろう。そして、氣絶している一夏を背に庇い、彼女が立っていたのだ。左腕を失い、激痛と大量の出血で一時的に視力をほとんど失つていたのだろう、その瞳は焦点が定まっておらず、突然現れ、IS「暮桜」に乗った私を敵だと思ったようだった。

そしてそんな、今にも死んでしまいそうな体で。いまだ幼く、なんの武器ももっていないその身で。世界最強の兵器の前に、立ちふさがつたのだ。

井上が、その生涯のほとんどを剣に捧げてきたことを、私は知っている。

彼女が左腕を失うことで受けた痛みは想像を絶する。それでも彼女は、いまだに一夏の良き友人でいてくれている。

そんな彼女を、私は疑わなければならない。

(こんなことなら、見なければよかつた)

そうすれば、まだ彼女を信じ続けていられたのに。

「次の受験生が来ましたよ。時間からすると、これが最後ですね」「ええ、そうで、す……ね……」

同僚の声で意識を現実に戻し、試験場を見た私は絶句した。

なぜならそこには。

女性にしか動かせないはずのエスを動かしている、私の弟の姿が

採点官全員の悲鳴が、観戦席にこだました。

### 第3話 入試（後書き）

✓ s 山田先生は真改の負け。

✓ s 首輪付きに続き2連敗です。

千冬さんの回想シーンで出てきた真改の孤児院の経営者ですが、名

前はもちろん、アレからですwww。

次回、いよいよIS学園入学。

一夏と真改の新たな活躍にご期待下さい。

## 第4話 初日（前書き）

IIS学園初日の午前のお話。  
女子高生真改の登場です。

## 第4話 初日

前の席に座る、幼なじみの背中を見る。

教室中から視線が集まりかなり居心地が悪そうだ。

かくいう己も、一夏の背中に視線を送っている一人である。視線に込める思いは他とは大分違うが。

(……馬鹿が……)

2ヶ月ほど前、己と一夏はお互いの合格を約束し合い、高校の入学試験に臨んだ。

二人とも合格だつたので、一応、約束は果たしたと言えるが

(……まさか、会場を間違えるとは……)

馬鹿だと知つてはいたが、認識を改める必要がある。

「こいつは、大馬鹿だ。

「全員揃つてますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

壇上の副担任が明るい声で話している。己の入学試験の試験官だつた女性だ。

あの時は歳不相応に幼い外見からは想像も付かないほどの霸氣を發していたが、いまではそれもなく、己達と同年代と言われば信じるだろう。

名前は、山田真耶と言つたか。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

はにかみながらの元気な挨拶には好感がもてるが、返事はない。

残念なことに、現在この教室内の興味は、己の前の馬鹿が独立して  
いた。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

本日教え子になつたばかりの生徒達から総スルーを受けるという惨劇にもめげず、なんとか流れを作り出そうとする山田先生。流石に  
今回は無視されず、生徒達は自己紹介を始めていった。

『あ』から順番にけば、『井上』の番はすぐに来る。

山田先生に促された己は覚悟を決めて立ち上がり、教室をぐるりと  
見回してから言った。

「……井上真改……」

着席。

うむ、どうやら最初の関門は突破したか。

「…………」「…………」「…………」

「…………ええつと、じゃ、じゃあ、次の人お願ひしますー。」

全方位から突き刺さる「なんだそれは」という思いが込められた視線をものともせず沈黙し続ける己に恐れを成したのか、山田先生は次の生徒を指名した。

そして一夏の番になつたが、なにやら考え方をしているのか、反応がない。

ほつ、教師からの指示を無視か、己である名前（だけ）を名乗った  
といつのに、良い度胸じゃないか。

「うひい！？」

思わず漏れ出た殺氣にあてられ、一夏が奇声を上げる。

途端に、教室のあちこちから聞こえる、くすくすといつ笑い声。

「『』、ごめんなさい、あの、あのね、自己紹介、『あ』から始まつて今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、『』、「メンね？」自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……つていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

「ええ、ホントにしますから、もつ謝らないでトモコ」

山田先生とのコントを終えた一夏は立ち上がり、その場で振り向いた。

教室の中央最前列の席に座る一夏は、後ろを向けば教室内の生徒全員を見渡せるのだ。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願ひします

ペコリと頭を下げる一夏に、続きを期待する視線の十字砲火が浴びせられる。

その物理的な圧力すら感じさせる視線に気圧されて口を開いた一夏に、皆の期待が一瞬高まつた。

彼女達は知らない。この織斑一夏という男は、己の眼力を持

つてしても計りきれない、大馬鹿者であるといひことを。

「 以上です」

がたたつとずつこける音がある。

それに、教室の入口を開ける音が混じっていることに気付いた。

見れば、クラスメイトの反応が意外なのか不本意なのか、微妙な顔をしている一夏の後ろに、見慣れた長身の美女の姿が。

パアアン！！

一夏の頭から、凄まじい音がした。

その衝撃に覚えがあるので、驚愕と困惑が入り混じった顔でゆつくり振り向いた一夏は、

「りょ、りょ、りょ、呂布だア——ツ！？」  
「誰が飛将だ、馬鹿者！」

ドパアアアアンツツ！！

れつきにも増して凄まじい轟音が響き、一夏が悶絶する。

そんな実の弟に構わず山田先生と言葉を交わし、壇上に移動した、  
スース姿の美女 織斑千冬は、威風堂々と話し始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。

私の言つことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るま

で指導してやる。

私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言ひ方とは聞け。いいな

まるで暴君のよつとその言葉に対する返事は、なぜか黄色い歎声だつた。

「キヤー——！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

……千冬さんの人気は知っていたつもりだが、これほどとは思わなんだ。

一夏の真後ろ、つまり教室中央2列目に座る「D」の背中に、津波のように押し寄せる声。

千冬さんのうそびつした顔も、無理からぬと言ふ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心せられ る。

それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

本心から言つてゐるのだろう、千冬さんの顔はかなり嫌そうだった。

「わやあああああ！お姉様！もつと叱つてー罵つてー。

「でも時には優しくしてー！」

「そしてつけあがらないようとにかく躰をしてー！」

……なにこれこわい。

千冬さん相手に怯みもせずにテンションを上げ続けるクラスメイトに戦慄していると、千冬さんは一夏に視線を向けた。

「で？挨拶も満足に出来んのか、お前は」

「己の自己紹介の時に居なくて良かつた……。

「いや、千冬姉、俺は」

「パン！」

スナップの効いた一撃。

流石千冬さん、腕は衰えていないようだ。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

その通り取りで、二人の関係に気付いたのだろう。教室がにわかにざわついた。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男で工房を使えるっていうのも、それが  
関係して……」

「ああっ、いいなあつ。代わってほしになあつ」

「どうか、己は遠慮したい。

と、そこでチャイムが鳴り響いた。

一時間目の授業が始まる直前、己は一夏を見る、もう一人の幼なじみの様子に気付いた。

(……素直になればいいものを……)

「どうやら、訓練以外にもやる」とは山積みのようである。

「……ちょっとといいか

一時間目の授業が終わり、休み時間。私は去年、剣道の全国大会で約五年ぶりに再会した幼なじみに声を掛けた。

「……第?」

「……」

呆けた顔で私の名前を呼ぶ幼なじみ　一夏に、自分でもよくわからぬ苛立ちを感じて睨みつける。

「廊下でいいか?」

その苛立ちを振り払つように歩き出しが、一夏はまだ席で呆けたままだ。

ふと、一夏のすぐ後ろの席に座るもう一人の幼なじみと目が合つた。

彼女は六年前と変わらない無表情で、私を促すよつこ、コクリと頷いた。

「早くしり」

「お、おひ」

もう一度一夏に声を掛け、再び歩き出す。

私の前にいた女子たちが、ざあっと左右に分かれる様子にちょっと  
怯むが、今更後には退けない。

しかし、連れ出したはいいものの、どうにも切り出せない。

私が逡巡していると、一夏の方から話し掛けて来た。

「全国大会ぶりだな。元気してたか？ 篠」

「……ああ」

去年の全国大会、私と一夏は五年以上の空白を経て再会した。  
だがその時、私は一夏とともに向き合つことが出来なかつた。

決勝に勝つた興奮が冷め始めたころ、私は氣付いてしまつたのだ。

剣を振るつている間、私が感じていた高揚は、剣士として強敵と戦  
える喜びでも、少女として仲間の声援に応えたいという願いでもな

く

ただ、暴力に酔つていたのだと。

愕然とした。

なんと浅ましい。

それは、人として最も恥ずべき行為だと思つていたのに。

自分があまりにも醜い本性に気付き呆然としていた時、男子の部の

決勝開始のアナウンスが聞こえ、決勝に進出した一人の内の一方が、懐かしい名前であることに気付いた。

白熱する声援に誘われるよつて、ふらふらと決勝戦の試合場が見える観客席に行く。

五年以上会っていないくとも、面を着けていてもわかった。

あそこには、一夏だ。

昔と変わらず強く在り続けていてくれたことに嬉しく思い、それも束の間、一夏の戦いぶりを見て、すぐに気付いてしまった。

一夏の剣は、綺麗だ。

技の問題ではない。

真っ直ぐで、とても強い信念を感じさせる、私が理想とする剣士の姿が、そこにあった。

私の剣など、一夏の剣とは比べるべくもない。

一夏は見事勝利を收め、対戦相手と健闘を称え合いつ握手を交わし、表彰台に立つた。

そんな一夏と並んで立つことに強い罪悪感を感じ、私は一夏をまともに見ることが出来なかつた。

結局、ろくな会話もせずに一夏と分かれ。

あの日のことは、私の心に、深い傷として残つた。

政府によりE.S学園に強制的に入学させられ、再び一夏と出会つたことは、まるで自分の罪を突き付けられているような気持ちを私に

「与えた。

本当なら、いつかこのひとも辛いくらいなのに、それでも一夏を連れ出したのは、どうしても聞きたいことがあったからだ。

深呼吸をひとつ。

意を決して、その問いを口にする。

「……真改の、ことなんだが

「

キーンゴーンカーンゴーン。

休み時間終了の鐘。

ようやく聞けたのに、とうつ思によつも、安堵のまづが強かつた。

なぜならば。

私の言葉を聴いた一夏が、ひどく辛そうな顔をしたから。

休み時間が終わって、二人の幼なじみが帰ってきた。  
どちらも、なにやら顔色が優れない。

(……ふむ……?)

廊下でどんな会話があったのかはわからないが、あまり良い結果は

得られなかつたようだ。

(……ままならん、な……)

前途多難な予感がするが、まあ、「せひやれる」とをやるだけだ。

今はとにかく、一時間田である。  
予習は綿密に行つているが、己の頭はあまりよろしくない。  
授業内容を聞き逃すわけには行かないのだ。

前を見れば、一夏が必死に授業内容をノートに取つてゐる。  
あの量の参考書の内容をたつたの一週間で理解するのは流石に無理  
だつたようだが、それでも食らいついている一夏の様子に感心する。  
この調子ならば、大丈夫だらう。

「織斑くん、何かわからなさ」ところがありますか?」

そんな一夏のやる気を見て取つたのか、山田先生からの質問。

「あ、えつと……」

頭の中を整理するためか、ノートを見直す一夏。  
数秒して、

「……大丈夫、です、多分。わからなくなつたら、後で改めて聞き  
ます」

「わかりました、その時は遠慮なく聞いてくださいね!  
私は先生ですから!」

胸を張る山田先生。

一夏の思ひの他真面目な様子に、感心しつつ喜んでいたりする。

「では、次は」

そして、休み時間。

ノートのまとめと復習に一生懸命な一夏の席に、鮮やかな金髪縦口  
ールの少女が近付いていく。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

突然声を掛けられて、呆けた声と顔の一夏に対し、金髪縦口ールは  
高飛車に話し続ける。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ、訊いてるけど……どうこう用件だ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけ  
でも光栄なのですから、それ相応の態度といつものがあるんではな  
いかしら？」

「…………」

唚然とする一夏。

ISが開発されてから、その絶大な性能と女性にしか動かせないと  
いう特殊性から、女性の立場は急激に向上した。

IS操縦者が世界の軍事バランスの要であることは確かだが、だか  
らと言つてすべての女性が偉いわけではない。

ないのだが、そういう考え方が、今の世では常識になつており、女と  
いうだけで男を奴隸のように扱つ者も多い。

その歪みを一夏は嫌つており、またにその典型とも言える態度の少

女に対し、良い感情を持たないのは当然と言える。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「おう、知らん」

代表候補生とは、国家を代表するIJS操縦者候補として選出される、所謂エリートである。

だが所詮は候補であり、実際に国家代表になれるかはまた別の話だ。そんな候補生、しかも他国の者の名前までいちいち覚えろというのは、些か無理がある。

(……しかし、国家か……)

その国家の悉くを解体し尽くした26人の内の一人である「彼女」が聴いたら、なんと言うだろうか。

「ふん、所詮は極東の島国ですね。このわたくしのことさえ知らないだなんて。

本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしますの？」

一夏はまともに相手をする気はほとんどないようで、セシリアという少女も言いたい事だけ言つている感じだ。

「IJSのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれた

ら教えて差し上げてもよくなつてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「ほつ、倒したのか。  
やるな。

「入試つて、あれか? I Sを動かして戦つたりやつ?  
「それ以外に入試などありませんわ」  
「あれ? 僕も倒したぞ、教官」  
「「は……?」「

セシリ亞と己の驚きの声が重なる。  
幸い、己の声が一夏に聞こえた様子はない。  
しかしこいつ、教官を倒したのか……。  
結構シヨックだな……。

「わ、わたくしだけと聞きましたが?」  
「女子ではつてオチじやないのか?」  
「つ、つまり、わたくしだけではないと……?」  
「いや、知らないけど」  
「あなた! あなたも教官を倒したつて言ひのー?」  
「うん、まあ、たぶん」  
「たぶん! ? たぶんつてどういふ意味かしらー?」

セシリ亞のところは「己も聞きたい。

「えーと、落ち着けよ。な?」  
「」これが落ち着いていられ      キーンゴーンカーンゴーン

三時間目開始のチャイムがなり響き、セシリ亞はあるで三下が逃げ

る時のような台詞を残して席に戻つて行つた。

入れ替わるよひこ、千冬さんが教室に入つて來た。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」「

いきなり授業に入る千冬さん。山田先生はノートを持ち、メモを取る態勢だ。

豊富な知識と経験がありながら勉強を怠らないその姿勢は素晴らしい。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表者は、分かり易く言えばクラス長である。

クラス対抗戦以外にも、生徒会の会議や委員会への出席などが仕事となる。

実戦経験は積めるだろうが、己が会議に参加するのは無理があるので、他の者に押し付けるとしよう。

そんなことを思つてみると、

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

そこ今までいってようやく気付いたのか、一夏が立ち上がった。

「お、俺！？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。

さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」「

「ちょっと、ちょっと待つた！俺はそんなのやらな

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ

「い、いやでも　　」「

往生際の悪い一夏の言葉を、甲高い声が遮つた。

「待つてください！納得がいきませんわ！」「

バンッと机を叩く音。

振り向くと、そこにはセシリ亞・オルコットの姿が。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリ亞・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

一年程度も耐えられないとは、軟弱な忍耐だな。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのよつな島国までEIS技術の修練に来ているのであって、サークスをする気は毛頭ございませんわ！」

流石に頭に来たのか、一夏の肩がぴくりと動いた。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれ

はわたくしですわ！

セシリアのテンションに比例するよつこ、一夏の怒りも増幅していくことが良く分かる。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

そして、ついに。

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なつ……ー？」

そこからは売り言葉に買い言葉、あれよと言つ間に一人の決闘が決まった。

「それで、イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットに無謀にも挑む無知な極東のお猿さんには、どれくらいハンデをつければいいのかしら？」

「そんなもんいるか。お互い全力でやつてこそ、勝つことは意味があるんだ」

嘲笑を浮かべるセシリアを、一夏は真っ直ぐに睨み付ける。

「さて、話はまとまつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくよつこ。アリーナ

千冬さんはそう言ってから、少し考えるような仕草をして頷き、

「ふむ、ならば調度いいかもしけんな。

井上

「…………」

突然名前を呼ばれた。今の話の流れに「〇〇の名が出てくるような所はなかつたように思うが。

「先ほど連絡が来たんだが、お前の入試を見た如月重工の社長が、お前に興味を持つたそうだ」

如月重工とは、元技術者が社長を務める、日本では倉持技研と双璧をなすＩＳ開発企業だ。

極めて高い技術力を誇り、如月重工製のパーツはどれも高性能なのだが、クセが強すぎてまともに扱えないようなイロモノが多い。勤務する技術者は社長を筆頭に頭にマツドが付く連中ばかりで、所謂変態企業として世界にその名を轟かせている。

……なにやら嫌な予感がする。

「現在如月重工で開発中の新型ＩＳを、データ収集のためにお前に使って欲しいそうだ。つまりはテストパイロットだな。」

「…………」

テストパイロット、か。

「そこで、お前用に機体を調整するために、お前の戦闘データがいる。「打鉄」で構わないから、一度戦つて欲しい、というのが先方からの要求だ。

テストパイロットを引き受けてくれるのならば、交換条件として、

その間その新型I.Sをお前の専用機として使っていいと言つて来ている。

どうすみへ?

「……」

正直、それは願つてもない条件だ。

専用機と量産機では性能がまるで違つし、機体を量子化することで常に身に付け、いつでも起動できる。

無論法律や規則による制約はあるが、有事の際に即応できるのは極めて大きい。先方が如月重工といふことに不安がないでもないが、それでも己は躊躇うことなく頷いた。

「決まりだな。先方にはこちらから伝えておく。

データ収集のための戦闘は三日後の木曜、時間と場所はさつきと同じだ。相手は、オルコット、それもついでにお前がやれ」

「ええ！？しかし、織斑先生、わたくしは

「……」

「不満か？相手はI.Sの操縦は初心者だぞ。インターバルも三日間ある。それくらいのこともこなせないで、国家代表を名乗るつもりか？」

「う……わかりましたわ」

「……」

「ふん！ならそのお猿さんとの決闘の前哨戦ですね。せいぜい逃げないで

「……」

「ええと……あなた、訊いてます？」

「……」

「くじと頷いて、右手を出す。

「……井上真改……」

正直セシリアの第一印象はあまり良くないが、しかしの事情に付き合つても「うつのだ。」  
されば死へねばなるまい。

「……感謝する……」

「ふ、ふん！ そんなことをしても、奴は容赦しませんわよ！」

「……」

なにせ「ひまほを向こむ」とセシリアに、黙つて右手を差し出しつづける。

「……」

「う、セ、セシリア・オルゴットですわ」

「……」

根負けしたのか、己の右手をとり、握手をするセシリア。

「……」

「や、やつづらこそすわね……」

かくして、一夏の前に己がセシリアと戦うことになった。

いきなり波乱の幕開けだが、このチャンスを物にしない手はない。セシリアの実力と機体がどれほどのものかはわからないが、己はただ、寄つて斬るだけだ。

せいぜい、一週間後の一夏の初戦のため、手本くらいにはなれるような戦いをしなくてはな。

## 第4話 初日（後書き）

この作品はフィクションであり、作中に登場する企業は、某ロボットゲームシリーズに登場する企業とは関係ありません。

本作の一夏は真改の影響を受け、強くなることに一生懸命です。必要なら勉強も頑張ります。

## 第5話 再会（前書き）

真改と篠、六年ぶりの再会。

片腕しかない真改の姿を見て、篠は何を思ひのか。

くわづ、筆が進まない、私だつて早く月光出したいのに……！

## 第5話 再会

昼休み。一夏が声を掛けて来た。

「なあシン、飯行こうぜ」

「……」

教室中の視線が、今度は己に集まつた。

「井上さんって、織斑くんと知り合いなの……？」

「今、渾名で呼んだよね……？」

「井上さん、如月重工の社長にスカウトされたって……」

「入試で興味持つたって言ってたよね……？」

「どんなことしたんだろう……？」

「私も欲しいなあ、専用機……」

……まよい、このままでは己の平穏な学園生活がつ。

「纂も一緒に……て、あれ? いない?」

「……」

纂なら昼休みになつて早々に出て行つたぞ。

「しようがない、一人で行くか」

「……」

促され、席を立つ。

どうせ飯は食いに行かなければならないのだ、腹をくくらう。

そつして場所は食堂に移る。

一夏は和食セット、己は口替わり定食である。

「おお、美味しい。流石にでかいだけあるなあ」

「……」

確かに中々の味だが、それをじっくり味わう余裕はない。

己には今、八方から好奇の視線が浴びせられている。

内容は誰に問わずともわかる、「あの子織斑くんどういつ関係?」「だ。

まあIIS学園は本来女子校であり、IIS学園に入学するのはIIS関連の授業を科目に取り入れている女子校の出身者が多いので、ほとんど関わったことのない男という生き物に興味があるのはわかるのだが。

「しかし、セシリ亞・オルゴットか。

代表候補生ってくらいだし、強いんだろうなあ、やつぱ」

「……」

己を生贊に捧げることで視線の猛攻から逃れることに成功した一夏は、平常心を取り戻していた。

己にそんな話をするのは、初の戦闘の相手が強敵である不安からか、それともその強敵と戦うことになつた己を心配しているのか。この男のことだ、おそらく後者だらう。

「けどやつぱシンはず」こな。入学早々専用機貰えるなんてぞ。如月重工つてのは知らないけど。お前、入試でなにしたんだよ

「……」

入試の試験会場を間違えるようなやつはそんなことを言われたくはない。

「いづれいつまでした」「…………」

「ひし、じゃあ戻るか。午後の授業の予習しねえと…………」

「…………」

「己」と一夏が席を立つと、それに合わせるように周囲も一斉に立ち上がり始めた。

そして始まる行進。この異様な光景はいつまで続くのか。早くもうんざりしてきたんだが。

(……やれやれ……)

そして放課後。

忘れないうちに復習とノートまとめをすると言つ一夏を残し、教室を出る。

はて、「己」の寮の部屋は何号室だったかと考えていると、深刻そうな表情で「己」を見詰める幼なじみを見つけた。

「…………」

真改

篠ノ之箒。

六年前まで口と一夏が通っていた剣術道場兼神社の娘で、EISの開発者である篠ノ之束の実妹である。

「……聞きたい」とが、ある

「……」

何を聞かれるか、予想はついていた。

躊躇いがちに、箒は言葉を紡ぐ。

「お前の……左腕の、ことなんだが」

「……」

やはり、か。

己が左腕を失ったのは、最近のことだ。

箒と最後に会ったのはその数年前のことであるから知る筈もなく、去年箒と会った一夏が軽々しく話すとも思えない。

「初めは一夏に聞こうとした。だが聞けなかつた。お前の名前を出した途端、一夏がつらそうな顔をしたからだ」

「……」

「左腕をなくしたことと、一夏は関係しているのか?」

箒は詰め寄つてくるが、理由は話せない。

己だけでなく、一夏も、千冬さんも関係している。

己と箒、二人だけのこの状況で話す訳にはいかない。だから、心情だけを口にした。

「……悔てはいなし……」

己の言葉を聞いた簞は、俯いた。

その肩が、声が、震えているのがわかる。

「……なぜだ」

「……」

「なぜお前は、そんなことを聞く？」

「……」

簞が顔を上げ、睨むよいつ己を見た。

「だつて、お前は……ー。」

叫ぶよいつ己。

血を吐くよいつ己。

絞り出すよいつ己、簞は叫び。

「お前は、あんなに……ー。」

簞の眼に涙が浮かぶ。

「どうして、そんなに簡単に諦められるんだつーー。」

「……」

それは、慟哭だった。

共に剣術を学んでいた簞は昔、己の剣を綺麗だと語ってくれた。

その己が左腕を失ったことは、簞にとっても辛いのだ。

そこまで己のことを想ってくれることが嬉しくもあり、心苦しくも

あつた。

「…………すまない…………」

「何で、お前が謝るんだ…………。」

「…………」

涙を流し続ける篠に、「己は必ずやればいいのか。

「う、く、ぐす……」

「…………」

泣き続ける篠を見詰めて、かつて一夏に語つたものと、同じ言葉を紡ぐ。

一夏も篠も、今はこの場にいらないもう一人も。

己の大事な、幼なじみだ。

己の想いだけは、知つておいてくれ。

「…………一夏は、一人…………」

「…………？」

「…………腕は、一本…………」

「…………ツ……」

「…………惜しくはない…………」

「…………う、ううう、うええ…………「ああああああああ…………。」

これでも、孤児院の年長者だ。

泣き止まない子供の世話は、なれている。

だから己は、ただ黙つて、泣き続ける篠のことを抱き締めた。

「しん、かいじこ……。」

「……すまない……」

幼子のようにしゃべりあげる算と、それを慰める口との抱擁は、

「……なにしてんだよ?」

「うあああああああ……? ?」

教室から出てきた一夏が、空氣を読まずに声を掛けてくれるまで続いた。

所変わつて、EIS学園学生寮。

一夏は帰つていつた。

女子校であるEIS学園は学生寮も当然女子寮であり、一夏はしばらく自宅から学園に通うことになつてゐる。  
色々と不便なのでその内部屋の都合をつけるだらうが、今日明日の話ではないだらう。

(……だが、何故か嫌な予感がする……)

多分氣のせいだ。そうに違いない。

「さつきはすまなかつたな、取り乱して……ショックだつたんだ。

お前の剣は、私の、憧れだから」

「…………」

少し恥ずかしそうに言つ筈。

己の剣などまだまだ「彼女」には遠く及ばないが、それでも「彼女」を目指して鍛錬を積み重ね、昔より遙かに強くなつた。

誰かに憧れ、その背中に迫り付きたいという思いは、人を大きく成長させる。

ならば前を往く者の務めとは謙遜することではなく、高く分厚い壁として在り続けるために、精進を欠かさぬことだ。

「…………篇」

「うん？」

何故己から自発的に話すと皆驚いたような顔をするのだ。  
いずれ問い合わせする必要があるな。

「…………誇りに思つ……」

「や、そつか、そう言つてもうらえると、私も嬉しい」

感謝の言葉と氣付いたようで、照れたように笑つ筈。  
随分長い間会つていなかつたが、どうやら絆はいまだ健在のようだ  
なによりである。

「……がお前の部屋か？」

「…………」

己に振り分けられた寮の部屋に着いた。

寮は一人部屋なので、己にもルームメイトがいるわけだが、そいつには同情する。

己のよつな無口な者と生活していくは、楽しくないだらう。

篠のように気心の知れた相手ならばまた違つたかもしぬないが、そこまでは望めまい。

「私の部屋は1025号室だ。お前さえよければ、いつでも来てく  
れ。」

「じゃあ、また明日」

「……」

泣いてすつきりしたのか、篠の心も少しは晴れたようである。

小さな笑みを浮かべてから立ち去る篠を見送り、己は今日から住むことになつた自室の扉を開けた。

「……」

広い。

テレビでしか見たことはないが、それなりに高級なホテルの部屋がこれくらいだつたような気がする。

流石はIIS学園、こんな所にも金がかかっている。

「……」

ルームメイトはまだ来ていないので。

さつさと挨拶を済ませたかつたが、仕方ない。先に荷物を整理してしまおう。

「……」

己は部屋の隅にある、「井上真改」と書かれたダンボールを開け、事前に送つておいた荷物を取り出す。

量は少ない。服はジャージと部屋着の他私服が数着。妹たちは己にやたらと色々な服を着させたがるので、気付かれる前に準備した。その後かなりふてくされていたが。

その他細々とした生活用品に、木刀2本と大きな鉢植えがひとつ。鉢植えは厳重に梱包したおかげか土がこぼれた様子はなく、花

真っ白なパンジーも無事だ。

花壇は弟妹たちに任せてきた。普段から一緒に世話をしているので、己が居なくても大丈夫だろう。

荷物をしまって鉢植えをベランダの日当たりが良さそうな所にセットし、さてダンボールを置むかとこうとじりで扉が開く。

入って来たのは、サイズの合つてないぶかぶかの制服を着た少女。

「お～、広い～。ホテルみたいだね～」

「……」

「あ～、ルームメイトのひと～？  
わたしはね～、布仏本音つていうんだ～。よろしく～」

なんだかやけに間延びした話し方をする娘だ。なんというか、彼女だけ時間の流れが違う気がする。

「……井上真改……」

「知ってるよ～、今日す～かつたもんね～。  
いのつちのことは、もう有名になつてるよ～」

己は戦慄した。

ひとつ。もう噂になつていいのか、いくらなんでも早すぎるだろ～。  
ふたつ。こいつ、己の左腕に全く触れてこない。普通は気になると  
思うのだが。  
みつ。このつちってなんだ。

「す～いな～、もう専用機貰えるなんて～。  
このつちって、なにかやつてるの～？」

「……剣を……」

「おお～、かつくいいな～。うんうん、確かにいのつちって、そんな感じだよね～」

「……」

初めて会う人種に感づ<sup>タイプ</sup>。

「なんてこいつか～、侍とか、武士とか～、そんな感じ～」

「……」

にへら。

「いのつちと同じ部屋だなんて、ラッキーだな～、わたし。  
ね～ね～、いのつち、入試でなにしたの～？」

「戦つた……」

「う～ん、もっと具体的に～」

「……斬つた……」

「もっと詳しへ～」

「……寄つて、斬つた……」

「もっと微に入り細を穿つて～」

「……避けて、寄つて、斬つた……」

左腕がなく、極めて無口な口に話し掛けてくる者など中学校にはほとんどいなかつたが、本音は馴れ馴れしいくらいに気安く話し続ける。

不思議なのは、それに付き合ひ「」とが不快ではないことだ。

己が要領の得ない答えを返すたび、本音は楽しそうに笑い、すぐこの質問をしてくる。

どれも他愛のない、正しく雑談である内容。

「Uちゃんの会話をするのと、幼なじみのものだつたが。

(……不思議な娘だ……)

「Uとの会話の何がそんなに面白いかはわからないが、ほしゃべ本音の姿は見ていて飽きない。

(……ウツキーだったのは、Uの方か……)

まあ、本音が何を考えているのかはわからんが。といつあえず、仲良くなつていけそうだ。

「……布仏……」

「んん？なに」「このうち、わたしの」とは、本音でいこよ～？

「……本音……」

「……これから、よろしく……」

## 第5話 再会（後書き）

篇は心のつゝかえがひとつ取れました。

そして真改のルームメイト、のほほんさん。強烈なオーラを常時展開している真改を相手にまるで怯みません。ある意味最強。ちなみにORCAのメンバーでは、真改とよく話していたのはヴァオーという独自設定。

「どうした、シンカアアアアアイ！」

そんなに暗いと、幸せが逃げるぜええ！？」

「……」

こんな感じ。

## 第6話 旧交（前書き）

第5話の翌日の話です。

早くもサブタイトルに詰まつてきた……

## 第6話 旧交

朝。

己は一夏と篝と合流し、食堂で朝食を取っていた。

一夏は世界で唯一 I.S を動かせる男ということで、保護、監視その他諸々の事情から急遽寮に入る事が決定した。したのだが、本当に急な事だったので部屋が準備出来ておらず、なんと篝と同部屋になつたといつ。

それでいいのか、I.S 学園。

「これうまいな」

和食セットを食べながら言つ一夏の頭には、見てわかるくらいた大なタンゴブがある。

一夏のことだ、何があつたか大体の想像が付く。篝もかなり不機嫌だし。

「お、織斑くん、隣いいかなつ？」

「へ？」

突然、三人の女子が声を掛けてきた。

「ああ、別にいいけど」

篝が更に不機嫌な顔になつた。一夏は気付かないが。

「織斑くんつて、篠ノ之さんと井上さんと仲がいいの?」

「篠ノ之さんと同じ部屋だつて聞いたけど……」

「井上さんは、昨日も一緒にご飯食べてたよね」

「ああ、まあ、一人とも幼なじみだし」

一夏が言った瞬間、周囲から驚きの声が聞こえた。

……かなり遠くからも聞こえたぞ。どれだけ聞き耳を立ててるんだ。

「え、それじゃあ」「

「いつまで食べている…食事は迅速に効率よく取れ!…遅刻したらグラウンド十周をせらるぞ!…」

IIS学園のグラウンドは一周五キロ。十周で五十キロ。

朝からそれはなかなかきついものがあるので、それは勘弁願いたい。己は残っていた朝食（日替わり定食）を食べ、教室に向かった。

「というわけで、IISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギー・バリアーで包んでいます。また、生体機能も補助する役割があり、IISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルفينなどがあげられ」

「先生、それって大丈夫なんですか?なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」

AMSによつてネクストと繋がるために、体を一部機械化していたリンクスからすれば大したことではないのだが、普通の生活をしていた少女からすればやはり恐ろしいだろう。

「そんなに難しく考へることはありませんよ。そうですね、例えば、みなさんは「ラジャーをしていますよね。あれはサポートこそそれ、それで人体に悪影響が出ると言つことはないわけです。もちろん、自分にあつたサイズのものを選ばないと、形崩れしてしまいますが

」

そこで山田先生と一緒に田があつた。

途端に赤くなる山田先生。

「え、えっと、いや、その、織斑君はしていませんよね。わ、わからぬですね、この例え。

あは、あははは……」

ちなみに己もわからん。サラシ派だからな。

片腕だけで巻くのは初めは大変だったが、慣れてしまえばどうということはない。

クラスに唯一の男子生徒を意識してか、女子たちが微妙な雰囲気を出し始める。

「んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

このままでは授業が進まないと察してか、千冬さんが咳払いで授業を促す。

「そ、それともう一つ大事なことは、EISにも意識に似たよくなものがたり、お互いの対話 つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、EIS側も操縦者の特性を理解しようとなります」

ほつ

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。EISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

それは、ネクストにはなかつた特性だ。

リンクスはネクストと繋がり、自分の体のよつに操る。

ネクストからもリンクスに情報が送られてくるが、それは機体ダメージや外部の状況などであり、ネクスト自体に意志などない。

ネクストは絶大な破壊をもたらす兵器であり、同時に、どこまで行つても兵器でしかないのだ。

キーンゴーンカーンゴーン

授業終了の鐘。

先ほどのEISの意識云々のくだりから恋人の話に発展し始めたクラスメイトたちは、そのままの勢いで一夏に詰め寄った。

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはーい、質問しつもーん！」

「今日のお宿ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

最後のはまづくないか？

押し寄せる女子たちは、一夏だけでなく千冬さんについても質問しだした。

それに答えようとした一夏の頭に、出席簿が振り下ろされる。

パンツ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

ドスの効いた声に、自分の席に逃げ帰るクラスメイトたち。

「ところで織斑、お前のISだが、準備まで時間がかかる」「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「???

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出てることで……」「ああ、いいな……。私も早く専用機欲しいなあ」

自分が専用機を与えられる。

その意味に気付いた一夏の気配が変わる。

刃のように、鋭く。

「わかつているようだな。ISの中心であるコアは、製作者本人以外には作れない。そして今は、その製作者もコアを作っていない。コアの数が限られているため、本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が

状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。

井上と違い、実力を認められたわけではない。自惚れるなよ

「……はい、わかつてます」

一夏は、大切なものを守るために、強大な「力」を欲している。その「力」が、手に入る。

だが一夏の声にあるのは、喜びではない。

決意だ。

「えられた「力」に頼るのではなく、それを振るうに値する強者になると、そう新たな誓いを立てた声だ。

今の一夏がどんな顔をしているのか、己の席からは見えないが、一夏の横に座る女子の顔が赤いので大体想像が付く。

「あの、先生。ISのコアって、篠ノ之博士が作ったんですよね？  
もしかして、篠ノ之さんって篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

「…？」  
「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

ちらりと簫を見ると、見るからに不機嫌そうな顔。

「ええええーーーす、すーーいーーーこのクラス有名人の身内がふたりもいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やつぱり天才なの！？  
「篠ノ之さんも天才だつたりする！？今度ISの操縦教えてよっ」

そんな簫の様子に気付かないのか、クラスメイトたちが興奮した様子で簫に殺到する。

筈の我慢は、早くも限界を迎えた。

「あの人は関係ない！」

突然の大声。

それがまるで悲鳴のように聞こえたのは、己だけだろうか。

「……大声を出しますまい。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言つて、筈は窓の外に顔を向ける。

流石にそれ以上筈に詰め寄る者はおらず、皆自分の席に戻つた。

「さて、授業をはじめます。山田先生、号令」

「は、はいっ！」

そうして授業が開始されるが、一夏はいまいち身が入っていない様子だ。

筈のことが気になつているのか。

(……ふむ……)

また、話を聞いてみるか。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思つていなかつたでしょうけど」

「昼休みになるや、セシリ亞が一夏に話しがけてきた。

「訓練機だらうが専用機だらうが、使いこなせなきや意味ないだろ」「あら、よくわかつてますわね。そう、ISで大事なのはISとのシンクロ。イギリスの代表候補生であるわたくしは、わたくしの専用機と完璧にシンクロしています。IS初心者のあなたには、万に一つも勝ち目はありませんのよ?」

「関係ねえよ。俺は強くならなきやならないんだ。勝つても負けても経験は積める。強くなれ!」

セシリ亞を睨み付ける一夏。

「悪いが、糧になつてもらひがぜ」 セシリ亞・オルコット

「く……あ、あなた」

「おーい、篳い。飯行こうぜ」

がらりと態度を入れ替えた一夏。呼ばれた篳は無視を決め込んでいたが、セシリ亞は先ほどの授業でのことを思い出したのか、今度は篳に話し掛けた。

「そついえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね

その話題を振るとは、こいつには学習能力がないのか?

「妹といつだけだ」

案の定、篳はセシリ亞を射殺さんばかりに睨み付ける。

その眼力に気圧されたのか、セシリアは小さく呻いて一歩退いた。

「まあまあ。どうひしても」のクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるとこりとをお忘れなく

ぱたりと髪を払い、立ち去つていくセシリア。

一夏はその姿をなにやら呆れたような顔で見送つてから、再び簫に声を掛けた。

「簫」

「……」

「簫ノえさと、飯食いこい」

簫は頑なに沈黙を続ける。

そんな簫を心配してか、一夏は周りを見回して、

「他に誰か一緒に行かない？」

「はいはいはいつ！」

「行くよ~。ちよつと待つて~」

「お弁当作つてきてるけど行きまますー。」

己も立ち上がり、一人の下へ行つた。

「……私は、いい

「まあやつ言つたな。ほら、立て立て。行くぞ」

「お、おいつ。私は行かないと つ、腕を組むなつー。」

「なんだよ歩きたくないのか？おんぶしてやつが？」

「なつ……ー」

一気に赤くなる簫。素直になればいいものを。

「は、離せー。」

「学食についたらな」

「い、今離せ！ええーっ

」

篠が一夏の腕をとり、投げよつと動くが、

「おひと」

一夏ははゆるつと抜け出しつゝも回り立つ形になつた。

「こきなり何すんだよ」

「あ、お前が強引に連れ出さうとするからだつ。」

一夏は溜め息をひとつへと、今度は逃げられないよつと篠の手を強く握んだ。

「まじ、行くぞ」

「お、おいつ。いー加減に

「黙つてついてここ

「む……」

「よーし、じゃあしあつぱーつー

「お待たせー、準備おつづけー」

「ああ、織斑くんとー飯……」

「……」

れて、学食に行くか。

六人でそろそろと学食に来たはいいが、かなり混雑している。奇跡的に空いていた四人掛けのテーブルをふたつづつけて、席に着いた。

「 「 「 いただきます」 」  
「 いただきま～す」  
「 ..... いただきます」  
「 ..... いただきます.....」

食事を始めてすぐに、己たちについて来た少女の一人　「己のルームメイトである本音が話し掛けてきた。

「 む～、やつといのつちどい飯食べれるよ～。朝いのつちすぐいなくなつちゃうんだもん～」

「 .....」

今朝も鍛錬をしていたのだが、シャワーを浴び終わっても本音は寝ていた。

一応振り起こしてから出てきたのだが、本音は不満だつたらしい。

「 いのつちつて、おりむーと仲いいんだね～。学校が同じだったの？」

「 ..... 幼なじみ.....」

「 おお～、やつぱいのつちはす～いね～」

なにがだ。

それと状況から判断したがおりむーとは一夏の「こと」でいいのか。  
そしてその袖でどうして箸が持てる。

ちりじと一夏を見ると、簾にEISの操縦を教えてくれと頼んでいた。  
今朝は己に頼みに来たのだが、簾に頼めと追い返した。

幼なじみの恋は応援してやらねば。

「じゃあさー、小さここのおつむーって、どんな感じだったの？」

「……変わらない……」

鰯の塩焼きを口に運びつつ答える。

本音の友人と思われる二人も一夏の昔に興味があるようだが、己と話すのは気が引けるのか、質問は本音任せだ。と、そこで、

「ねえ。君つて噂の口でしょ？」

突如現れた三年生が一夏に話し掛けてきた。優しげな笑顔を浮かべて一夏にEISの教示を買って出てくるようだが、下心が透けて見える。だがそういうことに疎い一夏は気付かず、その申し出を受けようとしていた。

仕方ない、追い払うか、と考えて、視線に力を込めようとしたら

「結構です。私が教えることになつていますので」（……ほつ……）

簾が名乗りを上げた。

本音と二人の少女も、突如始まつた修羅場（？）に興味津々である。

「あなたも一年でしょ？私の方がつまく教えられると思つなあ」

「……私は、篠ノ之束の妹ですから」

自分からそれを言つとは、成長したな、筈。

「そ、そう。それなら仕方ないわね……」

すいすいと引き下がつて行く三年生と、それを残念そうに見送る一夏。お前は本当に馬鹿だな。

「なんだ？」

「なんだって……いや、教えてくれるのか？」

「そう言つていろ」

……あとは、その態度が直ればな。

「今日の放課後」

「ん？」

「剣道場に来い。お前の腕を直接見てやる」

「いや、俺はエヒのことを」

「見てやる」

「……わかったよ」

これで己の放課後の予定も決まつたな。

筈の腕が六年前からどれだけ上達しているか興味もある。

だが今は、午後の授業に備えて昼食をとることに専念すること。

「なんか面白そな」とになつたね～いのっち～

「……」

そして彼女たちの予定も決まつたようである。

「ハアアツ！」  
「ゼエイツ！」

裂帛の氣合い。

竹刀がぶつかり合う音。

二人の剣舞が始まつてから十分。

試合は白熱していた。

初めは興味本位で集まつて来た観客たちも、今では試合に見入つて  
いる。

「二人とも、すごい……」「さすが全国大会優勝者なだけあるわね  
……」

剣道部員は一人を知つてゐるようだ。

筈は有望な新入部員候補としてチェックしていたのだろうが、男子  
である一夏のことも知つてゐるのは、一夏が中学二年生の時と合わ  
せ、一連霸の偉業を果たしているからだろう。

二十分が経過し、流石に一人とも疲れてきた。  
当然だ、いくら体力があるうど、人間が全力で動き続けられる時間  
は長くない。

決着は一瞬。

「小手エエエッ！」

笄が鋭く小手を放つ。

一夏はそれを、腕を竹刀ごと振り上げてかわした。

上段、面打ちの構え。

「……ツ！」

笄の対応は速かつた。

空振りした竹刀の切つ先をくるりと回し、頭の上にかざす。

素晴らしい反応だが、しかしそれこそが一夏の狙いだった。

膝をたたみ、腰を低く落とす。

振り上げた竹刀を、振り下ろすように横に薙いだ。

「胴才オオオオツ！」

パンッ！

勝負有り。

「……見事……」

「きやあああーっ！織斑くんカツコいい！」

「篠ノえさんもす」いねー！」

「おお～、おりむー強～い」

観客たちが爆発し、口々に両者を称える。

剣道もいいものだな。人殺しの業である己の剣では、いつは人の心を掴めまい。

「ツくはーゼニツ、ゼニツ、……ふう、強いな、篠」

「はあ、はあ、一夏こそ、はあ、更に腕を上げたようだな。……私の、負けだ」

二人の顔は晴れやかだ。

言葉にできずとも剣で語る、そんな在り方が、不器用な幼なじみたちには似合っていた。

「全国大会のあとも、稽古は続けていたようだな」

「まあ、剣道部は引退しちまつたけどな。シンと一緒に、よくやつてたぜ」

そこで己の名を出すヤツがあるか？！――

「何イツ！？」

クワッ！と篠が己を見る。その目は裏切り者を見る目だった。

「真改、お前もか……！」

待て、落ち着け篠。お前が考へているようなことは何もなかつた。あるはずがないだろ？。

「ふ、ふふふ、そつかそつか、よし真改お前の腕も見てやるわ。しかし簫に己の思いは届かない。

一夏が持っていた竹刀を引つたぐり、己に向けて突き出した。

「さあ、剣を取れ真改っ！」

「…………はあ……」

思わず溜め息が漏れるのも仕方ない。

こうなつた簫は人の話を聞かないのだ。

無闇に煽る観客たちもいるしな。

「じゃあ防具は つと、そつだな、私が着けてやるから、更衣室の…………無用…………」

防具を着ければ動きが鈍る。片腕しかなく、非力な己にはその足枷は重すぎる。

どうせ竹刀だ、当たつたといひで死にはしない、そついつ判断による言葉だったのだが

「ほつ……私如きが相手では、防具など必要ないと？」

しくじつた。

簫は更に怒気を強め、そろそろ氣炎が田に見える領域である。これ以上は余計なことを言わず、せつと済ませるとこよへ。

「このつちへ、がんば~」

氣の抜ける声援をよこす本音に軽く手を振つて応え、簫の前に立つ。

そして、試合開始の掛け声が響いた。

結果から言ひと、怒りに任せて荒い攻撃を繰り出してくる筈に勝ち、そのまま一夏を叩きのめした（ハツ当たり）。

一夏と激闘を演じた筈は剣道部員から称賛され、クラスにも少しは馴染めたようである。

問題はそのあとで、翌日から口のファンを名乗る者が現れ出したのだ。

別に何をするというわけではないのだが、やたらと熱い視線を口に浴びせてくる。

何故だ、この役割は、一夏のものではなかつたのか。

「……不可解……」

## 第6話 旧交（後書き）

真改が左腕を失つてから、一夏は強くなると決意しました。自分がISを使えることがわかり、願つてもなかつた「力」を手に入れた一夏が、これからどう成長していくのか……。そして私の文章力がそれに追い付けるのかwww 次回、いよいよ真改vsセシリアです。

## 第7話 曙光（前書き）

真改 vs セシリリア。

戦闘描写むずい。

他の「」どが上手く書けるわけじゃないけどなー。

今回の話の中の「真逆」という字は「まわか」と読んでください。はい、某ゲームのパクリです、『めんなさい』

## 第7話 星光

「己」とセシリ亞の対戦当日、その放課後。

己、一夏、篠、本音、山田先生、千冬さん、そしてスーシを着た見知らぬ男が一人、第三アリーナAピットに集まっていた。

「やあやあはじめまして、僕が如月重工社長の如月だ。  
君が井上君だね？今日はよろしく頼むよ」

「……」

やたらと馴れ馴れしい態度で話し掛けてくる如月社長に無言を返す。  
どうにも苦手な人種だ。

「ふむ、相手はイギリス代表候補生、セシリ亞・オルコット君か。  
申し分ないね。」

「……」

「今回のデータ収集は君のテストも兼ねている。もし入試での戦い  
ぶりがまぐれなようだったら、この話はご破算だ。頑張ってくれた  
まえよ」

その言葉を聞き、千冬さんが口を挟む。

「待つて下さい。そんな話は聞いていませんが？」

「うん？ 言つてなかつたかな？ まあ、今言つたからいいだろ？」

「……」

睨み付ける千冬さんの眼力をものともしない。

この男、なよなよした外見に似合わず相当な胆力だ。

「なにせ僕は技術者、戦闘に関しては素人だ。井上君の実力は見ただけじゃわからないからね。  
だから僕にもわかるデータがいるんだよ」

なるほど、話はわかつた。

「続けるよ。今回井上君には、E.S学園の訓練機、打鉄を使ってもらう。データ収集のためのプログラムを入れてる以外は普通の打鉄だから、安心してくれていいよ」  
「どこがだよ。左腕が付いてないじゃねえか」

一夏が不機嫌そうな顔で言う。

「え？ だつていらないでしょ？」

まあ確かに要らんが。動かないって中身が入ってないクセに弾が当たるとシールドエネルギーが減るし重いから、むしろ邪魔なくらいだ。

だが一夏はその発言が気に入らないようで、如月社長を睨み付けている。

千冬さんに氣付かれ叱られているが、それがなければ殴りかかっていたかも知れないほどの怒りようだ。

まだ、引き摺っているのか。

「武装は君が好きに選んでくれていいよ。僕らからの要求は、君が全力で戦うことだけだからね」

「……」

「別に勝てとは言わない。たとえ負けたとしても、内容次第で採用だ。

まあ、僕はあまり心配していないけどね

やるからには勝ちに行くが、負けてもいと言われば多少気が楽になるのが人情である。

入試の時のような無様は晒さないようじをつけよう。

「さて、そろそろだね。井上君、準備を始めてくれ

「…………承知…………」

言われて、白い制服を脱ぐ。

ISースーツは予め制服の下に着ている。

しかしいの、所謂スクール水着のようなデザインはどうにかならんのか。

顔に出ないと言つだけで、己にも羞恥心へらつてあるのだが。

ノースリーブなせいで、普段は夏でも長袖を着ることで隠している左腕が顯わになる。肩と肘の中間から下がなく、その上から鎖骨近くまでを醜い傷に覆われたその左腕を見て、篠と本音、山田先生が息をのんだ。

如月社長は全く気にした様子はなく、千冬さんは顔を僅かにしかめただけに留めた。

そして、一夏は。

「…………つ

自らが犯した罪を見せ付けられたような顔で、しかし決して目を逸らさうとはしない。

たとえどれだけ重くとも、その罪を背負つと決めているのだ、この

少年は。

(……馬鹿者が……)

打鉄を起動し、武装を選ぶ。

銃火器は全て解除し、空いた容量に近接ブレードをありつたけしまい込んだ。

「うふふ、君も大概だねえ、井上君」

「……」

如月社長が何か言つているが無視する。

打鉄の調子を確かめ、不備がないことを確認。流石はT.S学園の整備班、優秀だ。

確認を終えて、歩き出す。  
一夏の下へ。

「……シン……」

「……」

そんな顔をするな。

泣きそうな顔で口を見る一夏の前に跪く。

T.Sを装着している今では、それで目線の高さが合つた。

何かを言おうとする一夏を遮り、告げる。

「俺……」

「よく、見ておけ……」

「……『U』の、剣を……」

「……ああ。見ててやるから、負けんじゃねえぞ、シン」

「……せめか……」

氣力を取り戻した一夏の顔を見て、立ち上がる。

これから戦つのは『U』だと言つたのと、お前が心配せいでいるのだ。

全く、手の掛かる幼なじみを持つと、苦笑する。

思わず口元に浮かんでしまった笑みを、誰にも見られなかつたのは、幸いだつた。

「U」のわたくしを相手に訓練機で挑もつなんて、馬鹿にしてこますの?」

「……」

これしかないんだ、仕方なかつ。

ピットを出て飛び上がつた己を待つていたセシリ亞が、優雅な仕草で腰に手を当てる。

「まあ、そんな機体で逃げずに来たことは褒めてさしあげますわ

「……」

「己のデータ収集のための対戦ということを理解しているのだらうか、  
こいつは。

「んんっーまあ、あなたの都合に快く付き合つてあげるわたくしの  
優しさに少しでも感謝しているのなら、わたくしの引き立て役にな  
るくらいには頑張つて下さいな」

「……」

自信の現れなのか、自分の存在に誇りを持つているのか。  
セシリ亞の語り口はいつも熱を持つている。

大半の者にとって、その態度は傲慢と映るだろ。う。

そしてその多くは、彼女を快くは思ひまい。

だがその在り様は、かつての『己』の相棒と、ビリに似ていた。

「……あなた、本当に無口ですね……」

「……話すのは、苦手だ……」

どつこにも嫌いになれない少女に、返事をする。

セシリ亞はひとつ溜め息をつくと、気を取り直して大仰な仕草でぐ  
るりと観客席を見渡す。

「ふふ、わたくしの勇姿を一目見よつと、こんなにも人が集まりま  
した。

あなたはそんな剣一本で、わたくしこんな芸を見せてくれるのが  
しら?」

セシリ亞の間に、彼女に剣の切つ先を向け、力を込めた視線と共に  
答える。

「……寄つて、斬る……」

そうだ。

相手が誰であろうと、それこそ神であろうと。  
己には、井上真改には、もとより

「……他に、能がない……」

「いいじょう。なら、踊りなさい。わたくし、セシリア・  
オルコットと、ブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

いいだろ？、貴族のお嬢さん。  
——ブルーティ

華のない、無骨な剣舞でよろしければ、一曲お相手仕の！

セシリアのもつ、全長一メートルを超える長大なレーザーライフル、  
スターライトmk?の銃口から閃光が放たれる。

回避。

狙いを外れたレーザーが、アリーナを覆う遮断シールドに当たる。  
観客席から悲鳴が聞こえたが、今はそちらに割く意識の持ち合わせ  
はない。

「あら、わたくしの初撃をかわすだなんて、なかなかの反応ですわ  
ね」

「……

セシリ亞は己に銃口を向けたまま余裕に満ちた口調で言つが、そこに油断はない。

自分で言つた通り、射撃には自信があるのだろう、その自分の銃撃を初見で完全に回避した己を、油断ならない相手と判断したようだ。

「ですがそれも、いつまで続くかしら？」

「……ツ！」

射撃、射撃、射撃。

雲霞の如く押し寄せる、閃光の乱舞。

スラスターを噴かし、まずは回避に専念する。

セシリ亞の武装、スターライトmk?は、その巨大さに見合った威力を誇る。  
山田先生との戦いでやつたような装甲任せの突撃ではこいつらが保たない。

加えて、弾速も驚異的だ。打鉄は防御力重視のバランス型であり、機動力はそれほど高くはない。近付くには被弾を覚悟せねばなるまいが、その被弾を少しでも減らすためにはセシリ亞の「クセ」を掴む必要がある。

「ええい、ちょこまかと……！」

一向に当たらないことに流石に焦りが出てきたのか、セシリ亞の射撃に乱れが生じる。

好機。

スラスターを全開にし、突撃を仕掛ける。

「ハ、ハの……！」

上下左右だけだつた機動に前後の動きが加わり、照準の修正が出来ていな。

最短距離を真っ直ぐ進んでいるだけだが、当たらない。

間合いままであと一息、といづこりで、セシリ亞の顔に浮かぶ笑みに気付いた。

「お行きなさいつ！ブルー・ティアーズ！」

(……なに……！？)

瞬間、四方から浴びせられる閃光。

打鉄のシールドエネルギーが大きく削られる。

状況もわからず突撃を続けるのはまずい、一旦距離を取らねば。

「驚きまして？これがブルー・ティアーズの真の武装、これこそが本来ブルー・ティアーズと呼ばれるもの。

この機体は、ブルー・ティアーズを搭載した実験機として同じ名前を与えられているにすぎませんの」

(……自立機動兵器……！)

セシリ亞の周囲に浮かぶ、四機の砲台。

フィン状のパーツに直接特殊レーザーの銃口が開いたそれらが、狩人に従う忠実な獵犬のように己を狙っている。

成る程、己はまんまと罠にかかった獲物というわけか。

「先ほどの動きには驚きましたが、このブルー・ティアーズを起動した以上、同じようには行きませんわよ？」

「……」

流石にスタートライトmk?と同等の威力はないだろうが、銃口の数は五倍になつた。

あれだけの射撃技術だ、大抵の相手は容易く仕留められるだひつ。「ここからが本当の始まりですね。せいぜい、わたくしを楽しめてくださいな」

「……」

オーケストラの指揮者のように、セシリ亞が高々と銃を掲げる。それを受け、ブルー・ティアーズが多角的な直線機動で己に近付いてくる。

囮まれるのはまずい。包囮を逃れるべく、己はスラスターを噴かした。

「シン……！」

シンが操る打鉄を囮もつと、四機のビットが動く。

シンもアリーナ内を縦横無尽に動き回りビットに包囮されるのを防いでいるが、それでも五対一だ。

ビットのうち何機かはシンの背後や頭上、足下といった、ハイパーセンサーで見えていても反応が遅れる「死角」に入っている。

今もまた、死角から放たれたレーザーが装甲を掠めた。

「このままじゃ、ジリ貧だ。

「くそ、あいつ、強い……！」

シンも何度もブレードを投げつけて反撃しているが、当たらない。FCUの恩恵を受けられない投擲では、高速で動き回るヒュは捉えられない。

そして投擲の隙を突いて、セシリ亞が持つ巨大な銃からレーザーが放たれる。

その一撃はすんどのところでかわせたが、無理な回避で体勢が崩れた。

そして、ついに。

「やばい、囮まれた……！」

「真改……！」

いよいよ激しさを増す、閃光の雨。

シンは絶えずスラスターを噴かし続けているが、巧みな射撃でひとつでも包囲を抜けられずにいる。

「畜生、まるでなぶり殺しじゃねえかよ……！」

セシリ亞は、強い。

あのシンが、ここまで一方的にやられている。なら俺は、そのシンに十年経ってもまるでかなわない俺は、果たして本当に強くなれるのか？

「くそ……！」

追い掛け続けた親友が、まるで歯が立たずに傷付いていく姿を見て  
いられず、思わず俯いてしまつ。

パンツ！

「何をしている、馬鹿者」

「ち、千冬姉……？」

思わずそう呼んでしまひ、しまひた、と思ひがしかし、頭に一度田  
の衝撃は来なかつた。

「あいつはお前になんと言ひた？」

「それ、は……」

『……よく、見ておけ……』

『……己の、剣を……』

「やうだ、ならば田を逸らすな。あいつの、真改の戦ひ姿を、一瞬  
たつとも逃さず田に焼き付ける。

……それが、今のお前の役田だ、一夏」

「千冬姉……」

そつぱん千冬姉も、シンから田を離さな。

幕も山田先生も、決してシンから田を離さうとしない。

「それ」「いのちが負けるつて、決まつたわけじゃないよ～？

「え……？」

「ほひ～、このひが、わしきから一回も当たつてないよ～？」

「……！」

そういえば。

危ないところは何度もあつたし、掠ることも多かつたが、さつきの一斉射撃以外、直撃は一度もない。

「きつといのちは今、チャンスを待ってるんだよ。一発逆転の、チャンスを」

「のほほんさん……」

「だから、おりむーも、いのちはこと信じてあげよ～？」

「……なんてこつた。俺だけが、シンのことを信じてなかつたってのか？」

「ようやく気付いたか、馬鹿者め。お前は一体、十年間も、あいつのなにを見てきたんだ？」

「そうだ、シンはいつだって、黙つて道を切り開いてきた。俺を守つて左腕をなくしたときも、一切泣き言を言わず、片腕で剣を扱う鍛錬を始めた。

そんなシンだから、俺が憧れ、あの千冬姉も認めたんだ。

「そうだ、心配することなんか何もない、俺はただ、シンの勝利を信じればいい。

「つはは」

思わず笑いが漏れる。全く、自分が情けない。  
親友のことも、信じていなかつたなんて。

ばちゃん、と、両手で頬を張つて気合いを入れる。

体を反らして限界まで息を吸い、腹筋に力を込める。

親友が必死に戦っている。

見ているだけなんて耐えられないなら、やる」とはひとつだけだ。轟音が鳴り響くアリーナに、届くとは思えない。

それでも言わないと。

だつて、それが応援つてものなんだから。

「いけえええつ……シイイイイインツ……」

(……馬鹿者が……)

ハイパー・センサーが拾つた幼なじみの声援に、苦笑しそうになる。それほどまでに、今の己は窮地に見えるのか。

確かに一方的に攻められてはいるが、よく見ればわかる。焦っているのは、己よりむしろセシリ亞のほうだ。

「そんな、どうして……？」

当たらないのか。

理由は簡単だ。イギリスの代表候補生であるセシリ亞は戦闘経験も豊富だらうが、その相手は自分と同じエレダ。

つまりは、一対一なのである。

そしてその相手も当然一対一の戦いを多く経験しており、だからこそ死角からの攻撃は効果的だった。

唯一の敵が目の前にいる以上、死角から撃たれることなどないのだから。

だが己は違う。リンクスとして戦場を駆け抜けていた己は、一対一の戦闘などほとんどなかつた。それこそ、前から撃たれるほうが稀なほどだ。

だから、見える。

たとえ死角に回り込もうと、その動きを察知し、攻撃に対応できる。機動力の問題でビットを追い切ることは出来ず、反撃も出来ていないが、その問題は今解決する。

ビットが一機、己の背後を取つた。

今度こそと、セシリ亞がビットに指示を出す。

ロックオン。

銃口からレーザーを放たんとするその瞬間に、己は後ろ手にブレードを投げた。回転しながら飛翔する刃がビットを貫き、爆散させる。

「なあつー？」

驚愕するセシリ亞。

投げたブレードが当たるわけがないと、心のどこかで思つていたのだろう。

当然だ、そう思われるために、外れるとわかつていながら今までブレードを投げつけていたのだから。

確かにFCUJによるロックオンが出来ない投擲攻撃では、高速かつ変幻自在な機動力を持つEISは捉え切れない。逆に言えば、止まつてさえいれば投擲の技術次第で当てる」とも出来るということだ。

例えば、射撃体勢に入り、発射する直前のブルー・ティアーズとか。

セシリ亞がビットを操作するには、多大な意識を割く必要があることは気付いていた。

四機もの自立機動兵器を同時に操るのだ、並大抵の集中で出来ることではない。

だから命中率を上げるため、発射の瞬間、ビットの動きを止めて安定させることにも気付いた。

あとは簡単だ。攻撃を回避し続けることでセシリ亞の焦りを呼び、故意に隙を作ることでビットを背後に誘い込んだ。

セシリ亞は自ら眼に飛び込んだとも気付かず、必中を期してビットを空中に固定する。

「いまでくれば、ビットにブレークを投げ当てるなど容易い。

(……借りは、返した……)

では、反撃を開始しよう。

「……ツー！」

「な、く、ブルー・ティアーズ！」

突撃してくる己を迎え撃つべくビットに指示をだすが、驚愕により集中が切れたのか、ビットの動きは明らかに精彩を欠いていた。

これならば問題なく追える。

ブレードを振るい、全てのビットを切り捨てた。

「そ、そんな……！」

スラスターを全開にし、セシリアに向け一直線に加速する。

セシリアも距離をとるべく後退するが、加速していた己の方が速い。

あと一歩でこちらの間合いといつとこりで、セシリアが動く。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あつてよ！」

それがどうした。同じ手が一度通じるとでも思つたか。

セシリアのスカート状のアーマーから突起が外れミサイルとなり、己を田掛けて飛んで来る。

己は脚部のスラスターを上へ、背部のスラスターを下へ、それぞれ噴かす。

前方宙返りをするように大きく回転し、直近で放たれたミサイルを回避した。

「な  
」

驚愕の連続で、今度こそセシリア自身の動きが止まる。

このまま退がり続ければ、一回転した勢いのままブレードを打ち始めたのだが、これでは回りきれない。

ならば。

セシリアの両肩を踏みつけ、全てのスラスターを下向きに全開で噴かすと同時に、蹴り抜く。

「キヤアアアアアツ！」

混乱しているところに強烈な一撃を受け、アリーナの地表まで落ちていくセシリア。

己は再びスラスターを噴かし、追撃をかける。

ブレードを逆手に持ち替え、セシリアを壁掛け、一直線に落ちる。

「隙だらけ、ですわ……！」

衝撃から回復したセシリアが、レーザーライフルを持ち上げる。

構わない、己にも打鉄にも、もう余力は残っていないのだ。  
この機を逃せば、どちらにせよ後はない。

(……一撃だけでいい……)

銃口に光が集まる。  
警告、危険。

(……耐えてくれ、打鉄……！)

そして己は、閃光に飲み込まれ。

「……終止……」

セシリ亞の胸に、ブレードを突き立てる。

『試合終了。勝者 井上真改』

アナウンスを聞き、茫然とする。

負けた？このわたくしが？

井上さんの最後の一撃、打鉄の全重量にスラスターの推力と重力を  
加えたその一撃は、確かにわたくしのブルー・ティアーズの絶対防  
御を発動させ、シールドエネルギーを枯渇させるだけの威力はあつ  
たでしょう。

ですがそれは、あの落下の勢いを維持できたらの話です。

最後の瞬間、わたくしは確かに、井さんにスター・ライトmk?の  
銃口を向けました。

この銃の威力は、井さんも見ていました。ボロボロの打鉄で受けき  
れるかは、賭けだったはず。

なら回避するか、そうでなくとも多少は怯んで、スラスターの勢いを弱めるだろ？と思つていたのに。

なのに、彼女はほんの僅かも怯まなかつた。  
光を放つ銃口から、顔を背けることさえしなかつた。

(……強い、ですわね)

機能停止し、ISが解除されていく。背中に土の冷たさを感じ、わたくしは自分の敗北を実感しました。

(……負けてしまいましたのね)

負けるわけにはいかなかつたのに。

たとえどんな勝負でも、わたくしは負けるわけにはいかなかつたのに。

オルコットの名を、家を守るために、わたくしは、勝ち続けなければならなかつたのに。

そのために、努力をしました。

勉強も訓練も必死にこなして、祖国の代表候補生となり、IS学園に首席で入学しました。

けれど。訓練機に乗つた、片腕というハンデを持つ、ISについてでは素人と大差がない少女に、負けてしました。

この報せをうけたら、イギリス政府はどう思つでしょう。  
見込み違いだつたと、わたくしから代表候補生の立場を剥奪するでしょうか？

もし、そうなつたら わたくしが泣いて、オルコットを守  
ればいいのでしょ。

(……無様、ですわね……)

アリーナを包む歓声が、ひどく遠く聞こえます。

代表候補生を破った一年生の女の子を称える歓声が、わたくしが受けなければならなかつた歓声が、とても、とても遠く感じます。

(このアリーナが、こんなに、広かつただなんて……)

わたくしを守るエリが消えて、自分がとてもちっぽけな存在になってしまったかのように錯覚しました。

あるいはそれは、錯覚ではなかつたのかもしませんが。

ふと、わたくしは自分が涙を流していることに気付きました。  
負けた悔しさではありません。

なにか大事なものなくしてしまつたような、そんな悲しみを感じたからです。

(自分ではなにも持つていない、『えられたもので着飾つていただけですのに)

もういいです、今日はもう疲れました。

明日からどうなるのか、そんなわたくしの未来ですからも、今はビックリいいんです。

だから今は、眠らせて下さい。

なのよ。

せつと、わたくしのすぐ近くから、土を踏む音が聞こえました。今このアリーナの中ここのは、わたくしを除けば一人しかいません。

敗者のせめてもの礼儀として、わたくしに勝った女の子の顔を見よう、鉛のように重い瞼を開けます。

「……井上さん」

「……」

そこいたのはやはり、わたくしを倒した少女。とても無口で、片腕のない女の子。

ISを解除した井上さんが、倒れているわたくしを見下すよつて、立っていました。

「……わたくしを、笑いに来たの？あれだけのことを言つておいて負けた、このわたくしを……」

「……真逆……」

小さく首を振り、井上さんがわたくしの言葉を否定します。では、いつainaにを……？

「……セシリ亞・ホルゴット……」

わたくしを真っ直ぐに見詰めて、話すのが苦手な井上さんが、しかしこれだけは伝えなくてはと、その眼で語つて。

「……お前に、勝てたことを……」

「誇りに思つ」

衝撃、でした。

あれだけ強かつた井上さんが、与えられただけのわたくしと違い、全てを自分の力で手に入ってきたであろう彼女が、わたくしに勝つたことを、誇つてくれているのです。

わたくしに勝つこと、それ自体に価値があったと、そう言つてくれたのです。

嘘を言つてゐるのではないと 嘘を言える人ではないと、簡単にわかります。

無口だからではありますん。

井上さんは、こんなにも真っ直ぐに、わたくしを、イギリスの代表候補生でも、オルコットの当主でもない、セシリ亞という一人の人間を、見てくれているのですから。

「……」

無言のままに差し出された手を、思わずとります。

じつじつと固く、冷たく、醜い、岩のような手。

少女らしい柔らかさも、暖かさも、纖細さも、全て失ってしまった手。

けれどもその手は、わたくしが知るどんな手よりも、綺麗で貴く見えました。

露出の多いT-Sリースを着ているせいで顕わになつた、左腕の惨い傷跡も、きっととても大事なものを守つたための結果だと、根拠もなく確信しました。

わたくしの手をとつた井上さんが、その細腕からは想像もつかないほど力強く、わたくしを引き上げます。

「あ……」

「……」

疲労で足に力が入らずふらついたわたくしを、井上さんは優しく抱き留めてくれました。

眼から、ポロポロと涙が零れます。

先ほどの、悲しさから流れたものではありません。

嬉しくて、わたくしをわたくしとして見てくれることが嬉しくて、そのうえでわたくしを認めてくれることが嬉しくて、溢れてしまつた涙です。

「井上さんかっこいいーーー！」

「オルコットさんもすごかつた！感動したよー」

「ああもう、なんで一人とも一組なのよー？どっちかよーせーー！」

さつきまであんなに遠かつた歓声が、今はこんなに近い。

そしてその中には、敗者であるわたくしを称えてくれる声も多くあることに気付きました。

（わたくしが気付かなかつただけなのね。オルコットを守るためにと、プライドや虚勢、そんなもので自分を覆つて、なにも見えなくなつ

ていた)

それを、この人は気付かてくれた。

言葉ではなく行動で、口で語らずともその眼で、そして

たつた一言に込めた、その想いで。

「……？」

わたくしが笑顔を浮かべながら涙を流していることを不思議に思ったのか、井上さんがキヨトンとした顔をしました。

(そんな可愛い顔も出来るんですね)

思わずくすりと笑いが漏れて、自分がどんな顔をしているか気付いたのか、井上さんはまた無表情に戻ってしまいます。それがまた可愛らしくて、けれどちょっと残念で。

「……ありがとうございます、井上さん」  
「……」

突然わたくしに感謝されて、井上さんが怪訝そうな顔をします。きっとこの人は、今日わたくしを救ってくれたことに、ずっと気付かないでしょう。

それならそれで構いません。  
知られてしまうのも、なんだか恥ずかしい気がしますし。  
ですがわたくしも、これだけは貴女に伝えないと。

「……わたくしも」

「…………」「…………わたくしも、貴女と戦えた」と、誇りに思ひこなす  
真改さん

「いやあ、お見事お見事！文句無しに立派だよ井上君！」

セシリアとの試合を終え、シャワーで汗を流し、一夏たちの所に行く。

扉を開けると、如月社長がものすく嬉しそうに声を掛けってきた。

「うんうん、実にいいデータが取れた！いやあ楽しみだなあ、どんな機体が出来上がるのかなあ！－」

「……」

なんだか、凄まじく嫌な予感がするんだが。

「ううしちゃいられない、僕は早速社に戻るよーみんな喜ぶぞ、  
今日は徹夜だ……」

夏休みに入した小学生のよにはしゃぎながら、嵐のよひに去つていく如月社長。不安が加速度的に強くなつていく。

「よひ、シン。お疲れさん」

「流石だな、真改。素晴らしい試合だった」

「このつちかつこ良かつたよー。やひしたらみんなに強くなれるの

「？」

学友たちが口々に勞つてくれる。  
帰りを出迎えてくれる仲間がいるのは、いいものだ。

「おめでとうござります、井上さん…やつぱり強いですね、私も感動しました！」

「どうあえず、おめでとうござつておひい。今日はもう戻つて休め。明日も授業は通常通りだ、遅刻するなよ」

「……」

流石に疲れたので、お散葉にせんべいをもらひ、今日せまひの部屋に戻ろつ。

己が踵を返すと、本音がとことこつこて来た。

「帰り道で倒れたりすんなよ？」

「……」

余計なことを言ひ一夏を見みつけ、言ひべきことを言つておぐ。

「……お前の声……」

「へ？」

「……届いたぞ……」

「んな……ー？」

羞恥からか、顔を真っ赤にする一夏。

それを見た篠が急にいつもとくなつたが、今はそれに付き合つ余裕はない。

とにかく、帰つて寝よう。明日からまた、覚えなければならぬことにかく、

とが云ふのであるのだか。

## 第7話 星光（後書き）

真改のムーンライトと、セシリ亞のスター ライト。

近距離白兵戦特化の真改と、中距離射撃戦特化のセシリ亞。

そういうやつ樽も輝美も中距離射撃型だったなあ……。

そんな経緯から、今回の話は産まれました。

## 第8話 畑田（前書き）

サブタイトル通り、前回の話の畠田の話です。  
激戦を制したことで、真改の田常が少しづつ変化していきます。

朝。

5時半より前に田が覚めた。

「……」

田覚まし時計は鳴っていない。

今日は昨日の疲れを癒やすべく鍛錬を軽いものにしようと、いつもより三十分遅く田覚ましをセットしていたのだが、習慣とは恐ろしいものである。

「……」

若干体が怠いが、一度寝するのもどうかとこつ時間なので、仕方なく起きる。

隣のベッドで眠る本音を起こなひ、「ん」と、タンスからジャージを取り出し、着替える。

タンスに立てかけてある竹刀袋を取り、外へ。

今日もまた、いつもと変わらぬ一日が始まった。

と、思った己が甘かつた。

「お、おはよ。」やじます、井上さん……

「今日も……天氣になりそうですね！」

「お弁当作ってみたんです！よかつたら、朝ご飯に食べてください！」

「…………」

なんだ、これは。

「おはよ てなんだこれ？なんでこんなにいるんだ？」

己に聞くな。

「誰だ、彼女たちは？真改の友達か？」

そんなもの、己にいるわけなかろう。

先日の剣道場での一件から朝の鍛錬を共にするよつになつた一夏と  
篠が話し掛けてくる。

この状況については知らん。己が聞きたい。

「あの、えつと、私たち、昨日の試合を見て……」

「感動しました！」

「それで、井上さん、こつもの時間に走つたつしてゐつて聞いて

「…………」

つまり、「己」を待っていたといつわけか。

「真改のファンといつ」とか?  
「大人気だなあ、シン」

他人事だと思って氣楽に言う一夏を睨んでから、少女たちの方を向く。

「…………」  
「あの、『J』一緒に緒してもいいですか?」「邪魔はしませんから!」「お願いします!」「…………」

……じうしょづ。

全く予想していなかつた事態に、思考が追い付かない。

「あの……ダメ、ですか?」「構わない」「やつたあ!」「ありがとうございます!」

す"に喜ばれようだ。

「己」などのどこがいいのか。

「なにやら妙なことになつたな……」「うし、じゃあ今日はよろしくな」「はー!」「織斑くんと篠ノ井さんもよろしくお願ひします!」

「私、お二人の試合も見てました！」

「……」

急に騒がしくなった朝の鍛錬風景。

まあ、走り始めれば彼女たちも考えを改めるだらう。己の朝の走り込みは、陸上部員にもきついと言われるほど のペースだ。

軽い気持ちで来ているようなら、すぐ正面を上げるだらう。

と、思つた己は大甘だつた。

彼女たちは三人とも、疲労困憊になりながらもついて来たのである。まあ良く考えればここはHS学園、誰しも体を鍛えているのは、当然と言えば当然である。

しかし当初の目論見は外れたものの、彼女たちは本当に邪魔はしなかつた。

己たちが木刀を取り出し素振りを始めるとき、休憩すると言つて素振りの様子を大人しく眺めているだけだつた。流石に木刀までは用意出来なかつたようだ。

だがその熱っぽい視線は止めて欲しい。  
どうにも落ち着かないんだが。

そして素振りも終え、さて帰るか、という段階になると、

「お疲れさまでした！」

「タオルとスポーツドリンク持つできましたよー。」

「はー、織斑くんと篠ノ花さん分です」

「お、おお、ありがとう」

まるで運動部のマネージャーのような手際で、流石の一夏も少し引いている。

「あ、あの、井上さん、これ、お弁当ですか」

「……」

朝からか。

5時の鍛錬に間に合ひつつ作ったとなると、この娘は一体何時に起きたんだ？

「……………」

「は、はい！」

「……………明日からは、いらなー…………」

「え…………」

途端にしゅことなる少女。

どうじゅうと叫ぶのだ、この口元。

「シンは、朝飯作るのは大変だろうからいい、て言つてるんだよ」

「え？」

「それに明日からは、てことま、また来てもいいってことだ。だろ？」

「シン？」

「…………」

一夏の振りに答えず、帰り支度を進める。特に否定もしなかつたが。

「まあ、真改はこんなやつだからな。分かりにくこともあいだらうが、めげずに仲良くしてやつてくれると、私も嬉しい」

続いて篠。お前たちは『』の保護者かなにかか。

「はい！頑張ります！」

「じゃあ、戻るか。タオルとドリンク、ありがとな」

一夏の仕切りで解散し、寮へ戻る。

…………明日はさらに増えていないうだらうな。

「お、いのうちお帰り～」

「……」

「む～、わたしだって早起きへりて出来るよ～」

「……」

驚いた。本音が起きている。HIS学園に来てから初めてのことだ。

念のために言ひておくが、今起きても別に早起きへりて出来るはずがない。

「とにかく、シャワー浴びとこで～」

「己の呆れ顔に気付いた本音が促す。

まあいい、何故本音が起きているのかはわからないが、とりあえず汗を流そう。

シャワーを浴びていると、扉の向こうから本音が尋ねてきた。

「あれ? いのっち、このお弁当どうしたの?」

「…………」

「ふ~ん。昨日のいのっち、かつてよかつたもんね~。ファンがいつぱいできるかも~」

「…………」

勘弁してくれ、騒がれるのは苦手なんだ。

シャワーを終え、体を拭き、下着を身に付ける。

サラシを巻き、HANSUSSを着たところで、本音が包帯のよつな布を持つて來た。

「じゃあこのつか、そこに座つて~」

「…………」

言われるまことに座ると、本音は己の左腕に持ってきた布を巻き始めた。

「己の傷跡を、隠すよ~」

「このいちも女の子なんだから~、ちゅうとは気になこと~

「…………」

「う~ん、やうこいつこじこひめ、このつかひじこひじれ~

そこで本音は一度、言葉を止めて。

「いのっちの傷跡見たとき、おりむー、泣きやうだつたよ」

「……」

以前から思つていたが、本音はぼーっとしていのつりで、周りを良く見ている。

そして大事なことを無意識に見抜き、氣負うことなく言葉に出来る。きっとこの少女は、そつやつて多くの人の心を癒やしてきたのだろう。本人が気付いているのは思えないが。

(……唐沢さんに、似ているな……)

もつともあの人は天然の本音と違い、孤児たちと暮らしていくうえで必要だから身に付けたわけだが。

「ほい、出来上がり。じゃあ次は、髪梳くよ~」「……」

何気に上質そうな櫛を取り出し、己の髪を梳き始める。  
IS学園に来る前は、妹たちがしていたことだ。

「ちょっと傷んでるね~、こんなに長くて綺麗なのに~。いのっち、誰かにやつてもらつてた~?」

「妹……」

「へ~! いのっち、妹さんいたんだあ~!」

「……孤児院暮らし……」

「あ……」

本音の手が止まる。

こんな足りない言葉から、聴い本音は、己の身の上を理解したのだ  
ら。

「…………」めぐね、このつが  
「…………」

静かに首を振る。

それに合わせ、腰まである黒髪も揺れる。

「…………無用…………」

「…………うん。あっがとい、このつが

再び、髪を梳く本音。

その手付きは、妹たちのそれに劣らぬ優しいものだった。

「おまよへいりやこめす、真改さん」

「…………」

次はこいつか。

まだSHRも始まつていなうといひのひ、早くも疲れて来ただ。

「昨日はお疲れさまでした。実に素晴らしい試合でしたわね」

「…………」

昨日までとは180度違つ態度のセシリアに、ソリ数口で学習した己は語つた。

懐かれた。

「真改さんの視界の広さ、反応の速さ、心の強さは十分に見せていただきましたわ。

ですがエリの扱いはまだまだ荒削り。動きに無駄があります」

「……」

言われなくともわかっている。

生身ともネクストとも勝手が違つエリの操縦に、己はまだ習熟していない。

所謂天才と呼ばれる者たちのように、感覚で操るような真似は己には出来ない。

時間をかけ、回数を重ねてこの身に技を刻み込むしかないのだ。

「ですがわたくしも、貴女のおかげで自分の弱点の重大さに気が付きました。

そこで、わたくしと真改さんで訓練をすれば、お互に足りないものが鍛えられると言えましたの」

「……」

別にお互いでやる必要はない氣がするが、まあ、野暮なことは言つまい。

「ですから、真改さんの専用機が完成しましたら、一人で訓練をしませんか?」

「構わない……」

断る理由もないのに、その申し出を受けた。

「…………や、そうですか、さすがは真改さん、よく分かっていますわね！」

それでは、専用機の完成を楽しみにしていますわよー。」

スキップでもしあつた足取りで自分の席にもどるセシリア。  
分かり易すぎる。

「…………なんだつたんだ？あれ」

「…………」

己に聞くな、一夏。

昼休み。

いつもの三人で学食に行くと、いつも増して視線が多い。  
飯抜きでもいいから帰りたくない。

「なんかすげえ見られてる気がする……」

「そうだな……」

「…………」

昨日までは主に一夏に向いていた視線が、今日は己と一緒に一夏で半々といつたところか。

試合ひとつで一夏まで注目を集めることになるとは思わなかつた。一夏は来週の一夏の試合に期待するしかあるまい。

「あの子が昨日の……」

「代表候補生に勝つたって子? 私も見に行けばよかつたなあ……」

「あ、私映像もつてるよ。千円でどう?」

おい、誰に断つて商売してこら。

「あ、買つ買つ」

「昨日見たけど、買おうかな」

「私も、部屋でもつかい見よーっと」

「まじでーっ」

千冬さんと言いつける。

周囲の雜音を気にしてると身が持たない。  
とにかく飯を食おう。

「しかし強かつたなあ、あいつ。俺、勝てるのか?」

「弱音を吐くな。男らしくないぞ、一夏」

「分かつてるよ。だからエリの使用申請書出したんだ。練習しないと、話にならねえからな」

「そういえば、一夏の専用機はいつ来るんだ?」

「わかんねえ。早いといふ来てくれないと、そのままじゃぶつけ本番になりそうだよな」

一夏とセシリ亞の試合は三日後。

それまでの訓練機の使用許可はでているが、一夏が本番で使うのは専用機だ。

格上の粗手と不慣れな機体で戦つのは不安があるだろ。

「まあ、やれることをやるだけさ」

「つ、うむ、そうだな、じつじょつもなことで悩んでも仕方がない」

「……」

氣負わず、しかし頼もしい表情で一夏に、篠の顔が赤くなる。

「「「」ちやうわまでした」」

「……」ちやうわまでした……」

食事を終え、席を立つ。

そう、一夏の言つ通り、「たちはやれる」とをやるだけだ。

さしあたっては勉強である。

さて、午後の授業はなんだつたか……

一日の授業の締めくくり、SHR。

教壇に立つ千冬さんから、驚愕の事実が告げられる。

「井上の専用機が完成した

「…………ええええええええええええええ…………？」

「…………」

「データ取ったの昨日ですよ！？」

「いくらなんでも早すぎませんか！？」

「如月重工が一晩でやつてくれましたっ！」

「流石変態企業！私たちに想像もできないことを平然とやつてのける…」

「そこに痺れる…憧れるウ……」

パニックに陥る教室。かく壇上口も驚いている。  
まさか一日で出来上がるとは。

バアアン！！

千冬さんが教卓を叩く。  
静まる教室。

「落ち着け、馬鹿者共」

険しい顔で言つ。

頭痛でもするのかこめかみを探みながら話を続けた。

「機体は既過ぎに完成し、各種チェックを済ませ、今学園に向けて搬送中だ。あと三十分ほどで到着するらしい」

「…………」

「先方はすぐに起動させたいと言つてこる。場所は第三アリーナ。  
井上、準備しておけ」

「…………」

かなり予想外ではあつたが、早くて困ることはない。  
如月重工の仕事振りに感謝するとしよう。

と、思つた己は胸焼けするほど甘迺いた。

「やあやあ一日振りだねえ井上君！ また会えて嬉しいよ！」

如月社長はかなり興奮している。

昨日の別れ際に言つていた通り完徹したのだろう、その目は血走つ  
ていた。

その様子に、己について来たクラスメイトたちが一歩引く。

「…………随分早かつたですね」

「もともと七割方出来てたからねえ」

千冬さんの問いに即答する如月社長。

しかしそれだと単純計算でT-S一機を四日で開発できることになる  
のだが。

「じゃあ最終調整を始める前に、うちの開発主任を紹介しつづか。彼は僕が学生だったころから一緒に研究をしてる、網田君だ」

如月社長に促され、白衣を着た男が前に出る。

「はじめまして、井上さん。如月重工開発主任の網田です」

不気味な笑みを浮かべ、妙に甲高い声で話す網田主任は、無遠慮に己を感じ取りと見る。

「こやはや、昨日の映像を見たときから思つていましたが、実物はさうにお美しい。特にその左腕一まるで//ロのヴィーナスのようだー。」

「……」

何故だらつ、褒められている筈なのに、全く嬉しくない。己の後ろにいる一夏が殺氣じみた怒りを発しているからか？

「ああ、紹介も終わつたことだし、早速始めよつーすぐ始めよつー。網田君、やつてくれたまえ！」

子供のようになり目を輝かせながら、如月社長が指示を出す。

「では御披露目といきましょつーこれが我々如月重工TIS開発部が総力を結集して作り上げた第三世代型TIS 」

第三アリーナのピットに搬入されたコンテナが、重々しい音をたて、ゆっくりと開く。

そこに在ったのは、淡い銀の輝きを放つ機体。

己の、専用機。

「 脣月おほきわげですっ！」

集まっていたクラスメイトたちが、息をのむ。

コンテナから現れた銀色のIIS、臣月。

まずは目を引くのは、当然と言つべきか、その左腕だ。

正確にはそれを腕とは呼べまい。

それは重厚な装甲で形作られた、機械の翼だ。

「順に説明しましょう。まずはこれ、左腕のない井上さんに合わせて、腕の代わりに取り付けた大出力特殊スラスター、その名も月輪がちりん。左右の推力バランスをあえて崩すことで、複雑かつ変則的な機動を可能にします」

いきなりイカレた装備。

流石如月、という声がそこかしこから聞こえる。

「それだけではありません！この月輪はこれ自体を刃として使える、スラスターを兼ねた武器でもあるのです！」

クラスメイトたちが、うわあ、と呻く。

「続きまして、背部の大型スラスター、水月すいげつ。これはエネルギー噴射による推進だけでなく、噴射口の下にあるコニットに特殊な炸薬が装填されており、瞬間的、爆発的な加速を生み出します」

操縦者に「える反動をまるで考へていなかのよつな、正氣の沙汰とは思えない代物である。

もはや言葉を失うクラスメイトたち。

「次は、左肩のガトリングガン、月影。<sup>つきかげ</sup>射角が広く、精密な射撃よりも弾幕を張るのに向いています」

よつやくまともなものが出てきた、とクラスメイトたちが一息つくが、

「牽制を目的としていますので、弾頭は散弾を採用しました」

それは罠だった。

いずれ劣らぬ変態装備の数々に皆が戦慄している中、己は機体の右腕に取り付けられた武器に、全ての意識を奪われていた。

朧月を見たその瞬間から、「それ」以外は視界に入つていなかつた。

「それ」は細長い、菱形の板のような形をしており、一見しただけでは武器とは思つまい。

だが、己にだけは分かつた。

なんの説明も受けず、それどころかろくに見もせず、まるで最初から知っていたかのように、「それ」がどのようなものであるかを理解していた。

「ううん？さすが井上さん、目の付け所が違いますね。

そり、今まで説明してきた朧月の装備は、「それ」を最大限活かすための、言わば引き立て役でしかありません。」

そんなことは分かっている。

ここにいる誰でもなく、如月社長でも、網田主任でもなく、この己こそが、「それ」のことを最も深く理解している。

「これこそが、朧月が持つ最大にして最強の武器、膨大なエネルギーを極狭い範囲に収束させることで絶大な破壊力を生み出す、光の剣

だって「それ」は、あまりにも

「月光ですっ！」

「彼女」の剣に、似ているから。

## 第8話 真月（後書き）

みづやく登場、ムーンライト！  
やつぱこれがなくちや真改じゃないですよね！  
真改の専用機、朧月は、性能的にはスプリットムーンと似た感じです。武装はだいぶアレですが。

## 第9話 麗月（前書き）

麗月の実戦テスト。  
変態つぶりがどれだけ表現できているかが心配です。

## 第9話　朧月

「というわけで、早速実戦テストをしようつーー。」

全くテンションを落とすことなく、それどころか天井知らずに上げながら叫ぶ如月社長。

クラスメイトのうち数名が怯えました。

「さあ、頼むよオルコット君！」

「ええつ！？」

突然振られてうろたえるセシリア。

「いえ、ですがわたくしの」

「早くしてくれたまえ、もう待てそうもないんだ！さあー。さあさあ！…さあさあさあ！…！」

「ひ」

如月社長の余りの剣幕に涙目になる。

無理もない、あれは恐すぎる。田が完全に狂人のそれだ。

仕方がない、今の如月社長と関わるのはかなり嫌だが、本当に嫌だが、助け舟をだそう。

「……社長……」

「なんだね、井上君？僕の我慢もそろそろ限界なんだ、早く朧月の勇姿を魅せてくれ！」

「……」

如月社長の注意を引きつけながら、セシリアに田線を送る。幾分余裕を取り戻した彼女は頷き、口を開いた。

「如月社長、残念ですが、わたくしのブルー・ティアーズは、昨日のダメージからまだ回復しきっていませんの」

「え、そうなの？ 使えないなあ」

セシリアのこめかみにビンゴと血管が浮かび上がるが、如月社長は全く気にしていない。

「うーん、じゃあ訓練機は？」

「事前に使用申請書を提出していた生徒たちに、全て貸し出します」

「教師権限でどうにかならない？」

「授業中や緊急時ならともかく、今はただの放課後です。申請が通るまで時間と手間がかかりますから、無理矢理取り上げると生徒から不満が出るでしょ」

如月社長の問いに淀みなく答える千冬さん。  
実際に頼もし

「……しじゅうがない、生身相手で我慢するかな……」

待て、今なんて言った。

正氣とは思えない独り言が聞こえたとこひで、すつ、と誰かが手を挙げる。

「あの」

その誰かは、一夏だった。

「俺、今日 訓練機の使用許可、貰つてます」

「こやさすがはブリュンヒルデの弟君だーでは頼むよ織斑君ー」

アリーナ内に響く如月社長の声。

一夏の顔が一瞬嫌そうなものになるが、すぐに元気を取り直して己に向き合つた。

「まあどうにしたって、訓練するつもりだったしな。最終調整とかいうのも、ついでにせつまおう」

「ついでじや困るんだよ、織斑君。僕らひとつてはどちらが本題なんだ、君の訓練なんかどうでもいいんだよ」

「…………」「…………」

頼むかぎり、空氣を読んでくれ。

怒りを鎮めるように一度深呼吸した一夏が、己に話し掛ける。

「HJDでシンと戦うのは初めてだな。  
手え抜くなよ、俺も本氣でいくぜ」

「…………」

悪いが、生身だらうがHJDだらうが、一夏にはまだ負ける訳にはい

かない。

己の今の役目は一夏の目標で在り続けることだ。

千冬さんでもいいのだろうが、彼女は大人だ。負けても仕方ないと、心のどこかで思つてしまつ。

だから、己のような同い年の者 所謂ライバルと呼べる者のほうが、一夏の成長には必要だ。

「こちらの準備は整いました。それでは、始めてください!」

網田主任の声を合図に、一夏が近接ブレードを展開し、青眼に構える。

剣道でも剣術でも使われる、基本にして正道の構えだ。

対して己は、右足を一步引いて左半身になり、月光が取り付けられた右腕を目線の横まで持ち上げ、切つ先を一夏に向ける。多少変則的だが、古流剣術に使われる、霞の構え。

「 行くぜ

「 来い……

一夏がスラスターを噴かし、一気に突撃していく。くん、とブレードを振り上げ、まずは唐竹の一撃。

「 シツ!」

鋭い呼氣に見合つた見事な一撃を、月光で受ける。

月光はかなり頑丈に作られており、これ自体を盾のように使う」とも可能だと、網田主任は言つていた。

その言葉に偽りはなく、ブレードの強烈な一撃を真つ向から受けても傷ひとつない。

「はあっー。」

初撃を受けられた一夏は、突撃の勢いを殺さずに胴を薙ぎ、駆け抜ける。

それを受けつつも、淀みない、流れるような一連撃に幼なじみの成長を実感する。

だが、まだ足りない。

すれ違うようにして己の背後に回る一夏を追うべく、月輪を起動。片方だけから噴射するエネルギーが、朧月を高速で回転させる。再びブレードを振り上げ三撃目を打ち込むとしていた一夏が、そのあまりの速さに田を剥ぐ。

「く……！」

刃と刃の噛み合ひ音。

打鉄の近接ブレードと朧月の月輪が火花を散らす。

このタイミングで反応し、かつ反射的に振り下ろしたブレードで初撃に劣らぬ太刀筋を描いて見せた一夏に感嘆する間もなく、驚愕する。

出力が強すぎる。

打鉄ごとブレードを弾き返した月輪は、そのまま朧月を二回転させた。

なるほど、光を放ちつつ回転するその様は、確かに真円の満月の如くだらう。

その中心にいる己はまたまつたものではないが。

「すっぴえ衝撃。冗談だろ、推力だけでこれがよ……」

「…………」

一人して戦慄する。

この月輪、性能は申し分ないが、じゃじゃ馬過ぎる。  
扱い難いどころではない、下手に使えば、すぐに敵を見失うだらう。

「セイツー！」

再び突撃、今度は突きを放つ。

月光でいなし、そのまま立ち止まつての打ち合いく。

「オオオオオツ！」

「……ツ！」

雄叫びを挙げ、一夏が連撃を繰り出す。  
スラスターを併用し、推進力を上乗せした剣戟は重く、己の右腕を  
痺れさせる。

「ゼエイツ！」

「…………」

片腕では抑えきれず、右腕を弾かれた。

その隙を逃さず一歩踏み込む一夏に、起動した月影の銃口を向ける。

三連装の砲身が回転し、散弾の雨を吐き出した。

想像を超える反動に照準がブレたが、この距離と散弾の攻撃範囲なら関係ない。

関係ないが

「うおおおおおつー？」

堪らはず退がる一夏。その顔は涙目だ。

「ざつけんな！なんだそれ！？恐すぎるぞ！…」  
「…………すまん」

思わず謝る。

ただでさえ強力な散弾を、毎秒三十発という驚異的な速度で連射するのだ。

轟音と共に降り注ぐ散弾に打ち据えられ、打鉄の全身から火花があがる様は、撃つたこすらも驚くほどだった。

「それもう近くで撃つなよ！絶対に撃つなよーー？」  
「…………」

相手に恐怖心を植え付けることが出来るという点では破格の性能。だが弾が少ない。体積の大きい散弾を使っているので仕方がないが、要所を見極めなくては、瞬く間に弾切れだ。

……牽制用なのに無駄弾が撃てないのか。本末転倒だな。

「…………」

月影を警戒してか、一夏が距離を取る。  
どうやら間合いを計つていいようだ。

(……ならば……)

ガコン、という音を立て、水月に特殊カートリッジが装填される。  
撃針が信管を叩く。

自身を弾丸として撃ち出す狂氣の機構が、その力を見せ付けた。

「がつ……ー?」

肩甲骨を鈍器で殴られたような衝撃。

一瞬で一夏に接近するが、己は加速の衝撃で体勢が崩れ、一夏はあまりの速さに反応出来ていなかった。

結果。

「うあわあつー!」

「……ツー!」

衝突。

もつれ合って、地面に落ちる。

「ぐ……おい、大丈夫か、シンー?」

「……」

体を動かそうとすると、肩に激痛が走った。  
折れてはいなにようだが、少し傷めたようだ。

「おー、中止だ!早くシンの手当てをー!」

悲鳴のように一夏が叫ぶ。

それを受け、治療班が慌てて駆けつけ、IISを解除した己を運び出していく。

「シン、大丈夫か?」

「……無用……」

ついて来た一夏が心配そうに声を掛けてくる。

今は己の怪我を気にかけているが、それが収まれば次はその顔を怒りに呪めるだろ？

如月社長に、殴りかからなければいいが。

「なるほど、水月の威力が強すぎる、と。それくらいならすぐに調整できるかな」

「ええ、肩甲骨周辺の保護機能を改良しましょ？ 社に戻れば、一時間もあれば出来るかと」

「それじゃ、早速データをまとめといてくれ」

診察の結果、怪我は大したものではなかった。

だが一、三日は出来るだけ肩を動かさないように、とのことである。そうして一夏と共にピットに戻ると、如月社長と網田主任が先の会話をしていたのだ。

「おや、井上君。もう少し待ってくれたまえ、今データの解析中だから

「……てめえ」

全身から怒りを発し、一夏が一步前に出る。

放つておけば何をするかは明白だ。

なので、一夏の手を掴んで止めたが、

「離せよ。あの野郎、一発ぶん殴つてやる」

「……」

全く止まる様子もなく歩き続けようとする。  
自然と右手を引かれる形になり、肩が痛んだ。

「……っ」

「！」、「めん。大丈夫か？」

途端に怒りを霧散させて、己の方を向く一夏。  
……少し、卑怯だったか。

「どうこいつもりですか、如月社長」

「うん？なにが？」

今度は千冬さんが怒った様子で、如月社長に話し掛ける。

「操縦者に怪我をさせるようなE-Sを作ったことについてです」「だから今そこを調整していくんじゃないか」

「そうこうことでは

「

「……」

このままでは千冬さんの怒りが加速していくだけだと思ったので、  
視線で止める。

「ふむ、朧月はどうだつたかね？井上君」

「……気に入った……」

「やうだらうともーいやあ、君ならやう言つてくれると思ったよー」

確かに朧月はとんでもない代物だったが、その性能は申し分なかつた。

水月は流石に調整してもらつが、あとは己が朧月を使いこなせるよう訓練すればいい。

「……いいのか、井上」

「……」

心配そうに尋ねてくる千冬さんにて、頷いて答える。

「……本人がそう言つなら、私からは何も言わん」

「……」

「話はまとまつたかな？なら今日から、この朧月は君の専用機だ！要望があつたらすぐに、遠慮なく言つてほしい。二十四時間、365日受け付けるからね！」

「……」

周囲からの目を全く気にせず、上機嫌な如月社長。

この人相手に気を使う必要があるとは思えないのに、遠慮なく頼らせてもらおう。

「さすがに今日はこれ以上は無理かな？まあ、怪我が良くなつたころにまたくるよ。その時はもう一度頼むよ、井上君」

「……承知……」

朧月のデータ解析をしていた網田主任に声を掛けて、帰り支度を始める如月社長。

その姿を、一夏は最後まで睨み付けていた。

「いのつち、肩痛くない～？」

「……平氣……」

今口は、お互いに打鉄を装着して打ち合っている一夏と簎を眺めている。

簎が使っている分の打鉄は本来己に対して許可が出ていたものだが、流石に今日はもう使えないでの、山田先生に頼んで簎が使えるようにしてもらつた。

「はあっ！」

「せいいっ！」

剣の腕はほぼ互角の二人だが、I-Sの腕も同程度のようだ。どちらも最初はぎこちない動きをしていたが、少しずつ良くなつて来ている。

「……あの機体で、ほんとにいいの～？」

「……」

心配そうに尋ねてくる本音に頷いて返す。

確かに色々と問題のある機体だが、流石は如月重工の技術力といったところか、性能自体は高い。

基本的に接近戦しか出来ない己には、あれくらいたく抜けた機体の方が都合がいい。

ただ、月光の威力を試せなかつたのは少々残念だ。

「無理だけはしないでねへ、こいつち  
「……」

それは出来ない相談である。

必要なら、己はこくらでせこの身を危険に晒すだろ？

「己には、この命くじこしか、懸けるものがないから。

「いのこの時はへ、つわども「つと」と言つとくんだよへ

「……」

呆れたよつて言つ本音へ、申し訳なく思つ。

だがそれ以上に、この少女とは、守れない約束はしたくなかった。

「じゃあそへ、せめて怪我した時は、すべに、正直に言つとくんだよへ

?」

「……承知……」

どつせ本音のことだ、己が隠したところですぐにバレるだろ？  
なら始めから正直に言つてしまつた方が、かける心配は少なく済む  
筈だ。

己の返答に満足そうに頷いて、本音は一人の訓練に視線を移す。  
一夏の攻めに、第の守りにいちいち感嘆の声をあげてはしゃいでいる少女の背中に、聞こえなによつに声をかけた。

「……有難う……」

「え～？なにか言つた～？いのつち～」

「……」

不思議そうな顔をする本音。無言を返す。  
首を傾げてから前に向き直り、再びまじめ始めた本音の背中を見ながら、想う。

お前がルームメイトで、良かつた。

## 第9話 麗月（後書き）

如月重工は大変なものを作つていきました。

楽しみにして下さっていた皆さん、ごめんなさい！月光の出番はもう少し先です！

けどきっと派手にデビューをさせて見せますから、もつゞし待つていて下さい！

## 第10話 一夏（前書き）

クラス代表決定戦です。

戦闘描写まじむずい。全然文字数が稼げない。

ヴァオー並みの装弾数が欲しいです。

作者「まだまだ書けるぜ、メルツェエエエエルツー！」

はいごめんなさい無理です

## 第10話 一夏

月曜日。

今日は一夏とセシリ亞による、クラス代表決定戦が行われる。その準備のため、今、己たちは第三アリーナ・Aピットにいるのが

「……こねえな、IS」

「……そうだな」

「……」

そう、政府から支給されるといつ、一夏の専用機がまだ来ていない。

「……急に決まったことだからな。準備に時間がかかっているんだ  
ろ?」「けじしがISは一日で出来たぞ!」

「あれは如月重工がおかしいんだ。普通はISの開発にはかなりの時間かかる」

「……あんな変態どもでも、腕は確かってわけか

「……」

如月重工の話になつた途端に不機嫌になる一夏。  
よほど嫌いなようだ。

「どうすんだよ、これじゃ練習どころか、一次移行も出来ないぞ」「わ、私に言つなつ!」

ファースト・シフト

IS、特に専用機には、コアに残つて以前の操縦者の情報を消去する初期化<sup>フォーマット</sup>、新しい操縦者に合わせてコアを調整する最適化<sup>フィッティング</sup>とい

う機能が備わっており、それらを合わせて一次移行<sup>ファースト・シフト</sup>という。

この一次移行を済ませて、初めてそのIISは操縦者の専用機となるのだ。

しかしセシリ亞との試合はもう間も無く始まる。一次移行をする時間は、もうないだろ？

「お、織斑くん織斑くん織斑くん！」

「まあまあ先生、まずは落ち着いて。深呼吸です、ほら、ヒッヒッ

「ヒツヒツ不……てこれは違いますよ……！」

一處の跡に此の落葉が撒け、これが樹木の死。

「千冬姉……」

## 再び振り下ろされる出席簿。

「緒斑先生と呼べ、学習しなくともなく死ね」

そ、そ、それでですねー！来ました！繰戻ぐんの専用E/Sー！」

110

漸く  
か。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつけ本番でものにしろ」

一夏は一人の言葉にも生返事をするばかりで、ピットの搬入口から

田を離さうとしない。

聽こえる。

その重厚な防壁扉の中から、重々しい駆動音が響く。

それはまるで、忠誠を誓つた主のもとへ馳せ参ざる、甲冑を身に纏つた騎士の足音のようだ。

そして、一切の飾り氣のない、純白の機体がその姿を顯した。

「これが……」

「はい！織斑くんの専用ヒュ、白式です！」

心此処にあらずといった様子の一夏が、白式に近づいて行く。親を探す幼子のように伸びられた手が、白式に触れた。

「背中を預けるよつて、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化をする」

一夏が田式に体を任せると、田式の装甲が閉じる。

かしゅつ、といつ空氣の抜ける音が響き、一夏と白式が一体化した。「IDSのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

千冬さんの声が僅かに震えていること、一夏も気付いたのだろう。その口元を僅かに緩ませて、安心させるように、言葉を紡ぐ。

「大丈夫、千冬姉。いける」

「やつか」

ほつとしたよくな声。

そんな姉弟のやり取りを、なんと言葉を掛けていいか迷っている様子で、篠が見詰めている。

その不安げに震える肩に、そっと手を置いた。

「真改……」

「……」

黙つて頷く。

己が言つことではないだろうが、言葉にしなければ伝わらない。

だから、言わないと。

「……あつがとつ」

「……」

己に小さく微笑みを浮かべてから、篠が一夏を見る。  
その瞳を、真つ直ぐ。

「勝つてこい、一夏」

「任せろ」

力強く答える一夏に、篠も安心したようだった。

全く。どこまでも、素直じゃない。

「シン」

「…………」

ピシト・ゲートの前まで移動し、今まさに飛び立とうといつこいつで、一夏が己に声を掛けて来た。

「俺の剣、良く見とけよ」

「…………ぬかせ…………」

いいだらへ、見せてみる、この「刀」。お前が、どれほど成長したのかを。

「 行くぜー！」

やつして、一夏は飛び立った。

敵が待つ、戦場へ。

「 ようやく来ましたのね。待ち伏せられましたわ」  
「 そりや悪かつたな。けど遅刻したのはこいつだぜ、俺のせいじゃない」

腰に手を当てるポーズをしながらセシコアに、軽口で答える。余裕があるわけじゃない。緊張を紛らわせようとしているだけだ。

「試合を始める前に、聞きたいことがあります」

「なんだよ」

「あなたは、真改さんの幼なじみだと聞きましたが？」

その言葉で、聞きたいこととやらの察しがついた。

シンに関わったやつは、大抵そのことが気になるからだ。

「……の方の左腕のこと、ビニマドー存知で？」

やっぱり、な。

正直、辛い。

シンの左腕は、俺の罪だ。

それを突き付けられて気分がいいはずがない。

だけど、俺は「力」を手に入れた。

まだまだ扱いきれるとは思えないが、それでも俺の目標に向けた足掛かりとしては、この上ない「力」を。

だから、いい加減、覚悟を決めないと。

「全部知ってる。俺が、もぎ取ったようなもんだからな」

「な

セシリ亞の顔が驚愕に歪む。

次いで、怒りに。

「あなたが、真改さんの腕を……？」

「ああ、俺のせいだ。無知で無力で無謀な俺を庇って、あいつは左腕を失なくしたんだ」

セシリ亞の怒りは凄まじい。

もはや俺を睨み殺そうとしているかのように、その眼に殺氣を載せている。

「だから、俺は強くならなきゃいけないんだ」

「……は？」

突然話が飛躍して、付いて来れないのだろう。セシリ亞がポカんとした顔をする。

構うもんか、これは俺の「決意」だ。まずは言葉にしないと始まらない。

「シンは初めて会った時から強かつた。腕を失くす直前じゃあ、あの千冬姉と、生身でなら互角に戦えるくらいにな。

信じられるか？まだ小さな女の子がだぜ？」

当時のことと思い、苦笑が浮かぶ。

あれは度肝を抜かれたもんだ。

「腕を失くしてからも、強かつたよ。強かつたけど、それでもどうしても弱くなつた。千冬姉には、勝てなくなつた」

当たり前だ。実力が拮抗している一人のうち、片方だけが大きなハンデを負えば、その勝負は目に見えている。

「シンがIIS学園を受験するつて聞いた時、思った。やっぱシンはすげえなつて。シンなら、たとえ右腕しかなくとも、もしかしたら千冬姉と同じ、「ブリュンヒルデ」になれるんじゃないかなって」

左腕がないなら、右腕だけで剣を振ればいい。

そんな当たり前で、だけど無謀とも言えることを、シンは黙つてやつて見せた。

「けどさあ、そなつたらどうなる？シンの左腕は？無知で無力で無謀な、なんの役にも立たない男のクソガキを庇つて失くしてそんな馬鹿なことのために大事な左腕を捨てたなんていう、汚点になつちまうんじゃないか？」

片腕だけでも最強なら、両腕が揃つていたならばほゞだつたらう。

世間の関心はそこに向くに決まつている。  
そして事実を知つて思うのだ　なんて勿体無いことをしたんだ、と。

「　認めねえ。認められるか、そんなこと……。」

総身を怒りが満たす。

今日の前に鏡があつたら、そこに写る愚か者の顔を、俺は即座に叩き割るだろう。

「ずっと憧れてた。今だつてそつた。そのシンが、俺のせいであんな目にあつた」

生涯忘れることはないだろう。

病院のベッドの上で、生命維持装置に繋がれ、眠り続ける少女の姿を。

包帯で覆われた、欠けてしまった左腕の、その様を。

「シンは気にするなつて言つ。自分は平氣だからつて。

……そんなわけあるか。あいつは剣士で、女の子だ。それが腕一本失くして、あんな傷こなれて、平氣なわけがねえだろうが」

だから誓つた。

次は俺が守ると。

そのために強くなると。

けれどシンはそんなこと求めてなくて、俺の助けなんか必要なくて、だから、どうすればいいのかわからなくなつた。

「俺が工事を動かせるつて分かつた時、決めた」

シンを守る。

シンだけじゃなく、俺の大切なものは、全部守る。

その誓いは今も変わらない。

そしてそこに、もうひとつ、新たな誓いを立てた。

「俺が証明する。強くなつて、シンにも、千冬姉にも負けないくらい強くなつて、証明するんだ。

織斑一夏は、井上真改が左腕を捨ててまで守るほどに、価値のある存在だつてな」

だから、そのために。

「俺の糧になつてもらひづぜ

セシリ亞・オルコット」

アリーナ中に響き渡つた一夏の決意。

それを全観客に聞かれたという羞恥も忘れて、己は呆然としていた。

だつて、一夏のその決意は。

(……「己」と、同じ……?)

かつて「彼女」の生き様を世界に肯定せらるるために戦つた、「己」としても良く似たものだつたから。

「……一夏……」

達成感に似た喜びが、心を満たす。

一夏が「彼女」を知る筈はないが、それでも、一夏は「彼女」を認めてくれる、そう確信した。

己のかつての夢を、叶えてくれたのだ。

(……それが、お前の答えか……)

お前の友であることを、誇りに思つ。

ならば「己」も、その決意に見合つ強者となつ。

お前の目標として、胸を張れるよつ。

だが今は、田前の戦いをしかと田に焼き付けなければ。

一夏の決意を聞いたセシリ亞が表情を引き締める。

手に持つたレー・ザーライフル、スター・ライト Mk?を一夏に向か、四機のブルー・ティアーズを展開する。セシリアの必殺の布陣。どうやら彼女は、一夏を「敵」として認めたようだ。

「いいでしょ、ならその決意、まずはわたくしに証明してみなさい！」

「言われるまでもねえ。行くぜ、セシリア・オルコット！」

放たれる光の雨を、大きく回避。ビットによる包囲を防ぎつつ、接近を図る。「己とセシリアの戦いから学んだのだろう、一夏は直撃を受けろ」ともあつたが、その数は多くない。なによりセシリアからの直接攻撃は全て避けている。警戒するべき順位は分かつているようだ。

「うおおおおおおつー」

「ーの……ー」

白式の性能は高い。

装甲も機動力も、打鉄を大きく上回っている。

この分ならパワーも相当なものだらう、近付ければ、勝機はある。

「ブルー・ティアーズ！」

「ちいっー！」

だがセシリアも流石と詰つべきか、その巧みな射撃で、一夏の接近を許さない。

徐々に追い詰められていく。

「「」のくらこで……！」

だが次第に、一夏の動きが良くなつてきている。機体に慣れてきたのか、攻撃が見えるようになつてきただのか、被弾も減つている。

一夏はセシリ亞のレーザーライフルを警戒しつつ、そのままはジットを必死に追つていた。

あれは、攻撃を察知しようとしているのではない。動きを見極めようとしているのだ。

そして、ついに。

「ぜああつー！」

一閃。

一夏の刀がビットを捉え、切り捨てる。

「く……！」

「シンとの試合で見せすぎたなー。ビットの動きは、もう見切ったぜー。」

「！」

言葉通り、背後に抜けようと動くビットに鋭く反応し、追つ。その後部スラスターを切り落とし、一機目を撃墜。

「これなら……！」

薄くなつた包囲を突破し、セシリ亞との間合いを詰める。

あと一息、といつとひひで、セシリ亞がミサイル型のブルー・ティ

アーズを起動した。

「それも　　」

しかし、一夏は臆さない。

「　　見たぜっ！」

バレルロールに似た動きで回避した、その瞬間。

「　　かかりましたわ」

二機のビットから放たれた閃光がミサイルを撃ち抜き、白式の間近で起爆させた。

「一夏っ……！」

爆炎に包まれる幼なじみの姿に、筈が悲鳴のように名前を呼ぶ。消耗したところにあの爆発だ、タダでは済むまい。

普通なら。

「　　ふん。機体に救われたな、馬鹿者め

「　　うおおおおおおつ！」

「なつ……ー？」

自らの勝利を確信していたセシリ亞の顔が、驚愕に歪む。爆発の黒煙を切り裂いて、純白の機体が駆けた。

一次移行を終え、機体の損傷を回復し、一夏の専用機として真の姿を顯した白式が、セシリ亞に迫る。

「ねむくまうりあめああああつ。」

手にした刀の形が、先ほどまでは変わっている。

覚えがある。あれば、千冬さんの

(……そんなところまで……)

己に似るとほ。

一夏の持つ、かつて千冬さんが振るつていた、雪片に良く似た刀が光を放つ。

零落白夜。自身のシールドエネルギーを引き替えに、ISのバリアーを含むあらゆるエネルギーを喰らい尽くす、諸刃にして必殺の剣。

「チエエエストオオオオアアアツ！」

大上段に構えたそれを、裂帛の気合いと共に振り下ろす。

当たることが倒すことと同義である、その刃を前に、セシリ亞は

「はあああああつ！」

二機のミサイル型ブルー・ティアーズ、手にしたスター・ライトmk  
?を盾にすることで、紙一重で回避した。

切つ先が僅か数ミリ掠めただけで、シールドエネルギーの大半を奪い去つて行つた一撃に戦慄しながら、しかし決して怯まない。

「お行きなさい」

得物を失つたことで空いた両手を、左右に大きく広げる。  
血ひの子供たちを血漬する、母親のよひ。

「　　ブルー・ティアーズッ！！」

一夏の背後、最後の突撃の際に残してきた二機のブルー・ティアーズが、閃光を放つ。

一夏は必死に回避しようとしたが間に合わず、白式の背中を光に擊ち抜かれ

「……すまねえ、白式。お前は頑張ってくれたのに、上手く、使ってやれなかつたな……」

『試合終了。勝者　セシリ亞・オルコット』

一夏の敗北が、宣告された。

「あれだけの啖呵を切つておいてこの様か、大馬鹿者」「はい、すいません」

千冬さんのお叱りを受けてうなだれる一夏。

「己も一夏の暴露話を観客たちに聞かれたことを思い出し、今更ながら恥ずかしくなってきたので、一夏を責めるように睨み付ける。

「動きに無駄がありすぎる。決められた確信もなく、後顧の憂いを残したまま突撃するなど愚の骨頂だ。明日からは訓練に励め。暇があればIRSを起動しろ。いいな」

「はい、分かりました」

容赦ない指摘にますますヘコむ一夏。いい気味だ。

「えっと、IRSは今待機状態になつてますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおこしてくださいね。はい、これ」

どさり、と面を立てて置かれたその「IRS起動におけるルールブック」なる本の分厚さに、一夏が辟易したような顔になる。

「何にしても今日はまわしをしまいだ。帰つて休め」

そう言つて、山田先生を引き連れ立ち去る千冬ちゃん。

「帰るだ」

篝、もう少し優しい言葉を掛けてやれ。

今一夏は落ち込んでいる、好感度を上げる好機だぞ。

「……」

「……な、なんだよ」

寮への帰り道、一夏を睨み付ける篝。

尋ねられ、むすつとした顔で返す。

「負け犬」

「ぐはあつー?」

一夏が胸を押さえてへたり込んだ。致命的なダメージを受けたようだ。

「一夏」

「……なんだよ」

「その……負けた、悔しいか?」

「……悔しい。悔しいに決まってる」

「……そうか」

その心情を感じ取ったのだろう、篇もそれ以上一夏を責めることになかった。

「すげえなあ……あんな強いヤツに、シンは訓練機で勝ったのか」

「……そうだな」

「……」

沈んで行く夕日を眺めながら、二人で歩く。その静けさが、己には心地良かつた。

「……明日からは、あ、あれだな、もつと本格的に訓練しないといけないな」

「?まあ、そうだな」

「そ、そうだろ?。そこでだ、これからも、わ、私がエリについて教えてやつてもいいぞ?」

一生懸命に言葉を紡ぐ筈。微笑ましい。

「そりや ありがたい。よろしく頼むぜ、筈」

「う、うむーそこまで言われては仕方がない、この私が特別に

」

「シンも教えてくれるだろ?」

「……！」

お前はあれか、わざとやっているのか?

見る、筈が縋るような目で己を睨んでいた。

「……不可……」

「ええ、なんでだよ?」

「……手一杯……」

まあ嘘ではない。己は己で、朧月の扱いを身に付けなければならぬからな。

「……」

筈に頷いてやると、ぱあっと嬉しそうな顔になる。

……その顔を、己でなく一夏に見せてやればいいものを。

「うむ、真改にも都合があるだろう、仕方がない、私が一人きりで教えてやる!」

「あ、ああ。ありがとウ……？」

何故疑問形。

イマイチ進まない幼なじみたちの関係に溜め息をつきながら、己たちは寮へ帰つていった。

熱いシャワーを浴びながら、先ほどの試合を思い返します。

初めは、「彼」を問い合わせようと思つていました。

強く、気高く、美しい「彼女」が、どうして左腕を失ったのか。「彼女」に聞いても答えが返つてくるとは思えないのに、卑怯だとは思いましたが、「彼女」の幼なじみだという「彼」に聞くことにしたのです。

次に、「彼」に対して強い怒りを覚えました。

「彼女」の腕を奪つたのは自分だと、自分のせいだ「彼女」は腕を失つたのだと、堂々と言い放つ「彼」に、殺意すら抱きました。

そして、「彼」の決意がどれほどのものか、見たくなりました。

失われた「彼女」の左腕に相応しい存在になるのだと、そのためには強くなるのだと、そう語った言葉が果たして本物なのか、知りたくなつたのです。

最後に、「彼」に勝つた時にこの胸を満たしたのは、大きな喜びでした。

どれだけ傷付いても力強さを失わない瞳、どれだけ追い詰められても決して折れない心、拙い技でなお挑み、最後まで足掻き続けた、その姿……。

それが、「彼女」に重なつて。

勝ちたい、と。

純粹に、強く、そう思いました。

だからわたくしも、最後まで諦めず、戦うことが出来たのです。  
だからこそ、そして得た勝利が、こんなにも嬉しいのです。

(これが……勝利を誇る、ということ……)

わたくしを解き放ってくれた、「彼女」の言葉。  
その意味を、わたくしも知ることが出来た。

「彼」 織斑一夏という、男の子によつて。

わたくしの父親、いつも母の顔色をうかがつてばかりいて、情けない姿ばかりが記憶にあるあの人とは真逆の、とても男らしい男の子。

「彼」のことを、もっと知りたい。そして、「彼女」のよう  
に、強くなりたい。

織斑一夏と、井上真改。

あの一人のことを思うと、トクン、と、胸が高鳴りました。

第10話 一夏（後書き）

セシリアさん、一股疑惑。けび今のことじぶんちも片思ひ。  
果たして彼女の命運はいかに……！？

## 第11話 代表（前書き）

一夏がクラス代表に決定しました。  
真改は有名人になりました。

二人の平穏な日常が終わりました。

## 第11話 代表

クラス代表決定戦が終わった翌朝。

己と篠は剣道場にいた。一夏は昨日の試合の疲れからか、まだ寝ているようだ。

「肩の調子はどうだ？」

「……十全……」

本来なら剣道部が朝練に使うことに、元々剣道部員である篠はともかく、部外者の己がいるのには訳がある。

肩の怪我は昨日医者の許しを貰い、ではひとつ手合させでもしようが、となつたのだが、どうせなら剣道場でやうづと篠が言い出した。邪魔になるのではないかと思つたのだが、

「剣道部の先輩たちからお前を連れて来てくれと言われている。もう一度、お前の剣を見たいそうだ」

己の邪剣のどこがいいのか。

少なくとも、剣道家には参考にならんと思つただが。

ともかく、そういう経緯で今己は篠と対峙している。

剣道着を着込み、防具を身に着けた篠に対し、己はジャージ姿のままだ。

少なからず失礼かとも思ったが、

「井上さんの動きやすい格好でいいよ。そのまゝが参考になる」

ところが剣道部部長の言葉に甘えることとした。

「前回は頭に血が上って、ろくな戦えなかつたからな。今日は、お前の剣を見せてもらひうで」

「…………」

今の筈には前回のような隙はない。面具の下から、油断なく口を見据えてくる。

「それでは 始め！」

審判役を買つて出た剣道部員の声。

それを受け、青眼に構えた筈がじりじりと距離を詰める。

己は竹刀を肩に担ぎ、筈の接近を待つ。

筈が一足一刀の間合いに入つた瞬間、前に倒れ込むよつとして、体重を乗せた袈裟切りを放つた。

「ツー！」

筈はそれを防ぐが、無論一撃で終わる筈がない。

前傾姿勢になることで関節にバネのように力を溜め、一気に解放。体を跳ね起こしつつ、竹刀を叩きつける。

筈は素早く反応して防ぎ、即座に反撃してきた。

だがそこには既に「はいない」。一撃田を防がれた瞬間、後ろに跳んで距離をとつている。

己は基本的に、受け太刀をしない。

体重を乗せた一撃は片腕では受けきれないからだ。

故に、避ける。

「はああつー。」

再び間合いを詰めて来た簫の繰り出す連撃を、間合いからは逃げず、体捌きのみで避け続ける。

唐竹は半身になり、袈裟切りは上体を逸らし、横薙は身を屈めて、動くたびに靡く髪にさえ触れさせない。

「せこつー。」

鋭く踏み込んでくる簫。

その足を払った。

「うわっー。」

踏み出した足が床を踏みしめる瞬間に払われたことでの勢いのまま倒れる簫に、竹刀を振り下ろす。

「くつー。」

「足払いとは卑怯だぞ」と言いたいところだが、あれだけ見事に決められると、なにも言えんな

「…………」

「己は一夏や簫のような正道の剣士ではない。  
剣に対するこだわりはあるが、戦う時は蹴りも投げも使つ。  
当然、隙あらば足払いをしけ、倒れた相手に追撃をかける」と

躊躇はない。

「まるで戦場の技だな……お前らしこと言えば、お前らしこが」

「……」

呆れ半分、感心半分といった様子で言つ簫。だから言つたら、剣道家には役に立たんと。

「仕切り直しだ、行くぞー！」

言つて、今度は一気に間合を詰めてくる。

「胴オオオツー！」

素速い足運びから繰り出される胴打ちを、身を屈めてくぐり抜ける。簫とすれ違い、振り向き様に一撃。

それは防がれたが、そのまま駆け抜けて距離をとる。

体捌きは鈍つていないと確認できた。次は足腰を診るとしよう。

反転した簫に向き直る。距離、約三間。

一步で最大速度に達し、一歩田で地を這つかのよひに低く身を沈める。

己の動きを追つて、簫が視線を下げた。

瞬間、跳ぶ。簫の頭上を越えるほど、高く。

「なあつーー？」

その高さに驚き(反)応が遅れる簫の頭を田掛け、全体重を乗せて竹刀

を振り抜く。

「ぐうーー。」

篝は半身になることでからうじてその一撃を避けたが、体勢を崩した。

そこで、空振りしたことで流れた体の勢いを利用して蹴りを放つ。

「くあつー。」

側頭部に命中。加減はしたが、衝撃にふりつゝ篝。

着地し、そのまま連撃へ。

「ちいひー。」

剣道のそれとは違う、体重の乗った剣。

特に己は、片腕というハンデを補うために全身の筋力を使って剣を振る。

体当たりじみた、剣を体ごと叩きつけるようなそれは、生身であればこそ出来る芸当だ。足の形や宙に浮いている関係から、EISで再現するのは難しいだろう。一夏はスラスターを使って似たようなことをしていたが。

「むう……！」

「……ツー！」

篝は良く凌いでいるが、その身に馴染んだ剣道のそれとは別物の攻撃に対し戸惑っている様子だ。

しかしこの技は、体力の消耗が激しい。

一撃ごとに全身運動をするのだから当然のことであり、つまり長期

戦に向いていない。

今のように相手に粘られると、厳しい戦いになる。

まあ、まだまだ余裕はあるが。

「せえつ！」

現状を開闊すべく、簫が鋭く竹刀を振り上げ、面打ちを放つ。己の連撃の隙を見切り、そこを突いた一撃。

今己は右腕を振り抜いた直後であり、体が大きく開いている。簫の面打ちを防ぐことは出来ない。

故に、防御でも回避でもなく、攻撃を仕掛ける。

腰を低く沈め、一步、大きく踏み込む。

振り上げた竹刀の下に潜り込み、簫の胸に左肩を叩きつける。左腕がなくとも、こういう使い方ならば問題ない。

「ぐ……！」

当て身を受け、よろめく簫。竹刀を振り下ろし揃ね、がら空きになつたその胸に、横薙の一閃を打ち込んだ。

「……胴有り……」

「ふう……流石だな、真改」

「…………」

改めて認識したが、一夏だけでなく笄の才能も凄まじい。己が数十年掛けて体得した剣技に、この年で既に追い付きたつある。非才の身には羨ましい限りだ。

もつとも、まだまだ負けたやるつもつはないが。

「お疲れさん。いやあ、いいもん見せてもらったよ」

審判役を務めていた二年生が話しつけてくる。

「技もそりだけど、凄いジャンプ力だねえ。どう鍛えりゃあんなこと出来んのさ」

「…………」

そんなことを言われても、ただ日々の鍛錬としか答えようがない。

「ま、あんたさえ良ければ、これからもうひらく遊びにおこでよ。部長にやあたしから声をとくし、みんなも喜ぶからな」

「…………」

気が向いたら来ることもあるかもしけんが、先ほども述べた通り、己の剣は邪剣だ。未来ある若き剣道家たちが見るべきものではない。

……今は己のほうが年下だが。

「だから、気が向いたらでいいって。飯長に待ってるからな」

「…………」

けらけらと笑いながら、話す先輩に礼をし、剣道場を後にす  
る。

その内また来てみるのもいいかと、考えながら。

そんなことがあつた朝のSHR。壇上には山田先生の姿。

「では、一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繫がり  
でいい感じですね」

教室中から歓声があがる。いちいちノリの良い連中だ。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺、昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になつて  
んでしょうか？」

一夏の質問ももつともだ。試合に勝つた方がクラス代表になる、と  
いう取り決めだった筈だが。

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

張りがあり良くな響く声が聞こえたと思ったらセシリ亞だった。  
相変わらず元気なヤツである。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれも考えれば当然のこと。何せこのわたくし、セシリ亞・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

「この娘の自信が一体どこから湧いてくるのか、気になるところだな。  
それで、まあ、わたくしも大人気なく怒つたことを反省しまして  
しかし反省するのはいいことだ。失敗を活かせるかどうかは、まず  
そこから始まるのだから。

「一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりE.S操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

要所にポーズを挿みながらのセシリアのセリフ。演劇でも見ているような気分になってきた。

……しかしこの娘、今、「一夏さん」と言つたな。またか、一夏。

「そ、それでですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がE.S操縦を、真改さんのような達人が剣術を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ

「己を巻き込まないでくれないか。セシリ亞との訓練は承諾したが、そこに一夏も加わるとなれば、確実に厄介なことになるんだが。

「あいにくだが、一夏の教官は足りてない。私が、直接頼まれたからな」

思つたとおり、簞がセシリアを牽制する。

しかし以前はその眼力に怯んでいたセシリアだが、今はしつかりと簞と田を合わせている。

「あら、あなたはエリランクの篠ノえさん。Aのわたくしに向か  
『用かしら?』

「ら、ランクは関係ない! 賴まれたのは私だ。い、一夏がどうして  
もと懇願するからだ」

ちなみにEもエリランクじだ。つべづべ才能に恵まれない。

「え、簞ってランクCなのか……?」

「だ、だからランクは関係ないと黙っているー。」

一夏は確かランクBだった筈。東博士の妹である簞が自分よりラン  
クが低いことが意外だったのかもしれません。

バシンバシン!

「座れ、馬鹿ども!」

連続する打撃音と共に、千尋さんが現れた。簞とセシリアは頭を押  
されて悶絶してくる。

「お前たちのランクなどゴマだ。私がしたらどれも平等にひよつ  
トだ。まだ殻も被れていない段階で優劣を付けようとするな

流石は元世界最強、言ひひとが違う。

「代表候補生でも一から勉強してもうと前に言つただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しき」

表情を厳しく引き締めて言つ千冬さん、「私生活でのだらしなさは微塵も伺えない。

「織斑、今何か無礼なことを考えていただろう

「己と似たようなことを考えていたのだろう、一夏が千冬さんに睨まれているが、生来の無表情のおかげか、口の思考に気付かれた様子はない。

……いや、一夏が分かり易過ぎるのか？

「そんな、めつせつむじやせこませざ

「ほひ

パンツ！

「すいませんでした

「分かればいい

千冬さんはふん、と鼻を鳴らしながら、

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな？」

一夏を正式に、クラス代表に決定した。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもいいつ。織斑、井上、オルコット。試しに飛んでみせろ」

千冬姉の指示を受け、俺の専用機になつた田式を開こうと意識を集中する。

ちなみにシンの専用機、朧月はすでに調整を終えて戻つて来ている。とりあえずあのイカレたスラスターを使っても怪我するようなことはなくなつたみたいだが、あの変態どもが作った機体だ、まだなにか問題があるんじやないかと心配してしまったのも仕方ないと思う。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

その言葉を聞き、田指す場所までの道のりの長さを垣間見る。

ISは一次移行を済ませると、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリ亞は左耳のイヤーカフス、俺は右腕のガントレット。

普通はアクセサリーなはずなのに、俺の場合はなぜか完全に防具なのは、この際どうでもいい。

問題は、シンのISの待機状態だ。

「……」

最近、包帯で左腕を隠すようになったシンの首にかけられているのは、細い銀の鎖。そしてその鎖を中に通してシンの胸元に提げられ

てこるのは、鎌と同じ銀色の指輪だ。

『朧月は井上君のパートナーだからね。これはいわゆる、エンゲージ・リング結婚指輪つてやつさ。洒落が効いてるだろ？』

変態代表の言葉を思い出して、勝手に苛立つ。あの野郎、どこまで

人を馬鹿にしてやがるんだ。

「集中しろ」

千冬姉にせかされる。

まずい、殺氣でも漏れてたか、と思ったがどうやらそうではなく、単にまだ展開出来ていながら俺だけになつたようだ。

右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。色々試して、このポーズをするとISが展開されるのをイメージできるようになった。

瞬間、光の粒子が俺の体から溢れ、再集結してIS本体になり、俺の体を包み込む。

「よし、飛べ」

言われて、三人同時に飛び立つ。

しかしシンとセシリ亞はあつといつ間に空に上がって行ったのに、俺の上昇速度は明らかに遅い。

「何をやっている。朧月はともかく、ブルー・ティアーズよりは正式の方が出力は上だぞ」

通信回線から聞こえる千冬姉のお叱りの声。

ISの操縦にはイメージが大事なのだが、空を飛ぶイメージという

のが俺にはどうにも掴めていなかつた。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。つーん、イメージか。シン、なにかコツとかないのか?」

俺の質問に、シンは首を振つて答えた。

「……無意味……」

「ええ、なんでだよ」

「……人により、違う……」

確かに、イメージなんて人によつて違うもんだ。  
けどそれを踏まえた上でのコツを教えて欲しかつたのに、そんな一刀両断しなくともいいじやないか。

そんな俺とシンの遣り取りを、セシリ亞は楽しげに眺めている。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。  
そのときは真改さんと三人で」

「一夏つーこつまでそんなところにいるー早く降りてこーー」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。

みれば、遠くの地上には山田先生からインカムを強奪した篠の姿が。  
……千冬姉に怒られるや。

「織斑、井上、オルコット。急降下と完全停止をやつて見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、真改さん、お先に」

言つて、すぐさまセシリアは地上に向かう。一気に加速し、地上スレスレで一気に減速、難なく完全停止をクリアして見せた。

「……見事……」

「つまいもんだなあ」

さすが、普段から代表候補生であることを自慢しているだけはあるつてことか。

「……先に行く……」

セシリアに続いて、シンも地上に降りて行く。  
一気に加速、一気に減速したまでは良かつたが、減速のタイミング  
がちょっと遅かつたみたいだ。

シンは完全停止には失敗し、地上に足を着けてしまった。

「お前の番だぞ。降りて來い、織斑」

深呼吸をひとつして、意識を集中。

背中の翼状の突起から口ケットファイアーが噴出しているイメージ  
を思い描く。それを傾けて、一気に地上へ。

「速つ……！」

イメージよりもかなり速い降下速度に驚く。気付けば地上はもう田の前だった。

「やば……！」

ズドオオンッ！――

慌てて減速したが、もう遅かった。すゞい音を立てて墜落し、グラウンドに埋まる。

(……は、恥ずかしい……)

クラスメイトたちのくすぐす笑いが俺の心を容赦なく抉る。その威力たるや、HISの皮膜装甲も絶対防御も貫くほどである。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言つた。グラウンドに穴を開けてどうする？」

「…………すみません」

とこかく、いつまでも埋まつたまじやあ格好がつかないので、穴かり狂ひ。

(まだまだ練習しなきゃなあ……)

「織斑、武装を開けろ。それくらいは自在にできんなつただろ？」「

なぜか喧嘩を始めたセシリ亞と筆を押しのけて（首を傾げた俺を見て、シンが呆れたような顔をした。なぜだ）、千冬姉が俺の前に立

つて言った。

「では、はじめの」

「はい」

言われて、横を向く。

正面に人がいないことを確認してから、武装を開けるために、両手を左腰に持つて行く。

空を飛ぶイメージとは逆に、こちらはすぐ出来るようになった。イメージするのは数年前、巻き藁を前に正座する、シンの姿。真剣を収めた鞘を左手で持ち、柄を右手で持つ。

正座から立ち上ると同時に踏み込み

一閃、両断される巻き藁。

太刀筋は、全く見えなかつた。

なのに、その居合の美しさは理解出来た。

あの光景は今も俺の目に焼き付いていて、集中するまでもなく思い描ける。

それを、再現するように。

腰に佩いた刀を抜くよつとして、白武の唯一の武装、雪片式型が現れる。

「 」

千冬姉が、かなり珍しいこと、驚いた顔をしている。  
まあ実の弟である俺でもどうにか気付けるくらいの微妙な表情の変化だったが。

「……オルゴット、武装を展開しろ」

「おー、ノーロメントかよ。」

「はい」

返事して、セシリ亞は左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突き出す。

一瞬、爆発的な光を放ったと思えば、その手には全長二メートルを越えるレーザーライフル、スター・ライトmk?が握られていた。

「さすがだな、代表候補生　　ただし、そのポーズはやめろ。横に向かつて銃を展開させて、誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」

「ですが、これはわたくしのイメージをまとめるために必要な

「直せ。いいな」

「　　、……はい」

セシリ亞はまるからに不満がありそうな顔をしているが、さすがに千冬姉には逆らえないのか、素直に頷いた。

「オルゴット、近接用の武装を展開しろ」

「えつ。あ、はつ、はいつ」

今、頭の中では文句を並べてたるう、セシリ亞。氣をつけろ、千冬姉は人の心が読めるぞ。

銃を収納し、新たに近接用の武装を展開しようとするセシリ亞。け

れど手の中の光はなかなか像を結ばず、へむへむへむを眺めつつ  
てこる。

「へへ……」

「まだか?」

「す、すぐです。

ああ、もう一つ… インターセプター…」

ヤケクソ氣味に武器の名前を叫んで、ようやく武器が展開される。  
しかし武器の名前を呼ぶのは、いわゆる初心者用のやり方だ。やはり  
接近戦は苦手なんだろうか?

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待つてもいいの  
か?」

「う……すぐに展開できるよ!」と練習します

「分かればいい」

試合では俺とシンの両方に接近を許したからか、近接武器の重要な  
はよく分かつていてるんだろう。

悔しそうにしながらも素直に頷くセシリ亞だった。

「では井上、次はお前だ。武装を展開し!」

「…………」

言われた次の瞬間には、右腕に細長い菱形の板のような武器、月光  
が展開されていた。

「ほつ、早いな。近接武器の扱いはお手のものか。飛行もそれくら  
いできるようになります」

「…………」

徹底的に讃めない方針の千冬姉であつた。

「さて、時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

それはつまりこの穴を埋めろってことか。

チラシと箋を見ると、ハンド顔を逸らされた手伝ってはくれないらしい。

ジンとセジロ、一方はゼンにいたが、た

溜め息をつきながら、グラウンドの整備を始める。HSの操縦をものにするには、まだまだ時間がかかりそうだ。

「というわけでっ！織斑くんクラス代表決定おめでとうー。」「おめでとうー！」

夕食後の自由時間。食堂を貸し切つて、「織斑一夏クラス代表就任パーティー」なる馬鹿騒ぎが行われている。

夕食後の自由時間。

一夏は即席のパーティー会場の中心で、クラスメイトたちから日々に祝いの言葉を贈られていた。

全くめでたくない顔の一夏だが、女子に囲まれてゐるその姿が、第

には気に入らないようだ。先ほどから不機嫌そつて茶を飲んでいる。

「はこはーこ、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別イベントジローをしてきましたー！」

オーと盛り上がる一同。要は騒ぎたいだけなのだろう。

「あ、私は一年の黒薫子。よろしくね。新聞部副部長やつてまーす。はここれ名刺」

「あ、どうも」

「ではではすばり織斑君！クラス代表になつた感想を、ざひざー！」

「えーと……」

一夏にそんなことを期待するだけ無駄だ。

「まあ、なんとこうか、がんばります」

「えー、もつとここのメントちゅうだいよー。俺に触るとヤケドするぜ、とかー！」

もう一度言おひ。

一夏にそんなことを期待するだけ無駄だ。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！」

黛先輩の台詞も相當に前時代的だと思つが。

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして……あ、セシリアちゃんもコメントちょうどい」

「わたくし、いうこつたメントはあまり好きではありませんが、

仕方ないですわね

嘘を吐け、準備万端だつたるうが。

「「ホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したか  
といふと、それはつまり」

「ああ、ながそだからいいや。写真だけちょうどいい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いじよ、適当に捏造しておくから。あとは……あ、真改ちゃん！」

まづい、見つかった。

「こないだの試合で一気に有名人になつたわけだけど、それについて「メントお願いしまーす！」

ひゅばつーと己の前に移動する黛先輩。凄まじい歩法である。

「  
「  
「なにかメントちょうどいい！」「  
「えーと、メントを……」「  
「えつと、その……」「  
「  
「じめんなさい」

勝つた。しかしそれは虚しい勝利だった。  
黛先輩は気を取り直してカメラを構える。

「じゃあ写真でいいや。ほらほら、三人並んで」

「えつ？」

「注目の専用機持ちだからね。ほら、なんかポーズとかしてみてよ」

「そ、そうですか……。そう、ですわね」

「己」と一夏をちらちらと見てくるセシリア。その姿はまるつきり恋する乙女だ。

……その対象は一夏だけだと願いたい。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて」

「時間がかかるからダメ。はい、せつとあと並ぶ」

「己たちを強引に近付ける黒先輩。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は～？」

わかるか。

「え？ えつと…… 2？」

「ふー、74・375でしたー」

パシャッとしたジタルカメラのシャッターが切られる。その直前、フレームに収まるべく滑り込んでくるクラスメイトたち。

「なんで全員入ってるんだ？」

幕を含めた一組の全員が、一瞬で集まっていた。雀蜂をも凌駕するチームワークである。

「あ、あなたたちねえつ！」

「まーまーまー」

「クラスの思い出になつていいいじゃん

「わ～い、いのつちと[写真]」

「先輩！その[写真]、あとで絶対くださいね！」

再び騒ぎ始めるクラスメイトたち。そのエネルギーが一体どこから供給されているのか、「織斑一夏代表就任パーティー」は、夜の十時まで続いた。

## 第11話 代表（後書き）

真改は努力の人。つまりは何度も失敗しながら技術を身に付けていきます。

次回、いよいよあの子が登場！

けど一夏と最初に会つてるのが真改なので、ファースト、セカンドの呼称が使えません。

……盲点だったぜ。

## 第1-2話 鈴音（前書き）

ついにあの子が登場です。

これで幼なじみが全員そろいました。

この先どんどん書くのが難しくなつていきそつです。

## 第1-2話 鈴音

「ふうん、じじがそなんだ……」

まだ暑くなり始める前の四月、あたしは工学園に転校してきた。今日はもう夜だから、授業に参加するのは明日からだ。

「えーと、受付ついでにあるんだっけ」

上着のポケットからメモ紙を取り出す。

そこには「本校舎一階総合事務受付」と書かれていた。

「だからそれどこあんのよ。地図くらい持たせなさいよね

紙に文句を言つたつて返事があるはずもなく、あたしはイライラと一緒にメモ紙を上着のポケットにねじ込んだ。

「自分で探せばいいんでしょう、探せばまあ

ぼやきながら歩き出したものの、この工学園、バカみたいに広い。誰かに道を聞こにも、時間も八時を過ぎてるから、外を出歩いてる人影もない。

「あーもー、面倒くさいなー。~~空~~飛んで探そつかな……」

一瞬、名案を思い付いたと思つたけど、やめておく。

あたしはまだ転入の手続きが終わってないので、今はまだ正式な工学園の生徒じゃないのだ。そんなあたしが学園内で工を起動させたら、外交問題まで発展しかねないのだ。

そこまで考えて、それだけは本当にやめてくれ、と何度も頼んできた政府高官の情けない顔を思い出した。

（ふつふーん。あたしは重要人物だもんねー。自重しないとねー）

ちょっとと気分が良くなつた。お気に入りのボストンバックを抱ぎ直して、再び歩き出す。

「だから……でだな……」

すると、IS訓練施設から人が出でてくるのを見つけた。

（ちょうどいいや。場所聞こひとつ）

小走りで近づいて行くと、今度は知つてゐる声にすくべよく似ている声が聞こえてきた。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

一夏だ。

（あたしつてわかるかな。わかるよね。一年ちょっとと会わなかつただけだし）

けど、もしあたしだつてわからなかつたらどうじょへ。

（大丈夫。大丈夫！それにわからなかつたら、あたしが美人になつたからだし！）

「いち

「

声をかけようとしたところで、一夏がふたりの女の子と一緒にいることに気づいた。

そのふたりの内、ひとつは問題ない。

170センチくらいある長身は、スラリと長い脚にパンツと伸びた背筋のおかげでさらに高く見えた。

腰まで真っ直ぐに下ろした髪は黒曜石を糸にしたみたいで、夜の暗さの中でもよく見える。

刃のように鋭い眼は瞳が深い黒色で、見詰めていると吸い込まれそうだ。

滅多なことじや小搖るぎもしない無表情だけど、顔立ちはとても綺麗だ。

日本刀みたいな美人と言われている、あたしのもうひとつの幼なじみ、井上真改だ。

シンが一夏と一緒にいるのはいい。

同じ中学校にいたときは弾を含めた四人でよくつるんでたし、シンのことだからE.S学園を受けることは不思議じゃない。

片腕で合格したことはむしろシンならそれくらいにできて当然だと思う。

けど、もうひとつは

「一夏、いつになつたらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、「くーつて感じ」って」

「……くーつて感じだ」

「だからそれがわからないって言ひて

おい、待てって篇！」

早足で去つていく女の子を、一夏が追いかけていく。シンは呆れた  
よつこ溜め息をついてから、ふたりについて行つた。

あの子、誰?なんであんなに仲良さそうなの?っていうかな  
んで名前で呼んでんの?

ああそう、そーいうこと、よくわかつたわ一夏。あたしとい  
う幼なじみがいながら、女の子ばっかのT.S学園で、早速ウハウ  
しちゃつてるワケね?

( ) 上等。その根性、叩き直してあげるわよ

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた?」

朝。一夏が席に着くなりクラスメイトが話しかけている。

入学から数週間、流石に一夏も、それなりに女子と話せるようにな  
つてきた。

「転校生?今の時期に?」

一夏の疑問も当然だ。四月に、それも一年に転入するなど、普通は  
有り得ない。

しかもこのT.S学園は、所謂親の仕事の都合などで転入出来るほど、

条件は甘くない。

難しい試験を突破する知識と実力に加え、国の推薦が必要になる。つまり

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

何とも気合いの入らない返事をする一夏。  
しかし、中国か。

「いのうちも、転校生が気になる〜？」

「…………」

とここ近付いて来た本音からの質問。  
己は代表候補生というより、中国といつ言葉に反応しただけだ。

「……中国に……」

「ん〜？」

「……友人がいる……」

「あ〜、グローバルだね〜」

「…………」

日本に I.S 学園が出来てからというもの、日本国内の外国人の数は爆発的に増えた。

外国人の友人がいるくらい、珍しくはないと思うが。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そうー！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・

オルコットと真改さんが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしたちだけなのですから

だから己（じ）を巻き込むな。今一夏は機動について練習中だから、己（じ）は必要なかろう。

「織斑くん、がんばってねー」

「フリー・バスのためにもね！」

フリー・バスというのは、クラス対抗戦の優勝賞品である、学食、デザートの半年フリー・バスのことだ。

己（じ）には必要ないな。

「今のところ専用機を持つてるクラス代表つて一組と四組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いや」

教室の入り口から、聞き覚えのある声が聞こえる。ちょうど今考えていた、中国に帰ってしまった友人の声。

「二組も専用機持ちがクラス代表になつたの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴（鈴）……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に來たつてわけ

小さな体に溢れんばかりの活力を漲らせた、幼なじみの姿がそこにあつた。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわー！」

「なんでだよ……」

昼休み。

あの後一夏が鈴に余計なことを言つたり簞とセシリ亞が一夏に詰め寄つたり簞とセシリ亞が授業に集中しておらず千冬さんに叩かれたりしていたが、それ以外には特に何事もなく昼休みである。最近クラスメイトたちもついてくるようになり、十人近い人数でぞろぞろと学食に行くと、ツインテールの小柄な少女が待っていた。

「待つてたわよ、一夏ー！」

食券の自動販売機の前にラーメンの丼をのせたお盆を持って仁王立ちしているのは、もはや言つまでもなく鈴である。

「なにしてんだよ、そんなところで。他の人が食券買えないだろ」「わ、わかってるわよー！」

一夏にもつともな指摘を受けた鈴は恥ずかしそうに道を空けた。

「またラーメンか？」

「いいでしょ、好きなんだから」

「なら早く食べりやいいのに。麺伸びるぞ」

「そ、そんなのあたしの勝手でしょー！」

鈴の行動の意味に、一夏は全く気付かない。不憫な。

とつあえず空こでる席を見つけ、座る。

「久しぶりだな、一年ぶりくらいか？元気してたか？」

「ま、まあね。アンタこそ、たまには怪我病気しなさこよ」

「どうこう希望だよ、そりゃ……」

鈴なりの照れ隠しにも、一夏は気付かない。本当に不憐な。

「いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になつたんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタ一人で、なにエレベーターのよ。－コースで見たときびっくりしたじゃない」

「己も鈴と会つのは一年ぶりだ。聞きたいことが色々あるのはわかるが、今はやめておけ。

何故ならば

「一夏、それからどういった関係が説明してほしこのだが

「やつですわ！一夏さん、まさかうちの方と付き合つていらっしゃるのー？」

いやそれはない。

「べ、べ、べ、別にあたしは付き合つてゐるわけじゃ……」

「やつだ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」

セシリアの質問を一刀両断する一夏。

斬鉄剣もかくやという切れ味であった。不憫すぎる。

「幼なじみ……？」

「あー、えっとだな。篠が引っ越していくのが小四の終わりだつただろ？鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中一の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

説明して、篠と鈴に面識がないことに気づいたようだ。  
一夏が鈴に篠を紹介する。

「一夏ちが篠。ほら、前に話したろ？小学校からの幼なじみで、俺の通つてた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ……初めてまして。これからよろしくね

「ああ。一夏ちが篠」

そう挨拶を交わしながら、火花を散らす幼なじみたち。  
ちなみに篠は鈴の目を真っ直ぐに睨んでいるが、鈴はちらりと篠の胸を見て表情が険しくなった。

「ンンン！ わたくしの存在を忘れてもらつてはしまりますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……誰？」

「なつ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリ亞・オルコットでしてよ！？ まさか『存知ないの？』

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なつ！？」

怒りのあまり顔を赤くし、言葉に詰まるセシリ亞。  
この娘は本当に見ていて飽きないな。

「い、い、言つておきやすけど、わたくしあなたのよつな方には負けませんわ！」

「や。でも戦つたらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

そのまま言つて、鈴は口を見てきた。

「当然、アンタにもね、シン。生身じゃ相手にならないけど、HSならあたしの方が強いんだから」

「……」

ふむ、それは楽しみだ。鈴のことだ、口先だけではないだろう。しかしその言葉に、またしてもセシリアが食つてかかった。

「お待ちなさいー。真改さんに挑むのなら、まずはこのわたくし、セシリア・オルコットに勝つてからにしなさいー。」

「だからあたしが勝つって言つてるじやん……ていうかアンタ、なんでそんなに反応するの?」

「えつ！？ いえ、それは、その……」

『リヒョウ』と口を濁し、先ほどとは違つ理由で赤くなる。  
……やめてくれ、周囲の視線が痛い。

「まあ、シンは昔から女子に入氣あつたもんねえ……」

「ヤニヤ笑いを浮かべながら言つ鈴。

……本当にやめてくれ、一緒に食事に来たクラスメイトだけでなく、周囲の席に座る連中まで聞き耳を立て始めたぞ。

「ねえねえ、その話、もつと詳しくー。」

「中学生のときの井上さんってどんな感じだったの？」

「なんか面白「ヒ」ソードとかない?」

「そうね、色々あるわよ。例えば.....」

「.....」

ベキイツ！

むへ・じうしたことだ、己の箸が勝手に折れたぞ。  
じつした、鈴? そんなに怯えたような顔をして。

「ど、とこりで一夏! アンタ、クラス代表なんだって?」

「お、おひ。色々都合もいいしな」

何故か鈴が突然話題を変えた。

聞き耳を立てていた女子たちも食事に専念している。  
己も備え付けの割り箸を取つて食事を再開した。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど?」

一夏をちらちらと見ながら、しかし顔は横に向けながらの言葉。この娘も相当に分かり易いが、それが報われたことはない。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」「あなたは一組でしょ? 一? 敵の施しは受けませんわ」

うむ、この鯖の塩焼き、美味しいな。塩加減、焼き加減、どちらも申し分ない。

「あたしは一夏に言つてんの。関係ない人は引っ込んでよ」「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているのだ」

ほう、味噌汁もなかなかだな。料理の心得がない僕でも、並のものとは違うとわかる。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことを」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「そ、それを言つなら私の方が早いぞ！それに、一夏は」

む、この浅漬け、市販のものではないな。こんなところにまでこだわるとは、流石HS学園、侮れんな

そして放課後。

第三アリーナに僕たちは集まっている。  
最近の日課である一夏の訓練だ。

「筈、やつと申請が通つたのか。」

「ああ。今日は私も訓練に参加するぞ」

「くつ……このままではわたくしのアドバンテージが……」

「……」

以前から出し続けていたHSの使用申請が漸く通り、筈に打鉄が貸し出された。

HS学園には訓練用に大量のHSが配備されているが、生徒の数を考えれば全く足りていない。

故に申請が通るまで時間がかかるのだ。

「では一夏、はじめるといよ。刀を抜け」

「お、おつ

前置き無しに、幕が戦闘態勢に入る。

漸く一夏と訓練出来るところことで張り切っているのだろう。

だが。

「では 参るつ！」

「お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットでしてよ！？」

予想通りの展開。だから一夏を交えての訓練はしたくなかったのだ。己の時間まで削られる。

「ええい、邪魔な！ならば斬る！」

「訓練機ごとに遅れを取るほど、優しくはなくってよ！」

そうして始まる女の戦い。

放置される「」と一夏。

……何をしに来たんだ、お前たちは。

「はああああつ！」

「甘いですわー！」

二人の戦いは白熱しており、しばらくは終わりそうもない。  
かといって「」が一夏と訓練を始めれば事態はさらに混迷を極める」とだらう。

……腹が立つて来た。

「やあ、踊りなさい！」

「まだまだあー！」

“ପାତାପାତାପାତାପାତାପାତା” ୧୦

「わやあああああつー?」

「わあわあわあわあ！」

記動した正影の流口が、のせ出でて散策の風。

このままでは埒が開かないといふ判断に基いての行動である。

い、いきなり何をする！？

「 」

ヨリイイイイイイイ

「『おんなじ』」

卷之三

月影の砲身を回転させると途端に謝る一人。

一夏もなにやか書い顔をしてしる  
……この円影、よほど怖いよつだ。

「時間の無駄」

アリーナを使える時間は長くない。無駄には出来ないので。

「……一対一……」

そう言ってセシリ亞の横に並ぶ。

己とセシリ亞対一夏と簞。

実力に多少の偏りがあるが、この組み合せが一番揉めないだろ？

「そ、そうですわね。せっかく四人いるんですもの、チーム戦の訓練をするのも悪くありませんわ」

「う、うむ。一夏はまだまだ未熟だからな、私がしっかりとワードしてやる！」

「お、おお。よろしく頼むぜ」

「……はあ……」

「た、たはあつたが、どうにか訓練を始められそうだ。  
……これからも同じようなことが続くのだろうか。

一夏と簞は、流石にまだ己とセシリ亞を相手に出来るほどではなかったようで、數十分防戦で粘った末、撃沈した。

個人の実力差もあつたが、連携が上手く出来ていなかつたことが大きいだろ？

対して己とセシリ亞は白兵戦と射撃戦にそれぞれ特化した機体であり、セシリ亞の得意とする戦闘距離が己のかつての相棒に近いこと

もあつて、なかなかの連携が取れていた。

「ふふ、わたくしと真改さんは、なかなか相性がいいようですね」

「……」

ピットに戻り、帰り仕度をしている時にセシリアが嬉しそうに話しかけてくる。

「わたくしの射撃と真改さんの剣技が合わされば怖いものなしですわ」

しかしセシリアには悪いが、その言葉には頷けない。  
世の中には、数の差や相性の良し悪しをものともしない、人の域を超える力を持つ者が、確かに存在しているのだ。

「……実戦は……」

だから、言つておく必要がある。

イギリス代表候補生であるセシリアは、いざれは戦場に駆り出される可能性があるのでだから。

「……そこまで、甘くない……」

「……真改さん……」

今は包帯で隠されている、己の左腕に視線を向ける。  
セシリアは己の左腕を見ているので、己の包帯の下がどうなっているのかは知つている筈だ。

「貴女は、本当の戦いを知つていてるのですね……」

「……」

彼女の言つ戦いと「」の知る戦いは別物だつたが、命を懸けたもので  
あることに違いはない。

現に「」は左腕を失い、瀕死の重傷を負つたのだから。

「一夏さんも言つていましたが、わたくしも、真改さんを守ります。  
貴女が戦う時は、わたくしも貴女の隣で戦います」

「……」

「ですから、わたくしを頼つてください。」のセシリ亞・オルコッ  
ト、あつと真改さんの左腕役を務めてみせますわ」

「……」

つぐづぐ、「」は才能には恵まれないが、人には恵まれるらしい。

ならばこの少女が、かつての「」の仲間たちのよつて、戦場に散るこ  
とがないように。

「」も、もつと強くならねばなるまい。

夜。

自室のベランダで本音と共に花の世話をしていると、扉を蹴破るよ  
うな勢いで鈴が部屋に入つて來た。

「……？」

「お～、りんりん～？」

本音がつけた妙な渾名は置いておくとして、部屋に入ってきた鈴を見る。

その眼から流れる、涙を。

... רַבָּתִים, וְרַבָּתִים, וְרַבָּתִים, וְרַבָּתִים,

歯を食いしばつて必死にこらえているようだが、涙が止まる様子はない。

「シノハリ」.....一

1

手にしたボストンバックを握り締め、絞り出すよつに「」の名を呼ぶ  
幼なじみ。

その姿に、常の快活さはない。

卷之三

とにかく話を聞こう。土に汚れた手を拭き、鈴に近付く。

「い、い、いちか  
……」

- 1 -

泣きじやぐる鈴の前で立ち止まる。

「いちか、おぼえてなかつた……」

〔 〕

頭に手を置いて、出来るだけ優しく、撫でた。

「やくやく……おぼえて、なかつたよ……」  
「……」

約束とやらがどんなものかは知らないが、とても大事な約束だったのだろう。

鈴は己に抱き付いて来て、そのまま泣き続けた。

「なるほど〜、それはおりむーが悪いね〜」

「でしょおー〜まつたく、信じらんない！女の子との約束忘れるなんて！」

「……」

十分ほどして泣き止んだ鈴は己に一夏への不満をぶちまけ始めたので、聞き役を本音に押し付けて撤退した。

今は花の手入れに戻っている。

「ひどいよね〜。女の子が勇気出して、プロポーズしたのに〜」「ふふううーーーっ！！？」

本音の直球に鈴が吹き出した。

話を要約するところだ。

鈴は一夏に、「あたしが料理が上手になつたら、毎日酢豚を作つてあげる」と言つた。

しかし一夏が覚えていたのは、「鈴が料理が上手になつたら、毎日酢豚をおいしくくれる」というものだった。

……確かにプロポーズの言葉だな。そして一夏、後でシメる。

「そ、そ、そんなんじゃないわよー。」

「ええー、違うのー?」

「えー?いや、その、えっと……」

言葉を濁す鈴を、本音は楽しげに見ている。

その様子に気付いた鈴が咳払いをひとつ、話題の変更を図つてきた。

「シン、相変わらず花育てるのね」

「……」

「やつぱりいのっち、前からやつてたんだー」

「……いのっち?」

話しながら、一人が己の近くまで歩いて来て、鉢植えの前にしゃがみこんだ。

「綺麗に咲いてるわねー。やつぱり育て方がいいのかな?」

「うんうん~、いのっち、お花の世話、一生懸命だからね~」

「……」

「ううでもいいが、少し離れる。手元が見づらい。」

「アンタ、ほんとに花が好きなのね」

「……」

好きなのかどうか、己にもわからない。  
だが花に対する思いが、どこからくるものかはわかっている。

己には、所謂前世の記憶というものがある。

それが本物なのか、それともただの妄想なのかはわからないしどうでもいいが、その記憶の中にある世界は死にかけていた。

大地は枯れ果て、海は腐り、空すらも汚染され。人々は穢れの届かない、遙か上空に浮かぶ振り籠の中で、いざれ訪れる滅びから田を背けて生きていた。

そんな世界では、当然、植物などろくに育たない。

僅かに生きている土で作られるのはほとんど全てが食用の作物であり、それすらも十分な量とはとても言えない状態だった。  
そんな世界で、果たして花など見かけることがあるだろうか？

答えは、否だ。

だから、心が震えた。

緑溢れる世界、色とりどりの花々が、あまりにも美しかったから。

だから、その花を、自分でも育ててみたいと思つたのだ。

「正直アンタのイメージには合わないと思つけど、あたしは好きよ、シンの育てた花。どれも綺麗だし、一生懸命咲いてる感じがするし」「お～、りんりんわかつてるね～」

「……」

そう言つても「うえると有り難い。剣以外のことなど、まるで経験が

なかつたからな。

「……ありがと、シン。それと本音も。……ちょっと、すりきりした」

「……」

「泣きたくなつたら、またおいで。いのちちはいつでも貸し出すよ~」

「あはは、ありがと。……それじゃ、あたし部屋に戻るね。また明日、シン、本音」

そう言つて立ち上がつた鈴は、いつも鈴に戻つていた。そのうち機会を見つけて、一夏を叩きのめすことだらう。

「……鈴……」

「?なに?シン」

「……また会えて、嬉しい……」

鈴はキヨトソとして、次いでニカツと笑つて言つた。

「あたしも嬉しいわよ シン」

## 第1-2話 鈴音（後書き）

鈴は真改が左腕をなくした経緯をある程度知っています。また真改は数少ない一夏に惚れてない女友達なので、二人の関係は良好です。

そして次回あたり、アレの出番が……！？

## 第1-3話 月光（前書き）

一夏 v s 鈴。

そして 一夏 & 鈴 v s ゴーレムたん。

強敵との一連戦を一夏はどう切り抜けるのか?  
楽しんでいただければ嬉しいです。

## 第13話 月光

鈴が己の部屋を訪れた翌日、生徒玄関前廊下に「クラス対抗戦日程表」が張り出された。

一夏の一回戦の相手は一組

つまり、鈴である。

「なんか、波乱の予感がするな……」

「……」

頬に赤い手形をつけた（昨日鈴に叩かれたのだ）一夏が不安そ  
うに叫び声。

「昨日怒らせちまつたしなあ……」

「……」

鈴を怒らせたことはわかっているようだが、しかし怒らせた理由には思い至らない。それが織斑一夏といつ男なのだ。

「あ、鈴だ」

噂をすれば影。

一夏がぼやきながら廊下を歩いていると、曲がり角の先から鈴が現  
れた。

「お、おはよー、鈴」

「……」

一夏の挨拶を完全に無視して通り過ぎる鈴。  
「どうやらかなり立腹の様子だ。」

「……はあ、わっかんねえな。何をあんなに怒つてるんだよ……」「……」

鈴が怒つている理由など一夏が鈴との約束を覚えていないから以外になく、鈴の怒りを鎮めるには約束の内容を正確に思い出すのが最も確実だ。

だがその解決は最も有利得ないだろう。

「直接聞いたほうが早いか?」

「……馬鹿が……」

「なにい！？シンまでそんなことを言つのかー…」

他に向を言えと言つのだ。

「決めた。鈴が理由を教えてくれるまで、謝らない」

「……」

一体どのような思考回路をもつてすればそんな解答を導き出せるのか、是非ともご教示願いたいものだ。

「だつてそうだろ。理由もわからずに頭を下げられるか」

一夏の美德のひとつ、世の男たちから失われて久しい「男の意地」が、今回は悪い方に働いたようだ。

「とにかく、俺は謝らない。鈴が理由を言つまではな

「……」

そして一夏は、結構頑固なところがあるのでした。

それから数週間が過ぎ。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

篝の言う通り、放課後にアリーナが使えるのは今日で最後だ。なので今日は、今までに練習したことの復習が主な内容となるだろう。

「HS操縦もようやく様になってきたな。今度こそ  
「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。このくらいはできて当然、できない方が不自然というものですわ」  
「ふん。中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか」

この二人がいてまともに訓練になればの話だが。  
相変わらず視線で火花を散らしながら言い合つ二人は、今までの訓練時間の内、四分の一を潰して來た。  
いい加減にして欲しい。

言い合いを続ける二人を放つておいて、第三アリーナのエピックトに向かう。

嚴重なセキュリティに守られた扉を開け、中に入ると、そこには

「待つてたわよ、一夏！」

鈴がいた。

昨日までの不機嫌振りはどこへやら、不敵な笑みを浮かべながら腕組みなどしている。

「貴様、どうやつてここに」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよー。」

「はんっ。あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なし」

意味不明な理論を展開する鈴を、篠とセシリアが睨み付ける。

「ほほう、どうこう関係か、じっくり聞きたいものだな……」

「盗つ人猛々しいとこまさにこのことですわね！」

しかし鈴はそんな二人を全く相手にせず、一夏に話し掛けている。

「それで、一夏。反省した？」

「なにがだよ」

「だ、か、らつ！ あたしを怒らせて申し訳なかつたなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしちつがー！」

「ないぞ」

一夏も不機嫌な顔で言い放つ。

鈴の表情が変わった。

「謝りなさいよー。」

「だから、なんでだよー。」

「なんでー？ そんなこともわかんないのー？」

「わかんねえから聞いてるんだろうが！ 理由もわからず謝れるか！」

次第に興奮していく二人。

「あつたまきた。どつあつても謝らないっていう訳ねー!?」

だから、説明してくれりや謝るハツの！」

「せ、説明したくないからこりまして来てるんでしちゃうが！」

話は平行線だ。このままでは埒が開かない。

「じゃあこいつしましょーつー来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言つことを聞かせられるってことでいいわね！」

「おう、いいぜ。俺が勝つたら説明してもらうからな！」

売り言葉に買い言葉。しかしそこで、鈴が急に赤くなる。

「せ、説明は、その……」

「アーリー」などと言葉を濁す鈴。それを好機といったのか、一夏が言ひ。

「なんだ? やめるならやめてもいいぞ?」「

た。誰かやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきな

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！唐変木！鈍感！織斑一夏！」

最後のは悪口なのか？

「うるせー、貧乳」

馬鹿が、それは禁句だ。

ドガアーンッ！－！

相当に頑丈な筈の部屋が揺れる。  
右腕の指先から肩までを工具化した鈴が壁を殴つたことによる  
衝撃だ。

否。鈴の拳は、壁には全く届いていない。

ならば、この衝撃は  
？

「い、言つたわね……。言つてはならないことを言つたわね！」

鈴は自分の、同年代の少女たちと比べて幼い体つきをとても気にしている。

中でも胸は特に気にしている。

鈴の胸を馬鹿にした者は、例外なく悲惨な目に遭つているのだ。

「覚悟しどきなさい。手加減なんか絶対してやらないから。  
全力で、叩きのめしてあげる」

殺氣じみた気配を撒き散らしながら去つていく。

流石に一夏も後悔を滲ませた顔で鈴を見送つたが、己は冷静に壁の破壊痕を分析していた。

特殊合金製の壁に、直径三十センチものクレーターを作り出す威力。

「近接格闘型。それも、相当なパワーですわね……」

「どうやらセシリアも同じ結論に達したようだ。

鈴の腕がどれほどのものかはわからないが、少なくとも、近付けば勝機はあるなどと楽観的なことは言えないだろう。

これは、厳しい戦いになるな。

試合当日。

場所は第一アリーナ。客席は超満員で、通路まで立ち見の生徒に埋め尽くされ、会場入りできなかつた生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

まあ今の俺には、そんなことを気にしている余裕はないが。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに従い、俺と鈴は空中で向かい合つ。

距離は五メートル。ISにとつてはあつてないような距離だ。

「泣いて謝るなら、痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

開放回線で鈴が話しかけてくる。

その鈴が装着しているISは甲龍<sup>ションロング</sup>。肩の横に浮いた非固定浮遊部位<sup>アンロック・ユニット</sup>が特徴的な、中国製第三世代型ISである。

オープン・チャネル

「そんなのいらねえよ。全力で来い」

「そうだ、勝負は全力でやらなきゃ意味がない。  
どちらか片方だけでも手を抜けば、どちらが勝つても、その勝者は

「勝利を誇る」ことができないのだから。

「一応言つておくけど、I-Sの絶対防衛も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通されせりれる」

それはつまり、「殺さない程度にいたぶることは可能である」ということだ。

そして鈴は、それができるだけの実力があるのだろう。

だが。

「それがどうした。俺が怪我するのを怖がると思つてんのか」

雪片式型を開けし、その切つ先を鈴に向ける。  
これから始まるのは戦いだ。

ならまでは、宣戦布告をしないとな。

「戦場で、敵同士が、甲冑着込んで武器持つて向かい合つてゐるんだ。  
なら、やる」とはひとつだけだつたが

手加減無用、情け無用、問答無用。

それだけが、「戦の礼儀」だ。

「もう一度言づば 全力で來い。俺も、全力で行く  
「 上等。もう謝つたつて、絶対に許さないから ！」

『それでは両者、試合を開始してください』

そして、開戦の狼煙が上がる。

ガギィンッ！

雪片式型と、鈴が持つ異形の青竜刀がぶつかり合つ。  
明らかに質量で負けているその巨大な刃を相手に、白式も雪片式型  
も一歩も退かない。

(頼もしいぜ、相棒！)

「へえ、甲龍のパワーを正面から受けきるなんて、やるじやない  
「はつ！機体は互角つて訳だ、なら負けたら操縦者のせいだよな  
！？」

闘争心に火がつき、心が高ぶる。  
一合でわかつた。鈴は強い。

少なくとも接近戦は互角以上、そしてまだ隠し玉がありそうだ。

「なら、これでどうー？」

柄の両端に巨大な刃が付いた青竜刀を、バトンのように振り回す。

ただでさえ重い得物に遠心力が加わり、手数も増えた。縦横斜めから襲つてくる刃を一度でも捌き損ねれば、俺の負けが決まるだろう。

「器用なことしゃがつて……！」

尚も回転を上げ続ける青竜刀を受けながら、勝機を探る。

一眼一足三胆四力。

全てを見切る眼こそがもつとも大事だと、昔の人も言つている。

（見極める………）

完璧なものなど存在しない。鈴の連撃にも、どこかに付け入る隙があるはずだ。

厄介なのはあの回転。あれを崩さなきや、最後の一歩が踏み込めない。

（力ずくじゃダメだ）

重さに加え、今や速度でもこちらを上回つている。

今真つ正面からぶつかつたところで、弾かれるだけだ。

なら。

（押して、ダメなら………）

「引いてみる、てなあ！」

「うわっ！」

遠心力がのつた袈裟切りに合わせ、逆袈裟を放つ。  
狙いは青竜刀の背の部分。

打ち落とし。

崩せないなら、自分で崩れてもう。  
ただでさえ大きな力が加わり続けているところに新たな力が加わったことで、鈴が前につんのめるようによろめいた。

「取った　！」

逆袈裟からの切り上げ。雪片式型の刃が鈴に迫り

鈴が、笑っていることに気が付いた。

見れば、鈴の肩アーマーが開き、中心の球体が光っている。

まずい。

何かはわからないが、これはまずい。

慌てて回避しようとするが、しかし間に合わず、見えない拳に殴り飛ばされた。

「ぐあっ！」

シールドバリアーを貫くほどの衝撃。

弾き飛ばされ、せつかく詰めた距離が開く。

「ほら、もう一発行くわよ！」

「くっ…」

再び肩の球体から「何か」が放たれるが、何も見えない。  
勘だけでなんとか避ける。

解析。武装の正体は「衝撃砲」。空間に圧力をかけ砲身を形成、余剰で生じる圧力それ自体を砲弾として撃ち出す、第三世代型兵器

「よくかわしたわね。〔龍砲〕は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」「

これは厄介だ。砲弾が見えないのはまだいい。だが砲身が見えなければ、鈴がどこを狙っているのか、いつ撃つてくるのかがわからない。

「さあ、いつまでかわせるかしらね?」「ちいっ!…

再び放たれる衝撃砲を避ける。  
勿論見えているわけではなく、言わば当てずっぽうの回避行動。  
当然避けきれはせず、数発の直撃を受ける。

「ぐひっ……!」

避けにくさもそうだが、威力も相当なものだ。

このまま直撃を受け続ければ、数分と保たず敗北する。

(どうする? 砲弾は見えない、砲身も見えない、ならどうやってかわす?)

ランダムな三次元機動を繰り返す。攻撃をかわすのではなく、狙いを付けさせないための機動。

効果はあり、直撃を受けることはなくなつたが、消耗がかなり激しい。

「のままでは次第に動きが鈍くなり、いずれは捉えられる。

( 集中しろ。砲弾が見えないのなら、砲身が見えないのなら、それ以外を全部視る )

鈴は衝撃砲を撃ち続けている。あれだけの性能を持つていながら、燃費まで優れているらしく、エネルギー切れになる様子はない。

( 鈴の目線は？甲龍の姿勢は？球体の光は？周りの空間は？見切るんだ。一つ残らず、一つも余さず、見極める )

慣れてきたのか、無駄な動きをしなくても被弾しなくなってきた。だがまだ足りない。

このままではまだ近付けない。  
もっと正確に、的確に見極めないと。

( タイミングだ。狙いは大分見えるようになつて来た。あとはいつ撃つて来るかだ )

鈴の余裕は崩れない。俺があと一步を踏み込めないことに気が付いているのだろう。

近接武器しか持たない俺が近付けないとこいつとは、つまりは絶対に勝てないとこいつだ。

( 見ろ、見ろ、見ろ。目を逸らすな顔を背けるな、まだなにか、在るはずだ )

何十度目かの砲撃。

肩の球体が光り、鈴の眼が俺を捉える。

あの光は衝撃砲のチャージ状況の現れで、発射タイミングと直接関

係はない。

鈴の意志で好きな威力で撃ち出せるし、チャージ速度も調整できる。

( 意志? )

そうか。

こんなに簡単な答えだつたのか。

砲弾が見えないのなら。

砲身が見えないのなら。

俺も、見えないものを見ればいい。

「 視えた」  
「 な 」

ただ半身になるだけで、衝撃砲をかわす。

無駄な動きが一切ない、理想的な回避。

鈴が攻撃の瞬間に放つた気配 「殺氣」を感じとつたからでき  
た反応。

( 実戦以上の訓練はない、てか。確かにこの感覚は、練習じゃ味わ  
えないな)

状況は依然俺の不利。なにせたつた一発避けただけだ。  
だがそれだけで、俺に不敵な笑みを浮かべせるには十分だった。  
それを見た鈴の表情が変わる。

「ふん! まぐれで一回かわしたくらいで、いい気にならないでよね  
! 」

「ああ、今のはただのまぐれさ。けどな、どれだけ馴染んだ技も、

最初の成功はまぐれなものだろ？」「

今はまぐれでも、その内やうじやなくなる。  
それがわかっているのか、鈴の顔に焦りが浮かんだ。

「感謝するぜ、鈴。お前のおかげで、一步、目標に近付けた」「

「このあたしを踏み台呼ばわり？上等じゃない。今のセリフ、

すぐに後悔させてあげる！」

「やってみりよ。俺も、とつておきを見せてやるぜー！」

ここ数日練習していた技能、瞬時加速。

ISが持つ、慣性を無効化する機能、P.I.Cを最大限に使って、一瞬で最大速度に到達することは、使い方次第で代表候補生とも戦える技だ。

事実千冬姉は、この瞬時加速と零落白夜を極めて世界一の座についていた。

(仕掛けるなら、今しかない！)

瞬時加速の発動タイミングを図る俺に、鈴が衝撃砲を向ける。

意識を集中、もう一度見切つてかわし、瞬時加速で接近、今度こそ反撃する。

鈴の衝撃砲が不可視の砲弾を放ち、俺が雪片式型を振り上げつつ回避しようとした、その瞬間。

眼を焼くほどの閃光が、俺たちの戦いに割って入った。

ズドオオオオンッ！－！－

「な、なんだ！？」

突然の出来事に混乱する。

そんな俺に、鈴からプライベート・チャネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よー。氣をつけなさい、アンタ、狙われてるー。』

ステージ中央に熱源。所属不明のTTSと断定。ロックされています。

白式からの警告。どうやら鈴の言葉は事実らしい。

「マジかよ……！」

TTS学園に殴り込みをかけてくるなんて、度胸がある奴だらじやない。

しかもコイツは、アリーナを覆つ遮断シールドをぶち抜いてきやがった！

『とんでもないわね。一体どんな威力よ』

「目的はなんだ！？なんでこんな」

「そんなもん、あたしが知るわけないでしょ！」「

プライベート・チャネルの開き方がわからず、オープン・チャネルで聞く俺に鈴が怒鳴り返す。

状況は全くの不明だが、ひとつだけわかることがある。

このままじゃ、観客席のみんなが危ない！

「みんな逃げるー。遮断シールドじゃ、コイツの攻撃は防げないぞー！」

相手の正体も目的もわからないが、いきなり乱入してくるよつなヤツだ。友好的な相手とは考えにくい。

俺の声を聞いて、観客のみんなが避難を始める。

「一夏、学園の先生たちが来るまであたしが時間を稼ぐわ。アンタは逃げなさい」

逃げる？ 今逃げろって言つたか？ 選りに選つて、この俺に？

「ふざける。大事な幼なじみを置いて逃げられるか。そんなことしたら、たとえ命が助かつても、俺の魂はそこで死ぬ。逃げるくらいなら、腹切つたほつが万倍マシだ」

「アンタなら、そう言つと思つてたわよ」

「ヤリとお互いに不敵な笑みを浮かべる。

万全とはとても言えないが、戦意は微塵も衰えていない。

「一来るぞ！」

最初の攻撃で巻き上げられた煙の中から、熱線が放たれる。左右に散開して回避。

「ゲーム兵器かよ……。しかも威力が半端じゃない」

「直撃したら、絶対防御があつてもタダじゃ済まないわね。最悪

」

死ぬ。

「なら尚更、逃げる訳には行かねえな」

死ぬのは怖い。それは人間として当然の感情であり、恥ずべき」とは何もない。

だが大事な幼なじみに死なれるのはもつと怖いと思つところが、感情の難しいところだ。

「また来た！」

煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる。それをどうにかかわすと、その射手たるIISがふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ……」

姿からして異形だった。

つま先よりも下まで伸びている、異常に長く、ビーム砲口が左右二門ずつある腕。

首のない、肩と一体化したような、センサーレンズが不規則に並んだ頭。

そして全身を隙間なく覆う、灰色の装甲。

「お前、何者だよ」

「…………」

返事はない。こちらの問い掛けに応えるつもりはないらしい。

『織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！－すぐIISに先生たちが工事で制圧に行きます！』

山田先生からのプライベート・チャネル。

いつもと違つて先生らしい威厳のある声だが、その言葉には頷けな

い。

「それまで俺たちで食い止めます。」こいつを放つておいたら、観客席に被害がでるかもしない」

『織斑くん！？だ、ダメですよー生徒さんにもしものことがあったら』

『』

言葉はそこまでしか聞けなかつた。

正体不明のHISが、体を傾けて突進して来たからだ。

「おつとー！」

避け様に雪片式型を振る。

しかしその完璧なタイミングの筈だったカウンターを、敵はスラスターを噴かして避けた。

「なんだよ今の動き！？」  
「スラスターの出力までとんでもないわね……」

攻撃力、機動力、どちらも尋常じやない。  
あの全身装甲フル・スキンだ、おそらく防御力も相当なものだろう。

それでも、負ける訳にはいかない。

「援護するわ！突っ込みなさい、一夏！」  
「了解だ！俺に当てんじやねえぞ、鈴！」  
「はん 誰に口聞いてんのよー！」

霸気に満ちた鈴の言葉。

恐ろしい強敵も、味方になれば頼もしい。

俺は万の援軍を得たよつな気持ちで、突撃を仕掛けた。

「へつ……」

斬撃が空を切る。

必殺の間合いから放たれた一撃は、しかし敵に届かない。

「離れて！」

鈴の警笛に反応し、即座に離脱。

その瞬間、敵がコマのよつに回転しながら、ビーム砲撃をしてくる。その熱線が、俺を捉えようとしていた。

「やせないわよー！」

鈴が衝撃砲を放つ。

敵は回転を止め、その長い腕で衝撃を叩き落とした。

「助かつたぜ」

「貸しこじとくわ。……それより、どうするの？これじゃ埒が開かないわよ」

「ああ、しかも観客席のみんなが避難できてない。先生たちも、もうとつぐに来てたつていはずだ」

「……扉がロックされてる？これもアイツの仕業ってわけ？」

「さあな。だけどそうだとしたら、俺たちだけでやらなきゃならぬい。……鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「一八〇つでとこね。一夏は？」

「六〇切ったよ」

文句を言つわけじゃないが、さつきまでの鈴との試合が響いている。零落白夜を使えるのは、よくてあと一回だらつ。

だが。

「ふうん。そんだけあれば」「

「十分だ」

零落白夜の威力は絶大だ。一撃あればこと足りる。だからあとは、当てるだけだ。

「しかしアーツの動き、なんか違和感がある。まるで人間じゃないみたいだ」

「どういうことよ？」「

突然の俺の呟きに、鈴が訝しげに質問で返す。

「攻撃しても、対応が毎回同じだ。それに死角からの攻撃にもかなり正確に反応してくる。あれじやまるで

機械みたいだ。

「確かに、言われてみればそうね。けどそんなこと有り得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かないんだから」

それは俺も教科書で読んだ。だが千冬姉はこうも言っていた。

IISは未完成の兵器だ、と。

「つまり、どこかの誰かが極秘裏にIISの無人機の開発に成功しても、不思議じやないってこと?」

「まあ、そういうことだな」

「けどそれがなんだつていうのよ。仮にあれが無人機だとしたらどうなるのよ」

「決まってるだろ。やり過ぎる心配はない、ってことや」

零落白夜は相手のバリアーを無効化し、強制的に絶対防御を発動させるものだ。

その威力は全IIS中トップクラスで、操縦者にまで致命傷を与えるかもしれないほどである。

しかし相手が無人機なら、遠慮する必要は全くない。

「ならあとはどう当てるかね。一夏、なにか考えはある?」

「あるぜ。俺が合図したら、アイツに向かつて衝撃砲を撃つてくれ。最大威力で」

「?いいけど、当たらないわよ?」

「いいんだよ、当たらなくとも」

だから言つたろ 考えがあるつて。

「じゃあ、早速」

「一夏あつ!」

突然の大声。

アリーナのスピーカーから響いた、ハウリングが尾を引くほどのそ

の声は、簫のものだつた。

「な、なにしてるんだ、お前……」

中継室を見る。

おそれらく篠がやつたんだろう、審判とナレーターがのびていて、篠はあはあと肩で息をしている。  
怒っているような、焦っているような、そんな不思議な表情で、もう一度、叫ぶよっこ声をあげた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

それは、筈なりの、筈に出来る、精一杯の応援だった。

セシリ亞と戦うシンに、俺が送ったようだ。

「！一夏つ！」

鈴の声で視線を戻す。

敵ISが、今の館内放送の発信者である筈に興味を持つたようで、じつと簾を見ている。

「逃げ

ダメだ、間に合わない。

敵ISはすでに腕のビーム砲口を籌に向けていた。

あれを生身で受ければ、一瞬で蒸発するのは目に見えている。

喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。

しかし当然、そんなものに意味はない。

熱線が放たれる。

それが、ひどくゅっくじに見えた。

ふざけるな。

守るつて、誓つたのに。

俺は、また

「箒いいいいつ！――！」

箒は茫然と、自分に迫る「死」を見ている。  
逃げても間に合わない。

たとえ今この瞬間に敵を倒したといひで、それはもう意味がない。

そして禍々しい閃光が、為す術なく立ち尽くす箒を飲み込む  
その、直前に。

箒を守るように。

三年前、攫われた俺を、助けたよ。こ

銀色の装甲と、紫色の極光が、箒の前に立ちふさがった。

筈がない。

ピットからリアルタイムモニターで、敵と戦う一夏と鈴を見ていた己がそれに気付いたのは、正体不明のIRSが一人の試合に乱入し、戦闘を始めてから数分が経つてからだった。

(……どこへ……?)

なにか、ひどく嫌な予感がする。

鈴と戦う一夏の姿を不安げに見ていた筈が、試合ではなく、本物の戦いに巻き込まれた一夏に何を思ったのか。

決まっている。自分にも何か出来ないかと、そう思つたに違いない。

「……」

駆け出す。

筈のことだ、居ても立つてもいられず、きっと無茶なことをするだらう。

そしてその行動は、最悪の事態を招く恐れがある。

あのIRSは、恐らく無人機だ。

ただプログラムに従つて動くだけの特徴的な行動パターンは、昔良く見たものに酷似していた。

そしてあのI-Sには、高度なAIが搭載されている可能性が高い。ただ戦うだけでなく、一夏と鈴の遣り取りを興味深い様子で見ていたことから、それが伺える。

だがAIは所詮AIだ。人間とは考え方が違う。プログラム外の事態に対しどういった行動に出るか、分かったものではない。

「一夏あつ！」

篝の声。

アリーナ全体に響きわたるそれは

(……中継室か……！)

全力で、駆ける。

最悪の想像はいよいよ口の思考を埋め尽くしていた。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする…」

叫ぶようなその声は、篝から一夏への声援だ。

彼女らしい、叱責のような言葉だが、その声に込められた想いは一夏の身を案じるものだ。

中継室に飛び込んだ己の目に映ったのは、肩で息をする篝の姿と、今までに篝に向か熱線を放たんとする、異形のI-Sの砲口だった。

首から提げられた指輪を掴む。

この瞬間、己の心を満たしていたのは、幼なじみの命を害そつとする敵への怒り では、なかつた。

己の意志に応じ、己の専用機、朧月が展開される。

大切な幼なじみを、目の前で失つてしまふかも知れないといつ恐怖でも、なかつた。

右腕を振り上げ、そこに取り付けられた月光を起動。

不謹慎なことに。この瞬間、己の心を満たしていたのは 欽喜  
だつた。

拡張領域<sup>バスクロット</sup>の八割を食い潰しているふたつの装置、膨大なエネルギーを貯め込むコンデンサー、神無月と、そのエネルギーを一気に送り込む供給ライン、神在月が、月光にありつたけのエネルギーを叩き込む。

ただ奪い、壊し、殺すことしかしてこなかつた、この己が。

溢れ出る、紫色の光の粒子。それが一瞬で、一メートルを超

える極光の剣となる。

夥しい量の血に濡れ、悍ましいほどの業に塗れた、この腕で。

幕の前に躍り出る。眼前に迫った「死」を切り払うべく、月光を振り下ろした。

誰かを守れるなどと。

願つたことすら、なかつたのだから。

「オオオオオオオオアアアアアアアツ！……」

朧月を装着したシンが、普段の彼女からは想像も付かないような咆哮をあげて、熱線と真っ向からぶつかり合う。

あの紫色の光の剣はおそらく、朧月の初期装備、月光だろう。<sup>ブリセット</sup>

あれだけの熱量を持つビームを切り裂くその威力は凄まじく、俺の零落白夜と比べても遜色ない。

だが数秒も続いた砲撃は、朧月に大きなダメージを与えた。ビームが止むと同時にＩＳが解除され、力尽きたように、シンが崩れ落ちる。

「　　ぶつ壊す　」

殺意を剥き出しにした俺の声に、鈴の絶対零度の声が重なる。もはや言葉を交わすまでもなく、一人の思いは一つになった。

「鈴、やれ！」

衝撃砲を構える鈴の前に躍り出る。

俺の意図を一瞬で読み取った鈴が、獰猛な笑みを浮かべて吼えた。

「あたしの分まで、痛めつけてきなさい！  
「言われるまでもねえ！」

背中に巨大なエネルギーの塊　　最大威力の衝撃砲の砲弾を受け  
る。

そのエネルギーを内部に取り込み、圧縮。

そうして得たエネルギーを放出し、一気に加速。

瞬時加速。

よくも箒を狙いやがったな。  
よくもシンを傷つけやがったな。

お前が無人機であることを心から願うぜ。  
でないと、本当にやり過ぎちまいそうだ  
！

敵ＩＳが眼前に迫る。

零落白夜を発動、眩い光を放つ剣を、渾身の力を込めて振り抜いた。

「 オオオッ！」

正中線を狙つた一撃は、反応した敵ISが振り上げた右腕を切り落とした。

即座に刃を翻し一撃目を叩き込もうとしたが、敵のほうが一瞬速い。左拳に殴られ、さらに接触面から熱源反応。零距离からのビーム砲撃。

零落白夜を使ったことで、白式のシールドエネルギーはほととぎ空だ。

これを受ければ、まず間違いなく死ぬだろ？

撃てれば、の話だが。

「 真改さんは」

よく通る声。

同時に、零落白夜によつて破壊された遮断シールドの隙間から、六機のビットが飛び出していく。

「 あなた如きが傷つけていい方では、なくつよー。」

ブルー・ティアーズ全機による、レーザーとミサイルの一斉射撃。零落白夜でシールドエネルギーを失つたところにそれを受け、ひとたまりもなく墜落していく敵IS。

だが、まだだ。

敵ISの再起動を確認。警笛。ロックされています。

「悪いがさつきのは、鈴に頼まれた分だ」

白式の警告通り、片方だけ残つた左腕を最大出力形態に変形させたISが、地上から俺を狙つていた。

「そしてこれが

今までと比べても圧倒的な熱量を持つビームが迫る。  
俺はその光の中に、ためらいなく飛び込んで

「俺の、分だあああああつ……」

今度これ。

敵ISの装甲を、真っ二つに切り裂いた。

「よう。且、覚めたか?」

幼なじみの声。

顔を横に向ければ、三人の幼なじみと、セシリ亞、本音の姿があつた。

「中々起きないから心配したわよ、シン。」

「具合はいかがですか？真改さん  
「お疲れさま～、いのっち」

口々にかけられる、労りの言葉。  
己は、どうにか生き残つたらしい。

「……真改」「……」

俯いた筈の声。

それを聞き、安堵と喜びに心を満たされる。

守れた。

「……済まなかつた。私のせいでの前は危つへ

「……怪我は……？」

「え……？」

筈は一度キョトンとして、

「あ、ああ。真改のおかげで、怪我はない」

「……なら、いい……」

「……ありがとう」

筈の声が震えている。

また、泣かせてしまつたか。

「ありがとう、真改……！」

再び俯き、泣き始めた篠の顔に手を伸ばし、その眼から流れれる涙を拭う。

「……無事で、良かつた……」

「それは、私の台詞だ……！」

篠は己の手を取つて、さりに泣き出しちしました。  
震える篠の肩を、慰めるように一夏が優しく呴く。

「それで、大丈夫か? どこか痛むとこないか?」

「……」

朧月が守ってくれたのだろう、疲労はあるが、体に怪我はない。

ああ、そういうば、ひとつだけ。

「……喉……」

「「「「「は?」」」」

「……喉が、痛い……」

「「「「」」」」」

一瞬の静寂。

「……ふ、あはははは!」

「た、確かに、あはは、すゞい声出してたもんねえ、アンタ!」

「し、真改さん、ふふふ、ここは、笑いをとる場面ではありませんわ!」

「ふふ、真改、お前といつやつせ、ふふふ……!」

「あははは、いのつち、普段喋らないからだよ~」

「……」

……納得がいかない。

痛む所はないかと聞かれたから、正直に答えたといつのこと。

……だが、まあ。

重くなつた雰囲気も和らぎ、なにより篠も笑つてゐるので、善しと  
しよう

## 第1-3話 月光（後書き）

第一巻分、完！

ようやく終わった……。

小説家ってすげえな、こんなのをオリジナルで書いてるのか……改めて尊敬します。

ひと区切りついたので、もしかしたら次回は外伝になるかもです。  
その場合の主人公は、モチロン……

## 外伝 ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター（なんりゅうてす）（前書き）

ノリと勢いだけで書いたシロモノです。  
設定適当、展開むちゅくちゅ、けいじぬくなさい、書き始めたら止  
まらなかつたんです……

外伝 ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター（なんぢやつて予告風）

世界最強にして女性にしか扱えない兵器、IFSの操縦を学ぶための  
訓練機の「試合場」で、どうやって、二つの男をバロー。

IS学園の入試会場に、どういうわけか、二人の男子がいた。

一人は日本人らしい黒髪黒眼、中肉中背で中々に整った顔立ちの少年。手に持つた紙と睨めっこしながら、あーでもないこーでもないと、ぶつくさぼやいている。

そしてもう一人は、少年と呼ぶのが憚られる、250センチはあるうかという長身を、岩の塊のように鍛え上げた巨人である。

「迷つちまつたなあ、イイイチ力アアアアツ！！」

单纯馬鹿！！

「ハツハ！」

日本人の少年は織斑一夏。

そして大柄（どころの話ではない）な少年（？）はヴァオ！。

國語二編

「オレの名前はヴァオーだ！よろしく頼むぜえ、みんなあああーー！」

「やかましい！お前は普通の声量で喋れんのか！？」

「成田三平」に無理に「ニシカセ」を付す

「ハツハ！」

振り下ろされた出席簿。普通にやつても届かないでジャンプする

姿がちょっとラブリー。

「わたくしを知らない？」このイギリス代表候補生、セシリ亞・オルコットを！？

「悪いな、オレあ人の名前覚えるのが苦手なんだ！」

「なんこと胸張つて言つんじゃねえよ！」

少女たちとの出会い。

「決闘ですか！」

「上等だあ！分かり易いのは、嫌いじゃあないぜえー！？」

そして（何故か）戦い。

「これがヴァオーヴンの専用E.S、「グレーディッシュニア」です！」

それは異形だった。

操縦者の少年（？）に合わせたのか、高さ五メートルはあらうかといふ巨躯。

隙間なく施された白い全身装甲<sup>フル・スキン</sup>は見るからに分厚い。

武装は右腕に巨大なバズーカ、左腕に一門、両肩に二門ずつ、計八門もの六連装大型ガトリングガン。

この怪物を見た誰もが思った。

これはE.Sではない、要塞だ。

「あら、逃げずに　　つてなんですのその機体！？」  
「見りやあわかんだらうが！オレの専用機だぜえ！？」  
「そんなIS、見たことも聞いたこともありますわー！」  
「ハツハー！細けえこと氣にしてるとハゲるぜえ！？」  
「ハゲ……………レ、レディになんてことをおひしゃいますのー！？」

少年（？）には『リカシーなどない。

「くつ、なんという弾幕…………ですが、この程度で墜ちるわたくし  
とブルー・ティアーズではありませんわー！」  
「ハツハー！望外だあ！悪くないぜえ、セシリニアアアアアアツー！」

あるのはただ、無尽蔵の弾薬と、無限の闘争心のみ。

「久しぶりだなあ、リイイイン！相つ変わらず小せえなあー！？」  
「うつさいわね！？アンタが『力過ぎんのよ、この単純馬鹿！ー！』

幼なじみとの再開。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとするー！」

「やつだぜ、イチカアアツ！ オレのダチなら、きつかり決めろおおーー！」

「馬鹿野郎……なんこと言われたら、是が非でも氣合い入つちまうじゃねえか！」

弾丸が届かぬのなら、せめてこの声を。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」「ハツハー！嫌われたモンだなあ、イイチカアアアア！」  
「うるせえ、ぶん殴るぞてめえ！今明らかにそういう雰囲気じゃねえだろ！？」

軍人すらビビらせる威圧感。

「織斑くんのグループに入れて！」

「トコノアベニカニシテ」

「私は織斑くんと！」

「デュノアくんで！」

織斑くん！

「元祖ノアくん！」

織斑くん！」

元ノア<ん!

「オレもいるぜえええー!?

「いや、生身でEISより大きい人はちょっと……」

「そりやあないぜイイイチカアアアアツ！…」  
「俺に言つなつ！」

大は小を兼ねないこともある。

「じゃあ、射撃武器の練習をしてみようか」  
「なんならオレのを貸すぜえ！？イチカアアア！」  
「そんなデカいので練習になるか！？」  
「あはは、二人は仲いいんだね」

もう一度言おう、大は小を兼ねないことがある。

「ねえねえ、第三アリーナで専用機同士が模擬戦してるよー。」「ほんと！？誰と誰？」  
「片方はわからないけど、もう片方はすごく大きかったから、多分  
ヴァオーくんだよ」  
「…………え？」

何だろう、嫌な予感がする。

「このシユヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では、実弾兵器  
など無力だ」  
「ハツハー！なら止めてみせろお！弾ならまだま、腐るほどある  
ぜえええー？」

「え、ちょっと、おま、いくらなんでも多すぎ      」

毎秒百発の大口径ガトリングガンが八門、合計毎秒八百発。故人曰わく、数は力なり。

「あいつ、ふざけやがって！ぶつ飛ばしてやる！」

「落ち着けえ、イチカアアア！！！」

「……お前に言われると、なんか落ち着いたな」

「そりやオレを馬鹿にしてんのか？……とにかく、白式はもうエネルギー切れだ、このまま行つても死ぬだけだぜえ？」

「じゃあどうすんだよ、あの偽物野郎が先生たちに制圧されんのを、黙つて見てろつてのか？冗談じやねえ、あいつは、俺がぶつ飛ばさねえと気が済まねえ」

「んなこたあ分かってるぜえ、イチカ。エネルギーがないなら、オレのを分けてやる。グレティッシュ・イアはこのガタイだ、白式のエネルギーくらいなんともないぜえ！」

姉を真似る黒いESに、生身で挑もうとする親友を支える。  
その体は、伊達に大きい訳ではない。

「白式は展開出来た。……そつちは大丈夫か？ヴァオー」

「ハツハー！当つたり前だ！！誰に口聞いてやがんだよお……！  
まだまだ行けるぜ、イイイイチカアアアアアアツ……！」

「つたく、頼もし過ぎるぜ、お前は      ！」

その巨躯は、仲間を守る城壁であり、災厄を打ち碎く鉄槌である。

『強さひとつのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常にねむかうじきゃないかと、俺は思つ』

少女は少年に問う。

「強さ」とは、なんであるかを。

『強くねえよ。俺は、まったく、強くない。けれど、もし俺が強いつていうのなら、それは……』

『強くなりたいから、強いのさ。それに強くなつて、誰かを守つてみたい。自分の全てを使って、ただ誰かのために戦つてみたい』

その答えを聞き、少女は、もう一人の少年にも問うた。

「強さ」とは、なんであるかを。

『強さだあ? んなモン、オレが知る訳ねえだろ? が

『オレは戦うしか能がねえんだよ。他のこたあ、なーんも、出来ねえんだ』

『だからせめて……なんのために戦うのか、誰のために戦うのかくれえは、自分で決めてえんだよ』

『まあそれも、言つなりや自分のためだけだなあ、ハッハー…』

『だからオレは戦つてる。強さとかなんだとか、そんなモンはどうでもいいんだよ』

『人間なんざあ、いつ死んじまつかわんねえからなあ。…………だからいつ死んでも悔いが残らねえよう』、オレあオレに出来ることを、いつだって全力でやつてるだけさ』

『だからオレは戦つてるのさ。なにせオレあ、戦うくらいしか能がねえ、単純馬鹿だからなあ！！ハツハー！！！』

その答えを聞き、少女は思つ。

これもまた、ひとつ「強ヤ」の形なのだろうと。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「……嫁？婿じゃなくて？」

「おじおこラウラアアアアアッ！オレにはチューはねえのかよおお

おおっ！？」

「え、だつて届かないし……」

けどやつぱり大は小を兼ねないこともある。

臨海学校。

黄金の太陽、青い海、白い砂浜、色とりどりの水着に身を包んだ年頃の少女たち、そして戦艦と見紛うほどの巨艦。

「うううううみいいいいだあああああつ！！！」

「うるせえええ！？海なのに山彦が返ってきてしきだぞ！？」

「ハツハー！上手いこと言つたつもりか、イイイイチカアアアアア

！？

「だからいちいち叫ぶんじゃねえよー。」

「……お前ら、旅館では静かにしろよ、頼むから」

教師はなにかを諦めた。

「！」の料理面々なああ！…

「だからいちいち叫ぶなつー騒ぐと千冬姉が

「お前たちは静かに食事をすることができんのか。どうにも体力があり余つていいようだな。よからう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。五十キロもあれば十分だろ？」「しゃあねえ、さつさと済ませようぜえ、イイチカアアアー！」  
「走るのかよ！？」ていうか俺を巻き込むなあ！…」

単純馬鹿には冗談も脅しも通じない。いろんな意味で。

「久しぶりだなあ、束がああああん！…」

「久しぶりだねえ、ヴァーくうううん！…」

「……なんだこれ」

感染しました。

そして事件は起きる。

洋上を高速で移動する敵機を討ち取るべく、少年と新たな「力」を

手に入れた少女が飛び立つ。

「きなくせえなあ。なんかある氣がするぜ」

「どうしたヴァオー。やけに静かだな」

「……ホウキ」

「?なんだ?」

「帰つてこいよ」

「?妙なことを言つヤツだな。心配せずっとも、私と一夏なら問題ない。紅椿もあるしな」

少女は気づかない。

巨躯の少年が、何を案じているのか。

そして、その不安は現実となつた。

「白式と紅椿、第四世代型TIS-1機を相手にして、難なく勝利、か  
……どこの首輪付きを思い出すなあ、メルツェル」

「ヴァオー? 何を言つてるの……?」

「なんでもねえよ、シャル。……まあ行こうぜえ! イチカの弔い合戦だあ!!」

「一夏は死んでいない!」

「縁起でもない」と言つてんじゃないわよ!」

「ハッハー!」

そして巨躯の少年と少女たちは戦いに赴く。  
傷付き倒れた仲間のために。

一度は追い詰めた。

しかし敵は真の力を顕し、反撃の牙を剥ぐ。

その圧倒的な力に次々と倒れていく少女たち。

「ダメだ、このままじゃ……！」

戦うと誓った。

しかし絶対的な力の差に、心が折れそうになる。  
されど忘るるなかれ、戦っているのは少女たちのみに非ず。  
巨躯の少年もまた、己の存在意義を賭け、戦っているのだ。  
かつて守れなかつた戦友たちに、報いるためにも。

「『ど』見てやがる！－てめえの相手は、このオレだあああ－！」  
「ヴァオー！」

戦うと決めた。

こんな自分を必要だと言つてくれた友を守れなかつたから。  
こんな自分に付き合つてくれた友を守れなかつたから。

こんな自分と共に笑つてくれる友を、守りたいから。

それだけが、戦うことしか出来ない自分の、たつたひとつ、願い  
だから。

たとえ腕がもげようど。  
たとえ足が千切れようと。  
たとえ眼を灼かれようと。  
たとえ心臓を抉られようと。

他でもない、自分のために。

悔いなど無いと、笑いながら逝くために。

「」の命、尽きるまで。

戦い抜くと、決めたのだ。

「ヴァオー、無理だ！退がれ！」

だから、それは聞けぬ。

自分は少女たちを守るために、「」にいるのだから。

「退がれだあ？相手見てもの言えよ、オレにそんな頭のいいこと、出来る訳がねえだろうがあああああ…！」

だから、安心して欲しい。

これが、これこそが、巨躯の少年の望みなのだから。

「ハツハー！まだまだ行けるぜ、ホウキイイイイイイ…！」

少年が目を覚まし、新たな力を手に戦場へ駆けつけた時。  
ただ一機、白い装甲が、不破の城壁の如く堅牢さでもつて、敵の前に立ちふさがっていた。

「わりい、遅れたな

「ハツハー！もうちよい遅けりや、オレが見せ場を独り占めしちまつてたぜえ…！」

「そいつは良かつた。ならまだ、俺の分も残つてることだよな」「くれてやるぜえ、イチカ。後ろは気にすんな、流れ弾は全部吹っ

飛ばしてやるからよー！…

「はっ、マジで頼もしいぜ、ヴァオーー！」

田嶋の少年は、自らの全身を覆う装甲に感謝した。負けられぬ戦いに赴く親友に、深く貫かれた胸を、見られずに済んだのだから。

（田嶋が震んできやがつた……へつ、ここまでか。だがまあ、ビリビリ守られたみてえだし）

「悔いはねえ。……楽しかったぜ、イチカ」

そり、悔いはない。

何故ならばこんなにも、安らかな気持ちで逝けるのだから。

いつして。

かつて友のために戦い、友と散った男は、今度こそ友を守り切った誇りを胸に、一度目の生を終えたのであった。

## 外伝 ヴァオー・ザ・ガトリングモンスター（なんぢゅうて予告風）（後書き）

とつあえず一言。

ヴァオー書くのすげえ楽しい。

けど妄想してたネタはあらかた出し尽くしてしまいました。

## 第14話 平穏（前書き）

お待たせしました。

田常パート、真改の休日です。

## 第14話 平穏

六月頭の日曜日。

一夏が久しぶりに家に帰ると囁つので、今日の訓練はない。  
最近ずっと訓練続きだったから、たまには休みも必要だろ？  
折角だから「私も家に帰ることにした。

「あ、おかえりー、シン姉ちゃん！」

「姉さん帰つてきたの？」

「やあ姉さん、お帰りなさい。久しぶりだね。」

「姉ちゃん、たまには電話くらいしうよなー」

「……」

弟妹たちが迎えてくれる。

うむ、やはり帰る家があるのは素晴らしい。

「お帰り、真改。元気そつで何よりだよ」

「……」

柔らかい笑みを浮かべる五十歳くらいの男性、この孤児院の経営者である唐沢さん。

この人は「己の無表情から体調や気持ちを見抜くことが出来る、数少ない人の一人である。

「HDS学園での調子はどうだい？」

「…………順調…………」

「それは良かった。友達はできたかい？」

「…………数人…………」

「うさうさ、学園生活を楽しんでるみたいだね

心から嬉しそうに頷く姿は、正しく父親のそれだ。

多くの孤児たちから信頼され、心の傷を癒やしてきた実績は伊達ではない。

「君の花壇は田と田が一生懸命世話をこなしたよ。お姉ちゃんに褒めてもらひうただーって

「……」

「……」

田と田の孤児院で暮らす双子の姉妹である。

花壇の世話は田と一緒にやっているが、この二人は特に率先して手伝ってくれる。

「ここまで玄関で話すのもなんだね。ほら、早く上がりなよ。少し早いけど、お風呂しよう

「……」

「……」

促され、靴を脱いで中に上がる。

帰つて来た、な。

「…………ただいま……」

「うさ。お帰り、真改

「おひ、シン姉、帰つて来たのか」

「…………」

己の姿を見て、居間でテレビを見ていた少年 ひとつ下の弟、宗太が声を掛けて来た。

「メシは？もう食ったか？」

「…………」

「んじゃ、ちょい早いけど作るismanすかね」

「…………」

言つて、立ち上がる宗太。

「イツは料理が上手く、孤児院での食事担当だ。

宗太の手伝いを他の者が日替わりで行つのが、当孤児院の料理事情である。

「なんにするよ？肉も野菜も魚もあるけど」

「……任せる……」

「そーいうのがいつとつ困るつての。……あー、じゃあ無難に、チヤーハンでも作つか」

頭を搔きながらエプロンを身に着け、厨房に向かう宗太。

「イツは粗暴な言動とは裏腹に纖細な味付けをする。

将来は自分の店を持つことが夢らしく、その料理の腕前は五反田食堂の店主である巖さんも認めるほどだ。

「ちょい待つてろよ。すぐできつから」

「…………」

手際良く肉や野菜を切り、卵を溶く。何故か大火力のコンロに点火し、白米と具を炒め、卵を流し込む。味付けは塩のみといつのがこだわりらしい。

「うひし。じゃあみんなを呼んで来てくれ」

「…………承知…………」

ついでに帰ってきた挨拶もしてこよう。

久しぶりの再会だ、顔くらい見せなくてはな。

「ちょっと姉さんー私が買った服置いていつたでしょー」

「…………」

妹の一人、小夜からの言葉。

己を着せ替え人形にしようと企む妹は複数いるが、コイツはその筆頭である。

「いい！？ 可愛い女の子は着飾らなくちゃいけないのー！ それが持つて産まれた者の義務なのよ！」

「…………」

耳にたこが出来るほど聞かされた小夜の持論。

己の姿が整っているかどうかはわからないが、コイツに言わせる  
と「すげえ」らしい。

成る程、わからん。

「まあいいわ。姉さんの部屋に送るから」

「……無駄……」

送られて来た荷物を受け取らなければいいだけだからな。

「一夏さん経由で届けてもいいことになつてゐるわ

「……」

おのれ一夏！裏切ったな！

「と・に・か・く・ち・や・んとお洒落に氣を使いなさい。私のお小遣いも使つてゐんだからね！」

知るか。お前が勝手にやつてはいることだらう。

「あ、シンの姉ちゃんおかえりー！」

「おかえりー！見て見て、桔梗ききょうがきれいに咲いたよー！」

「……美事……」

花壇に行き、仲良く土いじりをしている同じ顔の少女たちと田口声を掛けた。

巴

花壇には青紫色の美しい花が咲いている。

己がI.S学園に入学する前、一人と一緒に植えた桔梗である。

卷之三

「お姉ちゃんにお願いされたからね！」

「…………ありがとう…………」

一  
二  
三  
四  
五

咲き誇る桔梗にも負けない、花のような笑顔で胸を張る一人の頭を撫で、礼を言う。

「あー、出る?

「すぐ行こよーす」

手早く片付けをし、とにかく歩いて行く一人。

「手を先え

二十一

「つむ、素直でよろしい。

「たっぷり食えよ。おかわりあるからな」

己を含めると、今この孤児院には十二人の子供たちが生活している。それだけの人数分の食事をまとめて作りながら、味はかなりのものだ。宗太の将来が楽しみである。

「セツニヤシン姉、イチ兄から聞いたけど、専用機もりつたんだって？」

「…………」

昔からよく孤児院に遊びに来る一夏は皆から兄のように慕われているが、しかしこいつ連絡したんだ。

「シン姉に電話しても聞かれたことしか答えねーからよ、いつもイチ兄に聞いてんのさ」

「…………」

適切な判断ではある。

あるが一夏よ、なんでもかんでも話してはいられないだろうな。

「たまには声だけでも聞かせなさいよねー。姉さん、ショットちゅう無茶するんだから」

「…………善処する…………」

どつやうり心配していくてくれたよつだ。

電話は苦手だが、たまには連絡するようにせねばな。

「ねえ宗太お兄ちゃん、専用機つてなに？」

「あーっと、そうだな、つまりシン姉は、偉い人から頼まれて手伝いをしてるんだよ」

「へー！すゞー！」

「さすがシンお姉ちゃん！」

「……」

「けど如月が作ったんだってね？……大丈夫かい？」  
「……問題ない……」

どうやら一夏はかなり詳しく話しているらしく。

己がエラ学園を受験すると言い出してから、エラについて調べている唐沢さんが、心配そうに聞いてくる。

この様子だと、怪我したことも知られているかもしかん。

「そりゃ。けど、無理だけはしないよ！」君になにかあつたら、私はもちろん、ここにいるみんなが悲しむからね」

「……」

暖かい言葉。

聞く者に安らぎを与える声色。

この人を心配させていることを思つと、心が痛む。

「……食事中にする話じゃなかつたね。うん、今は宗太の作つてくれたチャーハンに集中しよう。いつもより美味しいしね。久々に真改が帰つて来たからかな？」

「んな！？なななにを言つてんだよー？」

「あれ？？宗太、顔赤いよ～？」

「あ、赤くねえよつ！…」

「や～い、真つ赤～」

「宗太お兄ちゃん、顔真つ赤～」

「だから赤くねえよつ！…」

「はつはつは、若いつていいなあ」

「つるせえ！てめえら全員、晩飯抜きだあ！…」

「…………」「…………」

騒がしいのは苦手だ。

苦手だが 決して、嫌いじゃがない。

昼食を食べ終えると、すぐに孤児院を出る支度を始めた。

「姉ちゃん、もう行っちゃうのか?」  
「わい少しうつへつしてやっこのこ」  
「…………やねじがある…………」

訓練は休みだが、臘月の調整がある。  
如月重工に頼んで、新しい装備を送つてもいいことになつてこないだ。

「…………また、帰つてくる…………」  
「うん、ここは君の家なんだから、遠慮はいらなこよ。ただ小夜も  
言つてたけど、たまには連絡が欲しいな」  
「…………承知…………」  
「行つていりしおーー」「…………」

孤児院の監に見送られ、外に出る。  
己の家はここだけだ。

年長者として、皆の姉として、この家を守れるよう、まだまだ精進せねばな。

「やあやあ井上君、久しぶりだねえ！折角の休日を僕らのために使つてくれてありがとう！」

「…………」

いつも思うのだが、なぜわざわざ社長が出張つて来るのだろう。

「うちの技術者たちはみんなコミュニケーション能力に難があつてねえ。それ以外の職員たちは技術的な理解がない。僕が来るのが一番確実なさ」

「…………」

己が言つことではないが、社長は性格に難があると思つ。

「それでは早速装備の説明に入らせてもうつよ。今回井上君の『要望の通り、対IS用の闪光弾を作つてみた』

展開された朧月の右肩に、右腕の動きを阻害しない形の小型の発射装置が取り付けられている。

「名前は月蝕。<sup>げっしょく</sup> ただ光るだけじゃ面白くないからね、特殊なパルスを出してISのハイパーセンサーに干渉、全方位から強烈な光を浴

びてるみたいに認識せらるんだ

「…………」

……なにもそこまでのものは要求していなかつたのだが。

「だけど効果は短いよ。もつて数秒、それも弾から離れれば離れるほど、時間はさらに短くなる」

数秒あれば十分だ。

朧月の機動力と月光の威力ならば、仕留めるのは容易い。

「よつし、じゃあ早速、月蝕の威力をじ覽にいれよ!」

スチャッと懐から取り出したサングラスをかける社長。そして小さな箱を床に置き、手に持つたスイッチをまさか!

「まさか」とな

カツ !

「……………」

瞬間、ハイパーセンサーから送り込まれてくる光の奔流。社長の言つ通り全方位から襲いかかってくるそれは、瞼を閉じてもなお己の田を灼いた。

「どうだい、すごいだろ!発射された弾は好きなタイミングで起爆できるから、直接当てる必要もないよ!」

「…………」

ISの保護機能により、視界は一秒で回復した。

ハイパー・センサーから送られてくるのはあくまで「情報」なのだろう、目にもなんら異常はない。

だが何故己で試した。

「こういうのは井上君本人が威力を知つておかないと。おかげで月蝕のことが良くわかつただろう?」

「……先に言ってほしい……」

「まあまあ、後遺症は残らないから」

「……」

そういう問題ではない。いざれ治るからと書いて、怪我をする」とに何も感じない者はそうそういない。

「あとは朧月のハイパー・センサーを調整して、月蝕に反応しないようすれば完成だ。ああ、心配しなくて、この対月蝕用の処理は僕らだからできるんだ。他のところじゃ、そう簡単にはいかないよ」

「……」

そこは流石の如月重工、技術力では他の追随を許さない。

「今回はこの月蝕だけだね。……うーん、やっぱまらないなあ。

井上君、他になにかないのかい?」

「……ない……」

「……」

今回頼んだ閃光弾は、敵に切り込む際により確実に仕留められるよう、隙を作るための手段として欲したものだ。

基本的に己には剣以外に取り柄がなく、あまり妙な物を寄越されて

も扱えない。

今のところ朧月に不満はないので、しばらくは追加装備を頼むことはないだろう。

「仕方ないなあ、それじゃ僕はもう戻るよ。ところで、学年別個人トーナメントは今月だつたよね？その時こそ、朧月の勇姿を見せてくれたまえよ」

「……承知……」

学年別個人トーナメントとは、EIS学園の全学生強制参加で行われる一大イベントである。

一週間かけて行われ、特に三年生にとってはEIS関連の企業、あるいは政府や軍に自分をアピールする最大の見せ場であり、かなり大規模なものになる。

正式ではないとは言え、如月重工のテストパイロットである己が結果を残さない訳にはいかない。

「じゃあ、トーナメントのときに、また。けどとにかく要望があつたらすぐに言つてくれたまえよ、うちの連中は、みんな朧月をいじりたくて仕方ないんだから。もちろん、僕もね」

「……」

うふふ、と笑いながら言つ社長からは、何やら不気味な気配が漂つている。

今回の月蝕は良い意味で予想を裏切つてくれたが、如月重工に頼つているといすれどんでもない代物を掴ませられる気がする。

……要求する品は、よく考へる必要があるな。

「おかえり～、いのっち」

「……」

浴室に戻ると、本音がベッドの上で寝転んでいた。服装はすでにサイズの合っていないパジャマである。というかコイツは制服以外はいつもパジャマだ。

「それじゃあ、『飯行こつか～』

「……」

むくりと起き上がりて言つ本音に頷き、手洗い、うがいをしてから部屋を出る。

……ヒ、田の前に、一夏と鈴がいた。

「お～、おりむーだ～」

「うわーええと……のまほんさん？」

一夏に子犬のよつに引つ付く本音、突然のことに対し困惑する一夏。

「ちよつと本音！離れなさいよ～」

「わ～、りんりんもいる～」

「だからその呼び方やめなさいっての～」

すぐさま鈴が引き剥がしにかかるが、マイペースの究極形である本音を相手に苦戦している。

ちなみに鈴は小学校の時、その名前と中国人とのことで男子にからかわれたことがあった。確かに、『リンリンってパンダの名前だよなー。笛食えよ、笛』だつたか。

……それを聞いた一夏が激昂し、四人を相手に大立ち回りを始めようとしたのを飛び膝蹴り（シャイニングウェイザードと言いつらじい）で鎮めたのはいい思い出である。

「二人も飯か？ちよづこいや、一緒に行こうぜ」

そして「マイシも大概マイペースである。

「なー？ちょっと、一夏ー」  
「わーい、おりむーと」  
「馬鹿が……」

己の呟きが聞こえた様子はない。どちらにしても本音が既にその気になっているので、結局は一緒に飯を食うことになるだろう。

鈴に近付き、他に聞こえないように耳元で囁く。

「すまん……」  
「はあ……別にいいわよ、シンのせいじゃないし。本音のことも嫌いじゃないしね」  
「…………」

諦めたように溜め息をつき、一緒に食事をすることを了承してくれた。

……本当にすまん。今度、甘味でも奢ろう。

「ねえねえ聞いた？」  
「聞いた聞いた！」  
「え、何の話？」  
「だから、あの織斑君の話よ」  
「いい話？悪い話？」  
「最上級にいい話」  
「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トーナメントで

「えええつー？そ、それ、マジで！？」  
「マジで！」  
「うそー…あやー、ビリijoifー…」

まあビリjoifでもないことだらけ。一夏にはよくあることだ。

さて、今日の己のメニューはいつも通り日替わりランチである。相変わらずかなりの味だが、個人的には宗太の料理のほうが好みだ。慣れ親しんだ味だからというのもあるかもしねんが。

「一夏、なんか年寄り臭いこと考えてんでしょ」

突然の鈴の言葉に一夏を見ると、目を細めていた。

確かに一夏かこへしてた表情をする時は妙に年寄りしみたことを考えていることが多い。

それをからかうのはいいが

「鈴」

なにか

箸で人を指すのはいただけない。

食事とは命を食べることであり、その命は感謝を込めて、食事中の礼儀は守らなくてはならない。

己も「いただをあす」と「ソルガルのわせ」は必ず書ひてこる。

「うき、気を付けます」

シハリカニ立わにかし素直に麗ぐるな上

「心うや興あ、心うだナビ」

語つて、すずつと味噌汁をすする一夏。  
……また田を細めているぞ。

「いのっちはみんなのお姉ちゃんみたいだね」「え？ ああ、まあシンは

一日言葉を切り、一夏がちらりと己を見る。

大丈夫だ。本音には話してある。

「孤児院じゃ今一番年上だからな。弟と妹が十人以上いりや、そりゃあお姉さんになるわ」

「ほほ、いのちに妹さんがいるのは知つてたけど、そんなにいつけいいたんだー」

「あれ、隆さんは？ もう卒業したの？」

「ああ、去年の四月に就職したよ。やつと恩返しが出来るつて、張り切つてたぜ」

隆さんは以前の年長者であり、唐沢さんを心から尊敬し、子供たちの世話を一生懸命にこなしていた人だ。彼が就職し、孤児院を卒業する時には盛大な見送りパーティーが催され、一夏と千冬さんも招かれた。ちなみに藍越学園出身である。

「ふむふむ、色々なことがあるんだねー」

「……」

うんうん頷いている本音だが、「コイツは自分から『』の」とあまり聞こえとはしない。

己に興味が無いのではなく、己の身の上に気を使つてゐるのだろう。

……本当に、聰い娘だ。

「せういえば今日、弾の家に行つたんだけどさ」

「へー、せういえばアイツとはまだ会つてなかつたわね。元氣だつた？」

「つむをいくらい元氣だつたよ。でさ、蘭が来年、EHS学園を受けるらしいんだよ」

「……へー

鈴の表情が曇る。

中学時代に良く四人でつるんでいた五反田弾の妹、五反田蘭は、鈴とは一夏を取り合つ仲であつた。

……一夏のことさえなければ、普通に仲がいいのだがな。

「で、入学したときは俺が面倒見ることになつたんだよ

「ふーん……って、なんですよー？」

バンッヒテーブルを叩いて立ち上がる鈴。

「……行儀が悪い……」

「う……」

着席。

「あんたねえ、いい加減女の子と軽く約束するのやめなさいよ！責任も取れないのに安請け合いして、バカじやないのー？つかバカよー！バカ！」

「おー、りんりんすーい迫力～」

……本音はもしかしたらかなりの大物なのかもしれない。

「いや、その、だな？鈴、すまん

「謝るくらいなら約束を

「あ

「あ

「あつてなによ、あつて

「あ

揃つて間抜け面をしてる一人の視線を追つと、やけにほんじよつに間抜け面をしている簾の姿が。

「…………」

なにやら戻まざい雰囲気である。

「よ、よお、簾」

「な、なんだ一夏か」

「…………」

先月簾が部屋を移動して以来、この一人はこんな感じだ。一夏は色々話しかけていたが、簾の方がそれを避けている。

「何、アンタたち何があつたわけ？」

「いや!別になにも!」

それは「何があつた」と面白じいこれらのものだ。

「なにその「明らかに何かありました」って反応。わざとやつてんの?」

「そんなわけないだろ……」

一夏の言い訳じみた言葉を聞いた簾は途端に不機嫌そうになつて、早足に去ってしまった。

「あー……」

一夏もこの状況をどうにかしたいようだが、どうすればいいかわからない、といったところか。

ふむ。

「……みんな食い終わつたし、そろそろ戻るか」「戻るか~」

「……ごちそうをました……」

「鈴、今日は誘つてくれてありがとな」

「……たまにはアンタから誘いなさいよ、まったく……」

「うん?」

「なんでもない。じゃあね」

そうしてそれぞれの部屋に戻つて行く。

しかし、その前に。

「……本音……」

「んん~?」

「……先に戻れ……」

「……りょうかい。もう、いのちは優しいな~」

「……」

まったく　　本当に、聰い娘だ。

皆と別れた後、己は食堂から出てきた簫を人気のない所に連れ出した。

「話とはなんだ？」

「……一夏と、何があつた……？」

ただ部屋が別々になつただけでは、流口にあそこまでよそよそしい態度はとるまい。鈴の言つ通り、一人の間になにかあつたと考えるのが妥当だ。

「えーっと……その、だな……」

「……」

顔を真っ赤にして「ほんとう」と言葉を濁す簫。そして、意を決したよつこ、

「い、一夏に……！」、「い、い、交際を、申し込んだ」

「……」

「まう。まうまうまう。それは、それはそれは。

「……おめでとう……」

思わず簫の頭を撫でる。簫にしては、随分頑張ったものだ。

「いや、へ、返事はまだなんだ。学年別トーナメントに優勝したら、  
といつ約束で……」

「……」

顔を真っ赤にし、視線をあちらこちらで迷わせ、両手の人差し指をつんづんとつつき合わせる姿は、その整った容姿と合わせれば世の男たちには効果観面だろう。

「……手伝わせてもらひ……」

「え？」

「……訓練……」

そう、学年別トーナメントは過酷だ。

一年には己を除いても専用機持ちが四人いる。筈は訓練機で彼らと戦わなければならぬのだ。

ならば、相応の実力を身に付けねば。

「……申請は……？」

「もう済ませてある。今から行つても間に合わないだらうから、事前にな

ふむ、抜かりはないということか。

学年別トーナメント直前では皆訓練機の使用申請を出すので、通るかどうかは運次第になってしまふからな。

「……早速、始めよつ……」

「今日から付き合つてくれるのか?」

「……無論……」

学年別トーナメントまでもうあまり日がない。

今日はエスの訓練はしない予定だったが、こつなつたら一日たりとも無駄には出来ん。

「……ありがとう、真改」

「……無用……」

大事な幼なじみの、六年越しの想いがついに成就するかもしないのだ。

その大願の前には「」の事情など些細なものである。

「では行くか。よろしく頼む、真改！」

「……」

一度部屋に戻り、準備をしてからアリーナへ向かう。

この時己は、笄の才能を引き出すにはどうすればいいかといつゝとばかり考えており、失念していた。

そして後に後悔する。

笄がどんな言葉で一夏に交際を申し込んだのか、聞いていたかつたことを。

## 第14話 平穏（後書き）

次回はあの一人の登場です。  
さてどうするか、悩みどころですね。

前回の外伝ですが、反響がすごくて、「面白かった」といった内容の感想もたくさんいただきました。  
ありがとうございます。

今後の予定としましては、一巻分終わる」とに外伝を書くつもりです。  
しかし外伝の主人公はヴァオー以外のキャラにする、といつも毎回  
変える予定なので、予めご了承ください。

それでは、読んでくださってありがとうございました。

## 第15話 不穏（前書き）

みんなのアイドルが登場です。  
だんだんキャラクターが増えてきて、頭の中がこんがらがってしま  
います。

## 第15話 不穏

学年別個人トーナメントを目前に控えたある日。  
この日は朝から大事件が起きた。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介しますー・しかも一名です！」

「え……」

「「えええええっーー?」」

これには己も少なからず驚いた。

事前に全く噂になつていなかつたというのもあるが、転校生が同時に一人、しかも同じ組になど、通常ならば考えられない。

しかし冷静になってみれば、通常とは言えない要素がふたつある。

ひとつは、ここがただの高校ではなく、世界各国の思惑が入り乱れるHIS学園であるところのこと。

そしてもうひとつは、言わずもがな、己の前の席に座る幼なじみ、世界で唯一人 HIS を動かせる男、織斑一夏の存在である。

一夏の利用価値は計り知れない。どの国も、「コイツはなんとしても手に入れたいことだらう。

まだ幼さを残る少女を使って、籠絡せしめんとするほどには

(……反吐が出る……)

というわけで、盛り上がるクラスメイトたちを余所に「」は朝から機嫌が悪かった。

「それじゃあ、入つて下さい」

「失礼します」

「…………」

教室の扉を開けて、転校生が入つてくる。

一人は白に近い銀髪を腰まで伸ばし、左目に眼帯をした小柄な少女。そして、もう一人は

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願ひします」

にこやかな顔で礼儀正しく挨拶し一礼する転校生、シャルル・デュノア。

その姿を見て、クラスメイトの誰かが呟いた。

「お、男……？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より転入を」

思わず漏れたのだろう咳きにも丁寧に答へようとしたシャルルだが、それは最後まで言えなかつた。

何故なら「」は、EIS学園の一年一組だからだ。

「きや……」

「はい？」

「きやあああああああ――――つ――」

「…………」

耳が痛い。

衝撃波じみた黄色い叫び声は、己の鼓膜に大きなダメージを与えた。

「男子！」人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守つてあげたくなる系の！」

「地球上に生まれて良かつた~~~~！」

すかさず追撃が入る。一段構えとは侮れんな。耳だけでなく頭痛までしててきた。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

かなり面倒くさむうにぼやく千冬さん。

彼女は昔からこいつたノリが嫌いなのである。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

必死な山田先生の様子にどうにか静まるクラスメイト。

そう、転校生はもう一人いる。さきほどから身じろぎもせずに口を開ざし続いている、銀髪の少女である。

「……挨拶をしろ、ラウラ

「はい、教官」

態度を急変させ、敬礼でもつて返事をする、ラウラと呼ばれた少女。その洗練された敬礼と千冬さんを「教官」と呼んだことから、恐らくラウラはドイツ軍人だろう。

千冬さんは以前、一年ほどドイツで軍隊教官をしていた時期がある

からだ。

「リリではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、リリではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」  
「了解しました」

敬礼こそ止めたものの、姿勢は相変わらず、見事なまでの「気を付け」である。

それを見た千冬さんがまた面倒くさそうな顔をしたことに気づいた様子もなく、ラウラはクラスメイトたちに向き直った。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……」

……なんだろう、既視感といつやつか？ 前にも一度似たようなことがあつた気がする。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

いや、気のせいではない。確かにこれと同じような場面を、己は経験している。しかしつ、どこで？

ああ、己の自己紹介の時か。山田先生の泣きそうな顔を見て思い出した。

そんな事を考えていると、突然不穏な気配を感じた。その元を探すと、一夏を睨み付けるラウラの姿が。

「貴様が

「

つかつかと歩いてくるラウラ。

一夏の前で立ち止ると同時に、右手を振り上げ

そこへ、殺氣を感じた。

「……ッ！」

ガタンッ！

咄嗟に、前に座る一夏の襟を掴み、後ろに引く。勢いが付き過ぎて、一夏が己の机に頭をぶつけた。

「こつてえー？」

「……貴様」

己の行動によって平手打ちを空振りしたラウラが、怒りに目を細めてこちらを睨む。

「おじシン、いきなり何すんだよー！」

「……」

一夏が何かを言っているが、今は耳に入らない。睨んで来るラウラを、こちらも睨み返す。

この娘は、一夏を殴りつとした時、確かに殺氣を放っていた。  
徒手空拳ではあつたが、そんなモノは己を安心させる要素足り得ない。

IIS学園に転入できる者が国家代表候補生にほぼ限られている以上、

ラウラも代表候補生であり、専用機持ちであると考えられる。

つまりは平手が当たる直前にHSを部分展開すれば、一夏の首から

上が吹き飛ぶという訳だ。

当然、己が一夏とラウラの間に割って入ったところで盾にもなるまい。

だから、一夏を後ろに引くことで回避させたのである。

「なんのつもりだ？」

「…………」

「お前じゃ、なんのつもりだよ」

己の様子に何かを感じ取ったのか、一夏もラウラを睨み付けている。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「てめえ」

その言葉に一夏も殺氣立つが、ラウラはひとつ鼻を鳴らすと殺氣を霧散させ、教室の前へと戻つて行つた。

「…………」

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えで第一グラウンドに集合。今日は一組と合図でHSの模擬戦闘を行う。解散！」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんが行動を促す。

一夏は怒り心頭といった様子だが、しかし着替えとなればのんびりしてはいられない。

なにせここはHS学園、一夏が着替えを行つような空間など限られており、それは少なくとも教室ではない。

とこか教室は一夏の着替え場所としては最悪の選択である。なに

セクラスメイト つまりは女子と一緒に着替えを行うことになるからだ。

「おーい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だらう

千冬さんの言葉を受け、シャルルが一夏を見る。

「君が織斑君? 初めまして、僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから

そう言ってシャルルの手を取り走り出す一夏。

……しばらくすると廊下から黄色い声が聞こえてきたが、まあいつものことである。

そんなことより また、厄介なことになりそうだ。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する

「はい!」

「一組と二組といつ」とで、今日は返事に気合が入っている。  
まあ一組の連中は一夏と中々接点を持てないからな。今日からシヤルルもいることだし。

「真改さん

「…………」

ふと、隣に立つセシリ亞が声を掛けてくる。

視線だけ向け、続きを促した。

「さつきのことですが……あの人は、一夏さんと何かあつたのですか？」

「…………」

知っているわけではないが、ラウラの言動から大体の想像はつく。しかしそれは己が語ることではない。

沈黙する己からそれを感じたのだろう、セシリ亞はなにかを決意した表情で言った。

「必要でしたら言つてくださいな。このセシリ亞・オルコット、必ずや真改さんのお役に立つて見せますわ」

「…………すまん…………」

必要なら、頼らせてもらおう。

出来ればそんな事態にはなつて欲しくはないが。

「今日は戦闘を実演してもらおう。鳳ー・オルコットー。」

「はーー！」

「は、はーー！」

鈴の返事が若干遅れたな。

……一夏の真後ろにいたのか。何をしていた？

「専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出る」

「はーー！」

二人、前に出る。

鈴はともかく、セシリアは妙に気合いが入っていた。

「せんがーそれで、相手はどうやら元? わたくしが鈴さんとの勝負でも構いま

「嘘うそじゃない。返り討ちにしてあげるわよ」

キイイイン  
。

なにやら空氣を裂く音がある。

音の方向に目を向けると、一夏に亘り直ぐ向かって来る影が。

ドカーン！

際どいタイミングで白式を展開した一夏に、飛んで来た影田先生が操るラファール・リヴィアイヴが激突した。勢いのままに「ゴロ」「ロ」と転がつて行く二人。

山

「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合つたな。しかし一体何事

۱۰۷

「あ、あのう、織斑くん……ひやんつ！」

妙に艶のある悲鳴。

体を起こそうとした一夏が、過失だろうが、山田先生の胸を駁掴んだことによるものである。

ブワリと殺氣が放たれた。発信源は言つまでもない。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！場所だけじゃなくてですね！私と織斑くんは仮にも教師と生徒ですね！……ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんつてことで、それはとても魅力的な」

……あなたはなにを言つてているんだ。

そして一夏、お前はなにをしているんだ。早く離れる。死ぬぞ。

「ハッ！？」

いよいよ臨界点を超えた殺氣が現実に具現したかのよう、セシリアが展開したスター・ライトmk?からレーザーが放たれた。日頃の訓練の賜物か、どうにか避ける一夏。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

そのレーザーはライフルからでなく目から出たのではないかといふくらいに凄まじい目つきで笑うセシリア。

落ち着け、皆怯えているぞ。

ガシーン！

続いて鉈。

二振りの巨大な青竜刀、双天牙月を連結し、振りかぶる。

この武器は双剣としても両刃としても使える便利な代物であり、今の両刃状態だと投擲武器としても使えるのである。

「うおおおおっ！？」

首田掛けて飛んできた双天牙月をのけぞつて避ける。  
しかし体勢を崩したのは拙いな、双天牙月は投げればブーメランの  
ように返ってくるや。

案の定、一夏は避けきれないと察したのか、絶望的な顔をしている。

「はっ！」

ドンッ！

突然の鋭い掛け声と一発の銃声。その発信源は山田先生と、彼女が  
展開した五十一口径アサルトライフル、レッドバレット。  
倒れまま上体だけを起こした不安定な姿勢で放たれた弾丸は、し  
かし正確に双天牙月の両端に命中し、その軌道を変えた。

今山田先生の雰囲気は普段のそれではなく、入試の際に己と戦つ  
た時のものだつた。

しかし己以外はそんな山田先生の様子を初めて見るのか、皆唖然と  
している。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は  
造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

それはそうだが。当時の日本代表は千冬さんだったのだから。

「さて小娘ども、いつまで呆けていろ。わざと始めや」

その言葉にセシリヤと鈴が困惑する。

「え？あの、一対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに戦ける」

……けしかけるのが上手いな、一人のプライドを見事に逆撫でした。先程までの困惑した様子はどこへやら、今はその瞳に闘志をたぎらせていく。

「では、はじめ！」

「手加減はしませんわ！」

「さつきのは本気じやなかつたしね！」

「い、行きます！」

そして始まる戦闘。

しかし千冬さんはそれを見ようとしない。

「さて、今之間に……さつだな、ちゅうどいい。デュノア、山田先生が使っているHJDの解説をしてみせり」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら説明を始めるシャルル。だがその内容は既に知っているものだったので、己は戦闘の方に集中することにした。

「ちよつと……さつきから全然当たってないわよー！」

「鎧わんこそ！ わたくしの射線に入らないでくださいーー？」

「なによ、あたしが悪いってのーー？」

「そう言つたのがわかりませんのーー？」

「……」

ギヤーギヤー言い合いながら戦う一人は全く連携が取れていない。  
むしろ互いに足を引っ張り合っている。

……つむ、見る価値はないな。精々が反面教師になるくらいか。

「「あやあつー。」」

ついには衝突する。

すかさず山田先生がグレネードを投擲、一人をまとめて撃墜した。

「……無様……」

思わず呟いた己を一体誰が責められようか。

否、誰も責めはしないだろう、もし責めるとすれば当の本人たちくらいだろうが、セシリ亞と鈴は負けた責任をなすりつけ合いつことに忙しく、聞こえていない。

「さて、これで諸君にもE.S学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持つて接するように」

今日ここにいる者たちは山田先生の実力だけでなく、有能な敵より無能な味方の方が厄介だということも理解したことだろう。

「専用機持ちは織斑、井上、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。ではハ人グループになって実習を行う。各グループプライダーは専用機持ちがやること。いいな？ では別れる」

千冬さんが言い終わるや否や、一夏とシャルルに人が殺到した。  
……と思ったら何人かこっちに来た。

「い、井上さん！ よろしくお願ひします！」

「…………」

クラスメイトである己に敬語で話し掛け「」の娘は、己たちの朝の鍛錬についてくる、「井上真改ファンクラブ」なる組織の会員である。

……いつの間にそんなものが出来たのか、己は知らない。

このままでは大変気疲れする実習になつてしまつと思つたが、千冬さんから救いの声が。どうやら女子が一夏とシャルルに集中し過ぎてグループ分けが進まないようだ。

「」の馬鹿どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさつとき言つた通り。次にもたつくようなら今日は「」を背負つてグラウンド百周をせむからな！」

瞬間、ぞぞぞぞ、と動き始める女子たち。グループ分けに掛かつた時間、一分。

そして己は絶望した。己のグループになつた者たちの半数以上が、「井上真改ファンクラブ」の会員だったからだ。

「お、お願ひします！」

「やつたあ！神様ありがとう！」

「…………」

別に彼女たちが嫌いなわけではない。ただそのテンションについて行けないだけだ。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。「打鉄」と「リヴィア イヴ」が三機ずつありますので、好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

「己の班は打鉄に決まった。己にはリヴァイヴより打鉄の方が似合つらしい。

……いや、己が乗る訳ではないのだが。

「じゃあお願ひします！」

「…………」

とりあえず一人目はファンクラブの会員ではなかつたので、普通に実習が進んだ。

打鉄を起動、装着し、歩行する。

「よつ、ほつ、と。……むむ、案外難しい……」

「…………慎重に…………」

IHSは通常浮いているものなので足は少々バランスが悪く、歩くといつのばすれなりに難しい。

特にこの機体は操縦者に最適化されていないので尙更である。

だからこそ練習になるとも言えるが。

「…………ここまで…………」

「ふう、ありがとう、井上さん」

一人目が終わり、いよいよファンクラブ会員の番になる。

とそこで、一人目と二人目の間でアイコンタクトが交わされた。

なんだと思う暇もなく、一人目がIHSから降りる IHSを立たせたまま。

「ああー、ついうつかりー」

「…………」

なんとかわざといひつい。なんだ、何が狙いだ。

「あー、コックピットが高い位置で固定されてしまった状態ですね。  
それじゃあ仕方ないので井上さんが乗せてあげてください」

「…………」

「ふつ、計画通り」

聞こえていいるだ。そ、うか、それが狙いか。

どうやら彼女らはなにかしらの取引をしていたようだつた。

「じゃあ、あの、その、井上さん、よろしくお願ひします」

「…………」

相変わらずのチームワークを發揮する少女たちに溜め息が漏れる。  
仕方ない、実習は進めなければならないからな。

「…………」

朧月を起動し、ファンクラブ会員第一号　　かつて朝の鍛錬で己  
に弁当を作つてきた少女、菊池日向子の前に跪く。

「…………掴まれ……」

「は、はい！お願いします！」

日向子の腕がしつかつと口の首に回されたことを確認してから、日  
向子の膝の裏に右腕を通し、抱え上げる。

所謂「お姫様抱っこ」といつやつである。

「わわー…………わあ…………」

「…………

顔を真っ赤にした日向子を極力気にしないように、しかし決して落とさないように注意しながら、打鉄まで運ぶ。コックピットに乗りやすいように、一メートルほどの高さまで浮かび上がった。

「……気を付ける……」

「は、はい！」

どうにか装着は出来たが、フリについている。危なっかしいので、右手を差し出した。

「……支える……」

「あ、ありがとうございますー。」

感動したような面持ちで口の手を取る日向子。転倒しないよう、ゆっくりと導く。

「……慎重に……」

「うふ、しょ……よい、しょ……」

……自転車に初めて乗った子供の練習に付き合っているような気持ちになってきた。

どうにか歩行を終え、降りる段階になつた時、日向子が三人田といコンタクト。

振り向けば餌を待つ雛鳥のような顔で、ひびきを見ているファンクラブ会員たちの姿。

結局、それ以降の全員を抱えてエスに乗せることになった。

実習が終わり、昼休み。

一夏が食事に誘つて来たが断つた。今日は箒が朝早くから弁当を作つていることを知つていたからだ。

(……頑張れよ……)

箒には箒の戦いがある。相手が一夏では苦戦は必至だつが、健闘を祈つているぞ。

ところが己は本音と学食へ向かう。今日は噂の転校生 I.S学園創設以来一人目となる男子生徒、シャルル・デュノアを見よると、いつも以上に混雑している。

「お~、今日は混んでるね~」

「……」

ふむ、これほどの混雑になると午後の授業にはギリギリになるが、逆に好都合だ。普段弁当を持って来ている者や購買で買って済ます者も学食に来ているということだからな、今日は屋上には殆ど、上手くすれば誰もいないだろ。

一夏と箒の二人きりの昼食。図らずもその状況を作り出してくれたシャルルには感謝せねば。

大分待つて食券を買い、日替わり定食を受け取って学食に入る。  
さて、どこかに空いている席は

「デコノアくんいないね」

「ちえー、せつかく学食来たのに」

「どう行つたんだろ?」

「……」

なに? シャルルがいない? どうこうことだ?

学食を見回す。確かにシャルルがいない。一体どこに  
シャルルだけではない、良く見ればセシリアと鈴もない。

「……」

普段仲の悪い二人が、揃つて同じ行動を取る。じうじう時は大抵  
といつかほぼ間違いなく一夏絡みだ。

「……」

さて、考えてみよう。

篠は一夏のために早起きして弁当を作り、一緒に食べよつと屋上に  
連れ出した。

これは篠にとって、ちよつとしたデートの誘いと言つて過言ではあ  
るまい。

「……」

だが一夏はそうと考へるだらうか?

否、一夏に限つてそれはない。有り得ない。

「……」

そしてシャルルもいないという。

転校してきたばかりの人間、しかも注目度の極めて高い男子生徒が、他に気付かれずに行動するには協力者が必要だろう。ではその協力者は誰か？　言うまでもない。

「……」

右も左もわからないシャルルを気遣つて昼食に誘つたであろう一夏。学食にいなセシリ亞と鈴。

ここまで来れば、あとは己の頭でも答えがわかる。

……いい加減にしろよ、一夏。

といつわけで、朝から続き午後も己は不機嫌だつた。

放課後。

己は急用が出来たと言つて、一夏たちとの訓練への参加を断つてき  
た。

昨日も訓練を休んだばかりだからか、シャルルの引っ越しの手伝い  
を後回しにしてまで訓練に駆け付けた一夏が不満そうにしていたが、

しかし本当に急用が出来たのだ。

緊急の、用事が。

「……」

1025号室。

先週までは一夏と篠の部屋であり、今日からはシャルルと一夏の部屋となつたその前に、己はいた。

周りに人気がないことを確認し、扉をノックする。

「はい」

少し間を置いて、ジャージを着たシャルルが扉を開けて出て来た。引っ越してきたばかりで荷物の整理をしていたのだろう、量はかなり少ないが、部屋の中には開いたままのバッグがある。

「えーと……井上さん、だよね？一夏から聞いたよ、幼なじみだつて」「……」

荷物整理をしている所に突然訪れ、それでいて口を閉ざしたままでいる口に対し、シャルルはにこやかに話し続ける。

「なにか用かな？あ、一夏ならいないよ。訓練に行くつて」「……否……」

その一夏との訓練を断つてここに来たのだ。ならば口が用があるので、一人しかいない。

「じゃあ、僕に用かな？なら入つて。まだおもてなしはできないけど」

「…………」

柔らかく笑つて部屋の中に案内するシャルル。

己も続いて部屋に入り、扉を閉め 鍵を、掛けた。

「 え？」

ガチャリという音に、シャルルが振り向く。

己は素早くシャルルに近付き襟を掴むと、大外刈りをかけた。

「うわっ…………！」

倒れたシャルルに馬乗りになる。

突然のことには混乱しているシャルルのジャージのジッパーを下ろしその下に着けられていたコルセットを見て、己の考えが正しいことを確信した。

「…………女、か…………」

「な、なんで」

シャルルの疑問も当然ではある。

なにせ転校してきてまだ一日も経っていないのだ。致命的な失敗があつたならともかく、上手く振る舞つていたうえ、殆ど接していかつた己にバレるとは考えられないだろう。

「なんで、分かつたの…………？」

「…………一日…………」

己は決して頭は良くない。

だが長い間、法律が通用どころか存在すらしないような、企業が支配する世界の中で、傭兵として生きて来た。

自然、権謀術数には鼻が利くようになり、その己が相手にしてきた間者たちに比べれば、シャルルの男装など粗末なものだ。

「……目的は……」

「……聞いて、どうするの？」

時間と共に落ち着いたシャルルが、見下ろす己に問う。  
その眼は敵意よりも諦観の色が濃いが、油断はしない。  
いくら鼻が利いても決して賢くはない己は、気を抜けば容易く欺かれるのだから。

「……次第によつては……」

一夏を守る。

戦わねば生きられず、戦い続けた果てに全てを失つたリンクスたちと、あいつは違つのだから。

笄も、鈴も、セシリ亞も、本音も守る。

力こそが神であり、奪わねば何も手に入らないあの世界と、ここは違うのだから。

人の欲望がどれほど醜く、そして恐ろしいものであるか、己は良く知つてゐる。

だから、己の友人を欲望を満たすための道具と見てゐるよつならば、許しはしない。

「……学園に、報告する……」

無論、今はまだ、ただの脅しのつもりだが。シャルルが自らの意思でやつたことなのか、止むに止まれぬ事情があつてのことなのか、それすらもわからないからな。それも含めて、「次第によつては」だ。

「……殺す、くらいは言いそうな雰囲気だつたのに」「……」

それは最終手段だ。

ここで殺人など犯せば、瞬く間に捕まるのは目に見えているからな。

「……わかつた、話すよ。バレちゃつたら、仕方ない」「……」

諦めたように溜め息をつき、話しだすシャルル。

「けどその前に降りてくれる?」のままだと

ガチャリ。

鍵の開く音が聞こえ、すぐに誰かが入つて來た。

否、誰かなどと言つ必要はない。鍵を外から開けた以上、それはこの部屋に住む者であり、その二人のうち一人は今己の下にいるのだから、残りはもう一人の住人しかいない。つまり入つて來たのは一夏だった。

「シャルル? なんで鍵かけ……て……」「……」

「……………」

「　」

「　」

「　」

さて、考えてみよう。

一夏はシャルルを男だと思つてゐる。  
そして己はシャルルに馬乗りになり、ジャージのジッパーを下ろして  
いる。

一夏からは、ジャージの下のコルセットまでは見えまい。ところが  
見えてもそれを気にする余裕はあるまい。

この状況を見て、一夏はどう考えるか。

いや、どう考えても己がシャルルを襲つてゐるよりしか見  
えないだろ？

なんたることか。

こういふのは一夏の役割のはずだ、なぜ己が。  
おい一夏、いつまで呆けていろつもりだ、せつと壁を閉めろ、誰  
かに見られたらどうする。  
シャルル、なにを黙つてゐる、なにか言え、なんでもいいから。己  
は話すのは苦手なんだ、別に混乱のあまり言葉が出ないわけではな  
い。

「……………」  
「　」  
「　」  
「　」

無言のまま胸中に疑問を浮かべつつ、己はいかがりする」となる  
だらう証明に想ひを馳せた。

この状況、いかにすれば切り抜けられるのやう。

## 第15話 不穏（後書き）

サブタイトルほど不穏じゃなかつたですね……。

そして一夏の十八番を奪う真改。

次回、真改さんはこの窮地からどう（言い）逃れるのか！？

## 第1-6話 少女の事情／少女の想い（前書き）

シャルの身の上話。

結構ヘヴィな話ですが、あんな過去があるのにあの性格って、かなり凄いことなんじゃないかと思います。

## 第1-6話 少女の事情／少女の想い

「あれ、シン。今日は訓練しないのか?」  
「……急用……」

そう言つてすたすたと去つて行くシン。  
なんだよ、せつかくシャルルの引っ越しの手伝いを断つてまで来た  
の?」。

「篠、シンの用つて知つてるか?」  
「いや、私はなにも聞いてないな」  
「鈴は?」  
「あたしも知らないわよ。……で、シンにだつて用事へらい  
あるでしょ」  
「まあ、それはそなんだけど」  
「確かに気になりますが、今は訓練に集中しましょ。……もうあ  
んな無様は晒しませんわ」

さすがに午前のあれは應えたらし。

まあ専用機持ち一人掛けかりで訓練機に瞬殺されたら、そりや代表候  
補生としてのプライドが傷付くだろ?。

「まつたくよ。あたしまで巻き込まないでよね  
「……なにやらわたくしのせいで負けたかのよつた言ひ草ですわね  
?」  
「その通りでしょ。うが」  
「ふ、ふふふ……どうやら鈴さんには、どうが上か体に教え  
てさしあげる必要があるようですね」  
「じゃあお言葉に甘えて教えてもらおうかしら  
あたしの方が

強いつて

バチバチと火花を散らし始める一人。なんでこつも仲が悪いんだ？

「しばらく終わりそうもないな。……し、仕方ない。一人で訓練するぞ、一夏」

「え？あ、ああ、そうだな、アリーナ使える時間は限られてるしな」

セシリ亞と鈴は模擬戦を始めてしまったので、簫の提案に乗ることにした。

「ん？簫の顔が少し赤いな。

風邪か？体調が悪いなら無理しない方がいいぞ？」

「い、いや、体は大丈夫だ。なにも問題はない」

「そうか？じゃあ、始めるか」

「うむ。では、参る！」

「行くぜ！」

「ちよおおおつと待つたああああつー！」

「ちよおおおつと待つたああああつー！」

俺と簫が打ち合いを始める寸前、さつきまで激戦を繰り広げていた二人が同時にすつ飛んで来た。

どうした、もう勝負が付いたのか？引き分けか？

「一夏っ！アンタなにやつてんのよ！」

「え？いや、二人とも模擬戦始めたから、俺は簫とやひつと

「簫さん！抜け駆けは許しませんわよ！」「

「な、お前たちが勝手に戦い始めたんだろ？！」

「問答無用つ！－」

「ええい、面倒だ！一人まとめて斬るつ！」

篇が参戦し、一人取り残される俺。  
え？なに、この状況？

「一夏あつー何を呆けているつー手を貸せー！」  
「ええつー？」

「何言つてんのよー一夏、手伝いなさいー」  
「抜け駆けは許さない」と言いましたわー一夏さん、わたくしどつー。  
「どうしきつてんだよー？」

事態は混迷を極めていて、解決の糸口すら掴めない。  
なんでこいつなるんだよ、まつたく、ああ、ひついつ時

「シンがいればなあ……」

ギシリ。

急に動きを止める三人。  
しかし戦いは終わつたと言つのこ、闘志だけはどんどん膨れ上がつ  
ている。

「……真改は私を応援してくれていいとこつのに……」

「……バカ一夏、シンの氣も知らずに……」

「……いくら真改さんでも、これだけは……」

な、なんだ？何を言つてゐるんだ？声が小さくてよく聞こえないぞ？

「おのれ、一夏ああああつー。」  
「ああもう、頭来た！」「  
「わたくしだつてえええつー。」

「うおおおおおつー！な、なんだいきなりー！？」

「「「うるわああああいつー！」」」

「あやああああー！？」

三人掛かりとか、ふざけんな！勝負どいろか訓練にもならんわ！  
しかしそんな思いは届かない。

結局、俺は数分と保たずに襤褸雜巾にされ、今日の訓練は終わった。

「うへ、疲れた……」

実際に俺が訓練したのは普段の十分の一にも満たない時間だつたと言つのに、体にのしかかる疲労は数倍である。  
ちなみに俺をボコボコにした三人は、そのまま俺を放つて帰つてしまつた。

……友情って、何だろ？

「……よひやく着いた」

廊下が凄まじく長く感じたが、どうにか部屋に着いた。

今日はもうダメだ、シャワー浴びて飯食つて、さつと寝よう。

そう考えながらノブを回すが

「あれ？ 鍵かかってる」

シャルルが部屋で荷物整理しているハズなんだが。

なんだ、飯にでも行つたか?いや、もしかしたら転入したことで先生から呼び出されたのかも。IIS学園はやたら手続きが多いからなあ。

鍵を取り出して開け、再びドアを回す。すると扉の隙間から、かすかに声が聞こえて来た。

「シャルル? なんで鍵かけ  
て  
」

部屋に入ると、床に仰向けになつてゐるルームメイトと、それに馬乗りになつてゐる幼なじみの姿が。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

え？

なに？どうした？なにがあつた？

部屋の扉を確認する。1025号室。うん、間違いない、俺の部屋

シャルルがいるのは問題ない。ここはシャルルの部屋でもあるからな。

けどなんでシンがいるんだ?急用があるんじゃなかつたのか?

ハツ！？ま、まさか！？

「シンってそういう趣味だったのか……？」

「…………」

シンにとつても驚きの事態だったのか、無表情のまま硬直していたが、俺が疑問の声をあげるとどうにか動き出した。

シンは溜め息をつき、首を振つて立ち上がる。

……なんか呆れてないか？

「……なんだこれ？…どういう状況だよ？何があつたんだ？」

「…………」

とりあえずこのままだと非常こまちこになる気がしたので、部屋に入つて扉を閉める。

するとシンは無言のまま、まだ床の上で固まつているシャルルのジヤージ（なぜかファスナーが下ろされている）の襟を掴み、強引に引っ張つて立ち上がらせた。

「あやあー！」

「おこシンーなこす…… ややあ？」

なんか今女の子の悲鳴が聞こえたぞ。

誰だ？

シン……は、有り得ないな、うん。

けどあとは俺とシャルルしかここにいなし

と、そこで。

大きく開いたシャルルのジヤージの下に、胸を覆つよつになにかが

着けられている」とに気が付いた。

「……なにそれ」

「え?……ええっと……」

「……」

するとシンは鋭い目をさらに鋭くしてシャルルを睨む。

「……話すと言った……」

「え?け、けど、一夏には

「……」

「う……わかった、話すよ……」

二人の間になにがあつたのかはわからないが、とりあえずシャルルはシンの眼力に負けたようだった。

「あ、あのね、一夏」

「な、なんだ?」

意を決したように、けどどこかためらつがちに、もじもじしながらシャルルが話し出す。

「う、なんか可愛い。シャルルは中性的な顔だからな、男とわかつても

「実は僕……女、なんだ」

「へえ」

「……」

「……」

「……へえあー?今なんつった!?」

あまりに予想外過ぎる言葉に反応が遅れ、しかも変な声が出た。  
お、女？誰が？え？シャルルが？

「え？マジで？本当に？」

「うん……本当だよ」

「……」

混乱から立ち直れない。  
だって突然すぎる。

今日転校してきたクラスメイトが世界で一人目の男のIS操縦者で、  
ようやくできたIS学園での同性の仲間で、けど本当は女の子で  
「……なんで、男のフリを？」

そう、それだ。まずは、それを聞かないと。

「……実家の方から、そうしろって言われたんだ」「  
実家……ていうと、デュノア社か？」  
「そつ。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」「  
……」

命令。

その言葉が出た瞬間、シンの気配が鋭くなつた。  
顔は相変わらずの無表情だが、明らかに怒っている。

「命令つて……親だろう？なんでそんな  
「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

愛人の、子。

それが何を意味するのか、いくら俺でもわかる。

「一年前にお母さんが亡くなって、父に引き取られたんだ。」

お母さん。

父親を呼ぶ時とはまるで違う、愛情と、尊敬に満ちた声。

それを向ける相手が死んでしまった時、どれほど悲しみがあったのだろう。

「それで色々検査したら、ES適応が高いことがわかつて、非公式だけどテュノア社のテストパイロットをやることになったんだ」

この時点すでにおかしい。

検査？母親を失ったばかりの、実の娘に？それで適性があつたから、自分の会社のテストパイロットにしたって？

「父に会つたのは一回くらい。最初に引き取られた時と、一度だけ本邸に呼ばれた時。あ、普段は別邸で生活してるんだ」

「一回？一年間で？仕事が忙しいからとかじゃなく、普段は違う家に住んでるからだって？」

「それでその時、本妻の人に殴られちゃってさ。『泥棒猫の娘が！』ってね。びっくりしたよ。お母さんは僕の父親のことなにも教えてくれてなかつたから、もづなにがなにやら」

あはは、と愛想笑いをするシャルル。

やめてくれ。頼むから、そんな顔をしないでくれ。

「それから少し経つて、テュノア社は経営危機に陥つたの

「……第三世代型ＩＳの開発が、上手くいってないんだっけか」

「あれ、よく知ってるね？」

「……勉強、してるからな」

敵を知り、己を知れば、百戦危つからず。

知識は力なり、だ。

「けどそれがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。世界でただ一人のＩＳを動かせる男と接触するには、同じ男の方が都合がいいからさ」

「それは、つまり」

「そう。一夏と、一夏の専用機のデータを盗んでくる」と。

それが、あの人人が僕に命令したことだよ」

つまりはこうこうとか。

会社の経営が上手くいかないから、たまたまＩＳ適性が高かつた愛人との子に犯罪行為をさせて、起死回生の一手中にしよう、と。

親である以前に、人として腐つてやがる。

「とまあ、こんなところかな。どうある? 井上さん。学園に報告するの?」

「な、おレシン、どうこうじだよー! ?」

「……」

わざわざから微動だにしないシンを問い合わせる。

学園に報告? なんでだよ、シャルルはなにも悪くないだろ? が!

「井上さんは、一夏を心配してたんだよ。なにせ一夏には世界中が注目してるからね。男装してまでルームメイトになつた僕が、良く

なことを探してゐるんじゃないかって

「……」

肯定はしないが、否定もしない。シンはいつものように、ただ黙つてそこにいた。

「それにどうちしたって、こんな無茶がバレるのは時間の問題だよ。まあそくなつたら、フランス政府も黙つてないだらうね。デュノア社は潰れるか、良くて他企業の傘下に入るか。僕は……牢屋かな」

まだ十五歳の女の子が、そんな風に人生を諦めていることが、俺には我慢ならなかつた。

だから、腹の底から湧き出でてくる言葉を飲み込むつもりなんて、有りはしない。

「ふざけるな

「……え？」

「ふざけんじやねえ。何納得してゐみたいな顔してゐんだよ、シャルル

「い、一夏……？」

俺は今、怒つてゐる。

シャルルの父親に対してももちろん、今はその父親に抗あつてしまいシャルルにも、腹が立つてゐた。

「親に道具扱いされて、無茶なこと命令されて、挙げ句バレたから牢屋行きだ？

そんな馬鹿な話があつてたまるか。納得なんか出来るかよ。出来るわけねえだろうが

「納得出来る出来ないじゃないよ。僕には選ぶ権利がない。

仕方がないよ」

「ふざけんなつ……」

思わず声を荒げてしまう。

俺の怒りは、もはや完全に臨界点を超えていた。

「仕方がない？ 仕方がないだって？ そんなわけあるか、お前はまだ、何もしてないだろ？ が！」

「な……」

「嫌だつたんだろ？ 男のフリするのも、犯罪紛いのことするのも、父親に従うのも！ なら抗えよ！ 抵抗しろよ！ 悪足搔きしろよ！ なにもしないでただ言われるままにして、それで仕方がないなんて口にするなつ！！」

感情の爆発に任せて言葉を吐き出す。

俺の剣幕に気圧されて、シャルルが怯えていた。

けれど、止まらない。止まるつもりもない。

「だ、だつて……僕には、じつすることも……」「

「出来なかつたって？ それ、本当に何も出来なかつたのかよ。やらなかつただけじゃないのか？」

震えながら言葉を紡ぐシャルルに、容赦なく辛辣な言葉を浴びせる。

「なにも出来ないと、なにもしないのは違つだろ。力の有る無しとか、相手がどうとかは関係ない。やる前から諦めるのは、心が弱いからだ」

シャルルは俯いてしまった。

責められるのが怖いのか、それとも苦しいのか、俺と田を合わせようとしてない。

それじゃあ、ダメなんだよ。

「シャルルが言つてることは、全部言い訳だ。お前は、最初から最後まで、諦めてるだけじゃないか」

戦うのは怖い。相手が強大なら尚更だ。

それは俺だって変わらないし、きっと、シンもそうだろう。

傷付くのが嫌なら、逃げてしまつのも構わないのかも知れない。

「世の中には出来ることと出来ないことがあるなんて知ったようなことを言うヤツは、どいつもこいつも負け犬だ。そんな連中より、不可能だって周りから馬鹿にされながらも、最期まで信じて挑み続けて死んだ人のほうが、よっぽど格好いいぜ」

だけど、逃げてもなにも解決しない。

得られる平穏は仮初めで、自分の心には消えることのない後悔が残る。

お前はそんなものを背負い続けて、この先生きてくつもりかよ、シリル。

「抗えよ、抵抗しろよ、悪足掻きしろよ。なにも変わらないかも知れない。けどこのまま行つても、最悪の結果しかないんだろ。だったら、自分の最期くらい自分で決める」

何も変わらないかも知れない。  
けど、何かが変えられるかも知れない。

なら、どうせなら、何かやつてみた方がいい。

勝てるとは、限らないけれど。

前に向かない者に、勝利などないのだから。

「……のせ……」

そして、シャルルの震えが変わった。  
怯えから、怒りに。

「なにが分かるのせ」

俯いていた顔を上げ、キッと俺を睨みつける。

「一夏になにが分かるのさ！！なにも知らないクセに、好き勝手言  
わないでよ！！お母さんが死んじゃって、他に親戚もいなくて、顔  
も名前も知らない父親に引き取られて！！抗えとか簡単に言うけど、  
父は大会社の社長なんだよ！？僕みたいな小娘一人に、勝てる相手  
じゃないんだつ！！」

喉が張り裂けんばかりの大声で怒鳴るシャルル。

俺にはそれが、悲鳴に聞こえた。

「なにもしなかっただけだつて？そうだよ、その通りだよ、僕はた  
だ諦めただけだよッ！！

僕は一夏みたいに、「強く」ないんだつ！！

言い終えて、肩で息をするシャルル。

……やつと、本音を言ったな。

「……だったら、助けを呼べばいい」

「……え？」

「弱いから戦えないっていうなら、一人じゃなにも出来ないっていうなら、誰かに助けを求めるべき。これは受け売りだけどな、『言葉は人類最高の発明』なんだよ」

チラリと、それを俺に言った幼なじみを見る。  
まったく、どの口でそんなことを言つんだか。

「言葉にすればなんでも伝わるわけじゃない。けど言葉にするだけで伝わることもいっぱいある。だからさ、自分じゃどうしようもないなら、「助けて」って言えばいいんだよ」

俺の言葉をポカンと聞いていたシャルルだが、またすぐに俯いてしまった。

「……けど、僕の言葉を聞いてくれる人なんて……」

「いるだろ。少なくとも、目の前に一人

「え？」

「……」

またポカンとするシャルルに、ニヤリと笑つて見せる。  
できるだけ、頬もしく見えるように。

「俺は、シャルルの言葉を聞くよ。シンもな。そりゃあ、全部に応えられるわけじゃないけどさ」

「……はあ……」

「む、なんだよシン、溜め息なんかついて

「……」

また黙つた。お前がそんなど、俺の言葉に説得力が出ないじゃな

いか。

「僕の言葉を……聞いて、くれるの……？」

不安げに俺に尋ねるシャルル。

一体どれほど拒絶されて来たのか、彼女は他人を頼ることを恐れるようになってしまったのだろう。

その心の傷の痛みは、俺なんかにはわからぬ。

「ああ、ちゃんと聞くよ。俺は頭悪いから、理解できないこともあらかもしないけど」

「一夏……」

「だから、言つてみるよ、シャルル。お前はどうしたいんだ？ 諦めちまつていいのか？」そのまま終わつちまつてもいいのか？」

だけど、一人で出来ないのなら、誰かが助けてやればいい。  
誰かを頼ることも知らないで苦しんでいる人の、声なき叫びが聞こえたのなら、こちから手を差し伸べればいい。

言葉にしなくても伝わる」とも、確かにあるのだから。

「……嫌だ」

「……」

「……嫌だよ……」

「……」

「諦めたく、ないよ」

「……」

「まだやりたいこと、いっぱいあるよ。やつてないこと、いっぱいあるよ。なのにこんな風に終わるだなんて、そんなの嫌だよ……」

「……」

「……」

「……助けて」

「ああ」

「……助けてよ、一夏あ……！」

「任せろ。……絶対に、助けてやる」

「……うん……！」

ついに泣き出してしまったシャルルを、そつと抱きしめる。女の子を抱きしめるのはかなり緊張するが、シンが子供たちを慰めるところよくやつてたので真似してみた。

「良く言えたな。……誰かに助けを求めるのだって、立派な抵抗だと思ひせざ」

「……ありがと、一夏」

そうして俺は、シャルルが泣き止むまで、彼女を抱きしめていた。

「けど、実際どうするの？」

「それなんだけどな、実は明確にどうすればいいかわかつてるわけじゃないんだ」

「うん、まあ、それはそうだろうね」

「……」

なにやら呆れたような顔をするシャルル。失敬な、別になにも考え

てなかつたわけじゃないぞ。

「けど、I.IJにいればしばらくなは大丈夫なはずだ」

「え?」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

「……つまり、卒業するまでは、僕のことは学園が守ってくれること？」

「セーラー服のこと。……啖呵切つとして他人任せつてのも、情けない話だけどな」

「そんなことないよ。自分じゃどうしようもないなら誰かに助けを求めればいい、それだって立派な抵抗だつて、一夏が言ってくれたんじやないか」

柔らかく笑いながら言つシャルル。

……なんか、あれだな、男の割に妙に可愛いと思つてたけど、女の子つてわかるとさうに可愛く見えるな。

「けど良く覚えてたね？特記事項なんて、五十五個もあるのに」「言つたら、勉強してるつて」

知識は力なり。

その言葉の正しさを、改めて実感した。

「あと二年弱は、デュノア社もフランス政府も、シャルルには手を出せない。それだけ有れば、なにかいい方法が見付かるぞ」

「楽観的だね、一夏」

「悲観的になつてなにもしないよりはマシだろ」

「…………うん。そうだね」

後ろ向きになつて、逃げるのは構わない。  
だが前を向かない者に、勝利などない。

今のシャルルは、確かに前を向いている。

「仕方なくなんかない。仕方なら、いくらでもある。ただ見つか  
なかつたり、田を背けていたりしてゐるだけさ」

「……うん。一緒に、探してくれる?」

「ああ。手伝うよ」

「……ありがとう、一夏」

話はついた。三年という時間が十分なのか不足なのかはわからない  
が、とにかくタイムリミットが決まつたわけだ。

いつ時間切れになるかわからないような状況より何十倍もマシだ。

それまでに、シャルルを助ける方法を見つけ出す。

そしてそのための人手は、多い方がいい。

「シン」

「……」

ただ黙つてシャルルの話を聞いていた親友。

相変わらずなにを考えているのかわからない無表情だが、俺はコイ  
ツが結構義に厚いヤツだと知つている。

シャルルの境遇については、それなり以上に怒りを感じているはず  
だ。

「俺はシャルルを助けたい。手を貸してくれ、シン」

「……」

「お願ひします、井上さん」

「……」

俺とシャルル、両方を見てから、シンは真っ直ぐにシャルルの眼を見て、右手を差し出した。

「……井上真改……」

その女の子らしさが全く残っていない、鉄のような右手を、シャルルは感動したような面持ちで、しつかりと握った。

「シャルロット」

シンの眼を真っ直ぐに見返す。

その瞳には、さつきまでの諦観や絶望はない。代わりにあるのは、自分の未来を勝ち取るために戦つといへ、強い意志だった。

「シャルロット・デュノア。それが、お母さんがくれた、僕の本当の名前」

そつまつて浮かべた笑顔は、まるで天使のようだった。

「改めてよろしくな、シャルロット」

「ひいらじょろしく、一夏。けど僕のことはシャルルのままでいいよ。まだ他のみんなには、僕のことはバレてないんだから」「あー、確かに、つっかりシャルロットって呼んだらまずいよな……。けど本当の名前があるのに、偽名を呼ぶのもなあ

れて、どうしたもんか……。

「シン、なにかい」アイテアは　　」

「マテ、いまなんかビビリと来たわ。

そつだ、真改をシンひて呼ぶなら、シャルロットは

「……シャル

「え？」

「シャルつて呼ぶのははどうだ？」「れなら不自然じゃないし、俺も呼  
びやすいし」

「……うん、いいね！それで行こう。」

なにやら凄く嬉しそうにする、シャルロット改めシャル。  
なんだ？名前を略して渾名にするくらい日本じゃ普通だけど、フラン  
スじやそういうことしないのか？

「……愚鈍……」

「ひねおいー？なんかすげえセリフ聞こえたぞ今！？」

「……」

「ぐ、たまに口開いたと思えばグサリとへる」とばつか言いやがつ  
て……」

「……ふ、ふふふ、あはははー。」

突然シャルが腹を抱えて笑いだした。

なんだかじつした、俺の心が傷付く様はそんなに面白いか。

「一人とも、ほんとに仲がいいんだね」

「うん？まあ、付き合い長いしな」

「……」

「幼なじみなんだよね？どれくらい経つの？」

「あー、もう十年くらいか。考えてみると本当に長い付き合いだな」

「…………」

「へえ。それなら、仲の良さも納得だね」

うん、とひとつ頷いて、シャルはシンの方を向いた。

「ねえ、井上さん。僕も井上さんのこと、シンって呼んでもいい?」「…………」

おお?突然どうした。

「井上さんがいなかつたら、僕はまだ一夏を騙し続けていたと思う。もしかしたら、取り返しのつかないところまで行つてたかも知れない」

「けど井上さんのおかげで、僕はちゃんと、助けてつて言えた」

「一夏も井上さんも僕の恩人だけど、それだけじゃ嫌なんだ。僕は、二人と友達になりたい」

「だから、僕も一夏みたいに、シンって呼びたいんだ。ダメかな?」「…………」

うーん、あんなに遠慮がちだったシャルが、随分と攻めるな。

男子三日会わざれば刮目して見よと言つが、女子は三日目じやがないな。

「…………」「好きに呼べ……」

「…………! ありがとう、シン!」

「…………」

よかつた、二人とも仲良くなれて。最初シンがマウントポジションなんかとつてたから、上手くいかないんじゃないと心配してたけど、これなら大丈夫そうだな。

「……そういやなんであんなことになつてたんだ?」

「?あんなことつて?」

「いや、俺が部屋入つたとき、シャルにシンが馬乗りになつてたじやん」

「ああ、あれは……」

言いかけて、途端に赤くなるシャル。  
え?なに?マジでなにがあつたの?

「し、シンって、意外と強引なんだね……」

「……!?

なんだ?今度はシンが狼狽えだしたぞ?

「思いだしたら、恥ずかしくなつてきちゃつたよ……」

「……」

確かに、シャルが本当は女の子だつたことを考へると、あのジャージの前が半分以上開いていた格好は、いくら「ルセット着けてたと言つても恥ずかしいだろ?」。

「……シン、なにしたんだよ」

「……確認……」

「いや、それじゃわからんねえって。もつと具体的に」

「……」

「……シャル？」

「シンつたら、部屋に入つて来るなりいきなり僕のこと押し倒して、馬乗りになつて、ジャージのファスナー開けたんだよ」

「……え」

そ、それは……なんて大胆な……

「なんでそんなことを」

「確實……」

「いや、そりややうだらうかどれ」

「僕が本当に男の子だつたらどうしてたの？」

「……」

「……考へてなかつたの？」

「……確信……」

「だつたら確認する必要ないじやん」

「……念のため……」

「つまりちょっとくらいま、間違つてるかもしけないって思つてた

「んだよね？」

「……」

俺とシャルの波状攻撃により追い詰められていくシン。

俺にはわかる。その無表情の下では、かなり焦つているだろう。

「……話は終わつた……」

「いや、終わつてないから」

「せつかくだからさ、もつと色々聞かせてよ

「……」

かなり強引に話を切り上げて逃げようとするシンを捕まえる。いつもやられてばっかりだからな、たまにはじつちがからかつてや

らなくちや、釣り合ひがそれないつてもんだ。

そうして、俺とシャルコによるシンビージリは、無言のままキレたシン  
が俺に飛び膝蹴り（シャイニング・ウェイザード）を呑き込むまで続い  
た。

……なぜ俺だけ。まあ、シャルが楽しそうだったから、いいけどさ。

## 第1-6話 少女の事情／少女の想い（後書き）

Q：話すのが苦手な真改がどう言い訳するの？

A：肉体言語

サブタイトルについてですが、今回は真改視点が一回も入らないので、二文字ではありません。

二文字のサブタイトルが思い付かなくなるまで、このスタンスでいく予定です。

## 第17話 黒兎（前書き）

シャルの性別バレイベントも終え、次はラウラのターンです。真改という強力な護衛がいる状態で、どう一夏や仲間たちに仕掛け  
るか……やばい、思い付かない。

## 第17話 黒兎

「おはよー、シン」

やわ……

教室が静かに震撼した。

シャルの身の上話を聞き、協力を約束した翌朝のことである。

「い、い、今、デコノア君……」

「井上さんのこと……シンって呼んだよね……？」

「どうこうことなの……」

「……」

迂闊。この事態は、予測して然るべきであった。

シャルが転校して来たのは昨日のこと。その翌日には運営で呼ばれるなど、何かあったと思わないほうがどうかしている。

「へーどうしたの？ シン」

「……」

「ま、またシンって呼んだ……」

「聞き間違いじゃないよね……」

「何があったの……！？」

「ねー、このままでは……おこ一夏、助けてくれ、昨日蹴ったことは謝るから、どうにか誤魔化してくれ。」

「おはよー、シン。早くシャルと仲良くなってるな」

「……！」

よし分かつた、お前は「己」の敵だ。次があれば「己」の真改、容赦せん。

「 も、もつもく……？」

「 ヤツてる……！？」

「 ゾわ……ゾワゾワ……」

待て、今発音がおかしい奴が一人いたぞ。

「 えーっと……」

教室内の様子がおかしいことにシャルも気が付いたようだ。

「 き、昨日はありがと、相談に乗ってくれて。やっぱり知らない土地は不安だったから、友達になつてくれて嬉しいよ」

「 ……」

「 な、なんだ、そんなことか……」

「 ああ、私も行けばよかつたかなあ……」

ふう、どうにか切り抜けたか。気が利くな、シャルは。一夏とは大違いだ、一夏とは。

「 な、なんだよ」

「 ……」

非難の目を向ける「己」に怯んだのか、一夏が一步退かる。ふん、まあいい。だが覚えておけよ。

「 ちょっと、デュノアさん？」

「はい？」

……しまった、まだセシリアがいた。

「どうぞうじとですの？ 真改さんと、随分親しきよつですが」

「え？ だから、昨日相談に……」

「ええ、それはわかつていますわ。わたくしが言つてこるのは、真改さんの呼び方についてです」

……そういうえばセシリアは、鈴の「じ」とは鈴と呼ぶが、「の」の「じ」とは真改と呼ぶな。

「ええっと、一夏がシンツて呼んでるのを聞いて、僕も友達になりたいからシンツて呼んでもいいかって聞いたら、好きに呼べって……」

「な……」

なにやらジジックを受けているセシリア。意味がわからん。

「そ、そんな……幼なじみだけに許されてるのではあつませんの

……？」

誰もそんなこと言ひていこない。

「し、真改さんつー」

「……」

「わ、わたくしも……やつ呼んで、よろしくね。」

「……」

別に許可のこころではないと思つただが。一夏など初めて会つた次の日にはシンと呼んでいたしな。

「……好きに呼べ……」「……一夏、それでは……」

「ホンとひとつ咳払いをするセシリア。なぜそこまで緊張してこるのか。

「…………」「…………」「…………シン」「…………」

ガララ

「席に着け。SHRを始めねや」

絶妙なタイミングで千冬さんが教室に入つてくる。中断されたセシリアは口を開けた状態で固まっていた。

「オルコット。さつわと席に着け」

「…………はー…………」

とぼとぼと席に戻つていぐ。

千冬さんはその様子を訝しげに眺めてから、いつも通りの様子で話し始めた。

「今日の連絡事項を伝える。まずは

まあ、今回は邪魔が入つたが、次の機会はすぐに来るだろ?」

そうして、また一日が始まるのであった。

そして四日後。

結局、今もまだセシリアは己を真改と呼んでいる。何故だ。一度機を逸して恥ずかしくなったのか？

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そつなのか？一応わかっているつもりだつたんだが……」

今日は土曜日であり、午前は授業があるが、午後は自由時間になつてている。

しかし午後は全てのアリーナが開放されるため、ほとんどの生徒が実習に使う。かく言う僕たちも訓練に来ており、今はシャルとの模擬戦を終えた一夏が問題点の指摘を受けている。

「うーん、知識として知つてゐるだけって感じかな。さつき僕と戦つたときもほとんど間合いを詰められなかつたよね？」

「うつ……、確かに。瞬時加速も読まれてたしな……」

「一夏のEISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ。特に一夏の瞬時加速つて直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃出来ちゃつからね

「直線的か……うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折したりするからね」

「……なるほど」

シャルの説明に頷く一夏。

ようやく教え上手な訓練相手を得て、いつも以上にやる気を見せていく。

ちなみに、篠、鈴、セシリアの説明は

『いへ、すばーっとしゃってから、がきんつーどかんつー』という感じだ

『なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ感覺。……はあ？ なんでわからぬいのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

ひどいものである。

ちなみに己は言葉による説明はしていない。ただ只管打ち合つのみだ。

だ。

「ナビシンもほとんど射撃武器使わないのに、やたらと上手く避けれるよな」

「確かにそうだよね。月影も数撃でばらたるつて感じの武器だし、かなり近付かないと撃たないし」

「……なるほど」

まあ昔はマシンガンを使っていたが。

しかしその頃から、射撃は決して上手くなかった。回避技術に関しては特性を把握しているというより、「撃たれた」経験からくるも

のが大きい。

そしてネクストとIRSの相違点の中で、IRSにとって特に重要な要素がひとつある。

「……筋肉……」  
「「は？」」「……体より、先に動く……」「……えーっと、つまり……」「筋肉の動きから、行動を先読みしてること……？」「……」

そう、パイロットが分厚い物理装甲に包まれているネクストと違い、IRSの防御力は殆どが皮膜装甲(スキンバリアー)によるものだ。  
全身装甲もあるが数は少なく、大部分のIRSは胴や頭部が露わになつていて。

そしてパワードスーツであるIRSの動きは操縦者のそれと連動しているので、筋肉の動きから大体の狙いはわかるといつわけだ。

ちなみにこの技術は、昔は護衛を務めることも多かったことから身に付いたものである。

IRSと違い、ネクストは緊急時に咄嗟に展開するよつた真似はできない。  
故に、リンクスを殺すのならば生身の時を狙え、というのが常識だつたのだ。

自然、生身での技術も磨かれる。

「……やつぱとんでもねえな、シンは」「うん……。僕もそれはどうかと思つよ」「……」

失敬な。こんなものは人間が本来持つてゐる機能を最大限使い切つてゐるだけだ。

それよりも、一の鍛錬で十を身に付ける一夏のよくな「天才」の方が、己からすればとんでもない。

「……ま、まあ、とにかく続けようか。射撃武器の特性を把握するには、実際に使ってみるのが一番だよ。はい、これ」

そう言ってシャルは一夏に、五五口径アサルトライフル「ヴェント」を渡す。

「一夏と白式アンロジックを使用許諾したから、使えるはずだよ。試しに撃つてみて」

「おう。……こつか？」

「えっと……脇を締めて、それともう少し」

初めて持つ銃器に四苦八苦している一夏に、シャルが丁寧に教えている。

その様子を眺めている己に、セシリ亞が話し掛けた來た。

「シ、シン……カイ、さん」

「……」

だから何故そんなに恥ずかしがつてゐる。

「デュノアさんと、仲がよろじいですのね」

「……」

確かに仲は良いだろ？

シャルは自分の正体を知っているからか一夏と口には心を許しているようだし、己もシャルには好感を持っている。

シャルの身の上話を聞いた時も、彼女が自分で考え選択することを放棄している「人形」であれば別にどうとも思わなかつたが、彼女は確かに意志を持ち、そして「助けて」と口にした。

一夏の言つ通り、それは抵抗の第一歩だ。決して「人形」のするこ

とではない。

「そうそう、アンタもう噂になつてゐるわよ、シン。転校生のシャルル・デュノアは、あの井上真改にじつ執心だつて」

「あの」とはなんだ。そこまで話題になるよつなことをしたつもりはないぞ。

「デュノアは相談を聞いてもらつたと言つていたな。本当か？正直、私にはお前が聞き上手とは思えないんだが」

確かに己は聞き上手ではない。ただ黙つてゐるだけで、上手く相槌を打つたり先を促したりが出来ないからな。

「……やはり、それだけではなかつたんだな？」

「まあ、シンは嘘は吐かないけど、ほんとのことを言わない」とはあるもんね

「真改さん……なにがありましたの？」

「……」

いくら聞かれても話すつもりはない。

それを態度で示すべく黙秘を続ける己を見て、鈴がニヤリと笑つた。  
なんだ、その不吉な笑みは。

「シンひてさあ、デュノアみたいなヤツが好みなの?」

「……」

案の定といふか、予想通りといふか。

とにかく鈴の台詞は想定内のものだったので、無言を貫く。

「な! なななななあ」

しかしそシリ亞が狼狽えた。成る程、鈴の狙いはこちらか。

「なんていいうの? 可愛い系? しつかり者の弟みたいな? シン、弟い  
つぱいいるもんねえ。やっぱ母性本能くすぐる子が好きなの?」

「なななな何をおっしゃってますの鈴さん! ?」

「そうよねえ、シンも女の子だもんねえ。好きな男の子のタイプく  
らいあるわよねえ」

「しししし真改さん! ? どうなんですか! ?」

「……」

己への直接攻撃は効果が無いとわかつていたのだろう。鈴はセシリ  
アを中継に使い、間接攻撃を行つて來た。

あれれ、小癪な。

「もしかしてデュノアさんも真改さんのことを……一? ああ、わた  
くしへどうすれば……! !」

「……何もしなくていいんじゃないか?」

竇の的確な助言も耳に入つてゐる様子はない。  
セシリ亞の混乱はまだまだ続きそうだった。

の、だが。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソつ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

アリーナの入り口。

そこにいたのは、黒い装甲に身を包んだ銀髪の少女。

彼女のことばは如月重工に調べてもらつた。

ドイツが所持する十機のIISの内、三機を配備された、ドイツ軍最強の特殊部隊シュヴァルツェア・ハーゼ、通称「黒魔隊」隊長

ラウラ・ボーデヴィッヒ。

「おい」

ラウラが開放回線で声を出す。

その対象は、言うまでもなく一夏だつた。

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそつだな。ならば話が早い。私と戦え」

ラウラの言葉に、一夏が呆れたような顔をする。

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様にはなくても、私はある」

ラウラの言つ理由とは、恐らくは一夏が誘拐された時のことだらう。第一回モンド・グロッソ決勝戦当日に起きたその事件のせいだ、優勝確定とまで言っていた千冬さんは決勝を放棄、一夏の救出に向かつた。

彼女の不戦敗は世界を大きく揺るがせたが、しかし誘拐事件のことは伏せられたため、原因不明の決勝辞退ということになつてゐる。

だが、モンド・グロッソ開催国であつたドイツは全てを知つてゐる。なにしろ一夏誘拐の折、一夏が捕らわれている場所の情報を掴み、千冬さんに伝えたのがドイツ軍なのだから。

その借りを返すためか、千冬さんはドイツ軍で一年ほど教官をしていた。

ラウラとはその頃に知り合つたのだろう。そしてラウラは千冬さんに憧れ、尊敬し、その経歷に傷が付いた要因である一夏を憎むよつになつた

概ね、こんなところだらう。

「貴様がいなければ、教官が決勝を棄権することもなかつた」

しかし、ラウラは気付いていない。

あの事件により一夏を憎んでいる者はラウラだけではない。

誰より一夏自身が、一夏のことを憎んでいる。

「貴様さえいなければ、教官が大会一連覇の偉業をなしえただらうことは容易に想像できる」

「…………」

負けん気の強い一夏が言い返すこともせずに黙つている」を一体どう勘違いしているのか、ラウラは言葉を続ける。

「貴様さえいなれば、教官は現役を引退する」ともなく、今も世界最強の座に在り続けただろう」

「…………

一夏はラウラと皿を合わせず、ガリガリと頭を搔いている。苛立ちをどうにか抑えようとしているようだが、そろそろ限界だろう。

「貴様さえいなれば、教官は

「黙れ」

その声に。

笄が、鈴が、セシリ亞が、シャルが、そしてラウラまでもが、震え上がつた。

声を発した一夏は彼に似合わぬ無表情で、しかしその眼に底無しの憤怒と憎悪を宿させて、ラウラを睨み付けている。

「外野が知ったようなことほざいてんじゃねえよ。お前に言われるまでもない。あの時、俺は被害者じゃなく、加害者だった」

一夏は結局ほぼ無傷で助けられた。誘拐などされれば心に傷を負いそうなものだが、それは誘拐されたこと自体によるものではなかつた。

一夏自身は、何も失わなかつた。

「わかつてゐる。わかつてゐるんだよ。だからビームに消えてくれ。今は、お前に付き合つ余裕はないんだ」

「……」

今の一夏は危険だ。

実力がどうとかではなく、今戦えば、どちらかが死ぬまで止まらないだろう。

それを、一夏本人も自覚している。

「話は終わりだ。俺はお前とは戦わない」

「……ふん。ならば 戰わざるを得ないよつとしてやるー。」

「ー。」

ラウラが漆黒のEIS「シュヴァルツェア・レーゲン」を戦闘状態に移行させる。

ほぼ同時に、左肩に装着された大型のカノン砲が火を噴いた。

「……」

「オーンツ！

一夏の前に躍り出て、起動した月光の刃で砲弾を切り捨てる。超高熱に焼かれ、音速を遥かに超えていた弾丸はしかし、己に届く前に蒸発した。

「……」

「貴様……」

今の一夏を戦わせるのは本当にまずい。  
我を失い、己や千冬さんの声すら届かなくなる可能性がある。

「シン」

「鎮まれ……」

「…………」

一夏は大きく深呼吸し、右手で顔を隠すように撫でた。そして、数秒。

「……ああ。悪い、心配かけた。もう大丈夫だよ」

そうして再び現れた一夏の顔は、まだ多少固くはあったが、いつも通りと言えるものだった。

「……また貴様か。ふん、そんな変態どもの玩具で私の前に立ちふさがるとはな」「…………」

残念だが、挑発合戦をしようとこいつのなり辞退をせてもひがみ。結果はお前の不戦勝で構わん。

しかしそこで、ラウラは己の左腕を見た。

「……そうか、貴様が……」

「…………」

そう呟いたラウラの眼には、羨望や嫉妬など、様々な感情が複雑に入り乱れていった。

一応己もある事件の関係者であるから、ラウラが己を知つていても不思議ではないが、それだけにしては随分と感情が込められた眼だ。

『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

しばらく睨み合いを続けていたが、アリーナのスピーカーから騒ぎを聞きつけてやってきた担当の教師の声が響く。

「……ふん。今日は引ひつけ」

「……」

己に対し一体何を思つたのか、ラウラはあつさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去つていく。  
正直、助かつた。今の己では、ラウラを相手に勝てるかはわからぬい。

「い……いち、か……？」

「うん？」

先ほどの一夏の様子を思い浮かべているのか、怯えたように篝が声をかける。

「だ、大丈夫か……？」

「……ああ、大丈夫だよ」

そんな篝の様子に、一夏も自分が殺氣を撒き散らしていくことを思い出したようで、声に罪悪感を滲ませながら返事をする。

「……今日はもうあがるか。アリーナももう閉まつちまつこ」

「……そうだな」

「シャル、銃サンキュ。色々と参考になつた

「あ、うん……」

シャルもいつもと違い、返事に快活さがない。セシリ亞も、一夏を見る眼に怯えが混じっている。

鈴だけは、事件後暫くの間の一夏の様子を知っているからか、それほど動搖してはいなかつた。

「あー……じゃあ俺、先にあがるわ。みんな、付き合ってくれてありがとう」

皆の様子の原因が自分であることがわかっているのだらう、一夏は出来るだけ平静を装いながら、アリーナから去つていった。

そして。

「……シン？」

「どういづことですか？」

「一夏の様子、ただ事ではなかつたぞ」

「……」

気になるのは当然だ。あの状態の一夏は、普段とはあまりにかけ離れ過ぎている。

「……あたしが説明するわ」

「……鈴……」

「アンタが自分が関係していることじゃないからって、話したがらないのは分かつてるわよ。けどそれじゃみんな納得しないわ」

「……」

確かに、鈴の言ひことももつともだ。  
ならば、口下手な「よりも鈴が話したほうがよからう。

「……すまん……」

「いいわよ別に。……友達、でしょ」

「…………」

そつ言つてもうえると、助かる。

「凰さんは知つてゐるの？」

「まあね。何度か見たことがあるし」

「被害者ではなく加害者だった……一夏ちゃんは、そつおつしゃつてましたわね？」

「…………どつこいとなんだ？」

「順を追つて説明するわね。第一回モンド・グロッソの決勝戦の」となんだけど、一夏、誘拐されたの」

「な…………！」

「誘拐！？」

「そしてそれを、決勝を放り出して駆け付けた千冬さんが助け出した」

「…………あの決勝辞退の裏に、そんな事情があつたんだね」

「けれど確かにそれなら、詳細が明かされないのも納得ですわ」「ああ。モンド・グロッソ決勝進出者の身内が誘拐され、そのせいで決勝を棄権したなどと知られれば、開催国であるドイツは世界中から責められる」

「…………」

そう、あの事件のことは一般には公開されていない。

ただ千冬さんが決勝を棄権したという事実だけが知られている。

そして、当然　　その時、己がその場に居たことも、知られてはいない。

「けど千冬さんよりも先に、一夏を助けに行つた人がいたの」

「まさか、それって　　？」

「そう、そのままかよ。一夏と一緒にモンド・グロッソの観戦に行

つてたシンが事件に気付いて、すぐに一夏を助けに行つた。……そして、誘拐犯たちと戦つて、左腕を失つた」

「「「……」「」」

己の左腕は、事故で失つたことになつてゐる。  
真相を知つてゐるのはドイツ軍関係者を除けば、織斑姉弟と鈴、そして孤児院の者たちだけだ。

「……一夏がシンの左腕に対してもう思つてるか、知つてるでしょ？」  
「「「……」「」」

クラス代表決定戦の折、堂々と語られた一夏の決意。  
あの時のことは学園内では有名であり、後に転入して来た鈴やシャルもすぐに知ることとなつた。

「今ではあんなだけ、最初はひどかったのよ。……シンのこと、「腕なし女」って言つたヤツに、大怪我させるとこだったんだから」「その時は、己が相手を庇う形で割つて入ることでどうにか止めた。……そもそも、大怪我どころでは済まなかつただろう。

「それからよ、一夏が強くなることにこだわり出したのは。……ボーデヴィッヒが一夏に色々言つてたけど、あんなのは一夏にとつて、言われるまでもないことなのよ」  
「「「……」「」」

最愛の姉の経歷に傷を付け、幼なじみに取り返しのつかない怪我を負わせた。

そんな自分に対する憎悪こそが、一夏の原動力となつてゐる。

そしてリウカラは千冬さんの決勝辞退についてしか触れなかつた。それが、一夏には己の左腕を蔑ろにされたように感じられたのだろう。

鈴が言つたよつて、一夏は己が左腕を失つてから暫くの間、己に悪口を言つた者に對して何度も暴力事件を起こしけ、そのたびに己や鈴、弾に止められていた。

だが最近ではそれも收まり、安心していたのだが、どうやらまだ続いていたようだ。

一夏はまだ子供だ。

それがこれほどまでに強く自らを憎んでいては、心に大きな歪みを抱えることになつてしまつだらう。

しかし。

「だけどまあ、心配しなくても大丈夫でしょ。一夏は頑張つて立ち直ろうとしてるし、その成果も出てるし。以前だつたら、シンが止める間もなく殴りかかつてたわよ。

それに、誰だつて触れて欲しくないことくらいあるでしょ？それをああも遠慮なくつつかれたら、誰だつてキレるわよ。別におかしなことじやないわ。

……だから、心配しなくても大丈夫よ。一夏は、バカで鈍感で唐変木で朴念仁な、みんなが知つてゐるようなヤツだからさ」

「べ、別に心配などしていなー！」

「そ、そりですわ！ わたくしは一夏さんのこと信じていますもの！」

「うん。さつきの一夏は、ちょっと怖かつたけど……誰かのためにあんなに怒れるつてことは、優しい証拠だよね」

「……」

そう、心配はこるまい。一夏はこんなにも、仲間に恵まれてこるのでから。

「ま、あたしが知ってるのはこんなとこりよ。もつと詳しいことが  
知りたければ、シンか、それか千冬さんにでも訊くことね」  
「……いや、十分だ。お前にとつてもいい思い出ではないだひつこ、  
話してくれてありがとう、鈴」  
「ありがとうございます、鈴さん。……一夏さんの決意には、その  
ような事情があつたのですね」  
「わつか……。だから一夏は、あんなに『強』『んだね……』  
「……」

『痛みが人を強くする。傷が人を成長させる。  
大人の役目は、子供が傷付かないように守る』ことじやない。  
傷付いた子供がもう一度立ち上がりれるように、真っ直ぐに歩けるよ  
うに 痛みを、「強さ」と「優しさ」に換えられるように。  
そつと、支えてあげることだよ』

唐沢さんが、千冬さんに語った言葉。

罪を背負い、皿らを罰するように過酷な鍛錬を続ける一夏を見てい  
られず、姉として一夏にしてやれることを見失ってしまった彼女の、  
導となつた言葉。

そして傷付いた子供を支えるのは、同じ子供でもいい筈だ。

子供たちが、支え合つのも、いい筈だ。

「じゃあ、あたしたちもあがりますか」

「そうだな。早く汗を流したい」

「それでは、デュノアさん。わたくしたちほこれで失礼しますわ

「あ、うん。じゃあね、オルコットさん。お疲れ様」

「……」

そうして、己たちも解散する。男のフリをしているシャルだけ男子更衣室に向かい、他は女子更衣室へ。

シャルの背中から寂しそうな雰囲気を感じる。

……いつか、彼女が正体を隠す必要がなくなる」と願つ。

彼女もまた、一夏や己の、仲間なのだかい。

「強さとは戦闘力のことではない。いくら戦闘力が高くとも、それだけでは真に強いとは言えん」

なぜですか。いかなる敵をも打ち倒す力が、強さではないのですか。

「そんなものは強さのひとつにすぎん。本当の強さとはそんなものではないし、答えがひとつといつてもない」

では、教官は？ブリュンヒルデである貴女こそが、世界最強なのではないのですか？

「戦闘力では、そうかもしけん。だが、私よりも強い者はいくらでもいる」

理解できません。

「認めたくないだけだろ？……そうだな、ひとつ話をしてもいい。私よりも強い人間の話をな」

本当に、そのような者が……？

「そいつは年端も行かない少女だった。……ふむ、考えてみれば、お前とも同じ年だな」

そんな子供が、教官よりも強いと？

「ああ。以前から強いとは思っていたが、想像を超えていた。……そいつはその時、瀕死の重傷を負っていた。左腕を失っていて、工房どころか武器もなく、血を流し過ぎて皿もまともに見えてなかつただろう」

そんな状態の者が、強いと？

「ああ、強かった。もっとも、戦闘力という点では話にならん。その時は暮桜を開いていたし、そもそもあいつは放つておけば確実に死ぬ状態だった」

ではなぜ、その者が強いと？

「簡単だ。気圧されたのさ、私が。こいつには絶対に勝てないと、理屈なんぞ完全に無視して、魂に思い知られた」

そんな、教官が……？

「そうだ。無論、そんなものは錯覚だ。事実あいつは、私が敵ではないとわかつた途端に意識を失つたしな」

理解できません。それではやはり、教官こそが最強ではありますか。

「わからないか？勝負にならなかつたんだよ。私が怖じ氣づいているうちに、時間切れになつただけ 引き分けさ。戦闘力では比較にもならない状態で引き分けに持ち込んだ。なら、戦闘力以外の「強さ」が、あいつにはあつたとこり」とだ

……理解……できません。

「そのうちわかるようになる。その時は、お前も「強く」なつてい るかもしれんな

ひとつだけ、教えてください。

「なんだ？」

その、教官よりも強いといふ者は何者なのですか？

「弟の幼なじみでな。度を超して無口な、変わつたヤツだが、私は 気に入つてゐる。

名前は  
「

「井上、真改」

敬愛する教官が、ドイツ軍を去る直前の夢。夢を見るなどあまりにも久しぶりだつたので、目が覚めた瞬間、その時に聞いた名を、呟いた。

「……あの女が」

教官の経歷に傷を受けた男 織斑一夏のことばかりに意識がいつて、忘れていた。

あの女は確かに教官から聞いた名であり、左腕がなかつた。間違いなく、教官の言ひ、教官よりも強い者なのだろう。

「……」

しかし、どうしても理解できない。

あの女の戦闘記録を見たが、見るべきものは接近戦の技術くらいで、とても教官よりも強いとは思えない。私でも勝てるだひう。

なのに。

「……何故だ」

あの女のことを話す時、教官が浮かべていた顔。  
弟の話をする時に似た顔。

私は、教官にそんな顔を向けられたことはない。

「……何故、貴様が……！」

織斑一夏を排除する。

しかしその前に、あの女が立ちふさがるだろ？。

むしろ、好都合だ。

「……認めん」

教官は、あの女が自分より強いと言つた。  
そんな筈はない。教官は世界最強であり、絶対の力を持つ、完全な  
存在なのだから。

「私は……認めんぞ」

だから、貴様の「強さ」とやら、この私に示して見せろ。  
もしその「強さ」が、教官を誑かす偽物であるのなら、その時は

「井上、真改　　！」

織斑一夏共々、貴様を排除する

## 第17話 黒兎（後書き）

呼び方ひとつであらぬ騒動を巻き起こすシャル、セシリ亞の扱いを心得てきた鈴、技術力だけでなく情報力も高くて余計不安になる如月重工、そして個人情報ダダ漏れな千冬さん……。あれ？なんか被害が一人に集中しているような……？

## 第1-8話 憤怒（前書き）

今回ラウラがちょっとえべいです。お気をつけください。

……と思ったら原作でも最初はけっこつえべいですね。

## 第18話 憤怒

それは、ある月曜日の朝のことだった。

「そ、それは本当ですかーーー？」

「う、ウソついてないでしょーうねーーー？」

「本当だつてば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら、織斑君と交際できるんだつてーーー！」

「…………」

鈴とセシリアが息を飲む。

そう、己も今日初めて知ったのだが、現在IIS学園内には、まったくの意味不明な噂が流れている。

曰わく、『学年別トーナメント優勝者は織斑一夏と交際できる』

「…………」

思わず簾を睨む。

先日、一夏に交際を申し込んだと言っていたが、確かにその時、学年別トーナメントに優勝したら返事をしてもらひと言わなかつたか？

「…………」

「…………いや、その…………そついえば、ちょっと声が大きすぎたような

…………」

何を他人事のように言つてゐる。完全にお前の失敗だらう。  
しかしそうなると、今になつてひとつ不安が首をもたげてきた。

「……文書……」

「え？」

「……なんと言つた……？」

「あ、ああ。ええと……『来月の学年別トーナメントに私が優勝し

たら

『

「『』付きました』『

「『』付きました』『

。

。

。

。

。

。

。

真剣に、目眩がした。

「……恐らく……」

「え？」

「……通じていな……」

「……はあっ！？」

ガタッと幕が立ち上がる。

「ど、どひこひじだ！？」

「落ち着け……」

「……あ」

教室中の視線が筈に向く。

一夏と交際できるかもしないという話があがつているところで大声など出せば、注目を集めるのは当然と言える。

特に。

「……筈？」

「……筈さん？」

「ハッ！？」いや、なんでもないぞー？」

この一人は食いつくだらう。

もはや筈の弁明などなんの意味もない。

一人は獲物を狙う猛禽のような気配を発しながら（おかげで他の女子たちは怯えて近付いて来なかつたが）筈に詰め寄つた。

「どうじつことか

「説明してくださる？」

「あ、いや、その、えっと、……し、しんか

つていなー！」？

む？呆れのあまり、無意識の内に着席していた。

まあ問題あるまい、鈴とセシリ亞なら分かるだらう。といふか何故筈が分からなかつたのかが分からぬくらいだ。

「さーあ、教えてもらおつかしらあ？」

「この噂の、眞実を

」

「ひい……！」

数分後。

「ふつん、そうこう」と……」

「ふ、ふふふ……篠さん、抜け駆けとは、いい度胸ですね?」

「…………」

洗いざらい吐かれた篠が燃え尽きていく。

こんな時ばかり凄まじい連携を発揮する鈴とセシリ亞であった。

「カビそれじゃあダメなんじゃないかなあ……」

「…………え?」

「わうですわね。なにせ相手は一夏さんですし……」

「…………ビ、ビウコウ」とだ?」

まだ分からぬのか。今日は篠、告白に意識が向きすぎて、一夏の朴念神ぶつを忘れているな?

「だつて、一夏よ?」

「『付き合え』と言われても……せいぜいトーントーへりこむしか思わないのでは?」

「…………あ」

ようやく氣付いたか。

そつ、一人の言つ通り、一夏に「付き合え」と言つたところで、それが男女の交際を求めるものとは考えまい。

……正直、逢い引きと思つかも怪しいものだ。そして仮に逢い引きと認識したとしても、そこから交際まで繋げるのは不可能に近い。

「けれど、つまりは

「学年別トーナメントで優勝すれば、一夏さんとトーントーできる、といつ」とですわね?」

「うう……何故こんなこと?」

「……迂闊……」

そしてこの会話は瞬く間に学園中に広がり、噂を書き換えた。

田わく、『学年別トーナメント優勝者は、織斑一夏とアートでござる』  
と。

己が篠の訓練を手伝う理由が消えた瞬間であった。

「いい加減男子用トイレを用意してくれないかな……」

IS学園は広い。そりやもう広い。

なのに男子トイレは学園内に三ヵ所しかない。

理由は簡単、IS学園は女子校だからである。

だから俺がトイレに行くときは行きも帰りも全力疾走しなければ休み時間中に教室に戻れないのだ。

しかし俺はまだいい方である。

シャルなど本当は女の子なの、男子トイレに駆け込まなければならぬのだから。

(連れシヨン行こうぜとか言わなくて本当だ良かつた……)

血ひの自制心を讃め称えながら、尚も走る。

「先生は……いないな」

先日、ある先生から「廊下を走るな!」「とお叱りを受けたので、見つからないように周囲を警戒しながら走る。気分は忍者、もしくはスネー

「なぜこんなところで教師など…」「

「やれやれ……」

ふと、曲がり角の先から声が聞こえた。

足を止めてこつそり近づき、耳を澄ませた。その声がいつも気になつた理由はただひとつ。

聞こえてきたのが、ラウラと千冬姉の声だつたからだ。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

驚いた。あのラウラが、こうまで声を荒げている。

そしてそれは、ラウラが心から千冬姉に憧れていることを意味していた。

ラウラが、千冬姉が俺を助けるために第一回モンド・グロッソ決勝を辞退したことについてあんなに怒っていたのは、千冬姉への想いがそれだけ強いからだ。

(くわつ……俺のせいかよ)

そり、これは、ラウラの怒りは、俺の責任だ。  
あの時、俺さえいなければ、誰も、何も失うこととはなかつた。

シンだけじゃない。千冬姉も、俺のために多くのものを犠牲にしてきた。

(……怒つて、当然だよな)

そして、俺には言い訳のしようもない。ラウラが俺を断罪しあつところのなら、甘んじて受け入れただろう。

以前なら。

(けど、お前には悪いが、譲れないんだよ)

目標が出来たのだ。

俺の生涯を掛けてでも、叶えたい夢が。

『助けられた命は、失われたもののために使つべきじゃない。遺つたもののために生きるべきだ』

そう言つてくれた人がいたのだ。

だから、もう逃げない。

「そしてあの、井上真改という女……やはり、私には理解できません。あのような者が、教官よりも強いなどと」

(……千冬姉より強い? シンが?)

千冬姉がシンの実力を認めていることは知っていたが、まさか自分よりも強いとまで言つていたとは。

確かまだ、シンが千冬姉に勝つことはなかつたと思つが。

「ほう？あいつと戦つたのか？」

「いえ、対峙しただけです。しかしあの女には、教官ほどの威圧感はありませんでした」

ラウラの言葉を聞き、千冬姉がくつくつと笑う。

「それはお前があしらわれただけだ。あいつはあれで孤児院の年長者だからな。ガキの扱いには慣れている」

「な……！」

千冬姉の言葉にラウラが絶句する。

「年齢のことではないぞ。今のお前の様は、まるきつガキのヒスティリーだと黙ってるんだ」

「……っ！」

嘲笑うように言つ。

千冬姉とシンは仲が良い。二人とも黒髪黒眼で鋭い目つきに長身と容姿の共通点も多く、それこそ姉妹のようである。

そのシンに対するラウラの物言いに、怒りを覚えたのもしれない。

「私は……認めません」

「好きにしろ。さて、授業が始まるとさと教室に戻れよ

「…………」

ぱっと声色をいつもの調子に戻した千冬姉に急かされて、ラウラが

早足に去つて行く。

「あ、まよい。

「そこの男子。盗み聞きか？異常性癖は関心しないぞ」「な、なんでそつなるんだよ！千冬ね」

ぱしーん！

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい……」

「これはひどい。弟の頭を叩くだなんて、姉のやることか。妹分のことは叩かないクセに。

ぱしんぱしんぱしーん！

「ふむ、弟の頭は実際に叩きやすくな。お前もわざわざだらり？織斑

「…………はい」

「…………井上には黙つておけよ」

それは多分、千冬姉がシンを自分よりも強いと言つたことだらり。  
元世界最強の意地か？

「いや。…………姉貴分の意地や」

「…………」

愛されてるなあ、シン。

「わら、走れ劣等生。」そのままじやお前は月末のトーナメントで初

戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかつてゐつて……」

「わづか、ならい」

「ヤリと笑みを見せる千冬姉は、今だけは姉として言つてくれているようだつた。

「じゃあ、教室に戻ります」

「おう。急げよ。せいぜいバレンによつに走れ」

「了解」

そうしてまた、教室に向かつてダッシュする。

その、後ろで。

「……姉貴分、か。よくもまあ、抜け抜けと」

千冬姉の、苦々しい声が、聞こえた気がした。

「あ  
あ  
……」

放課後、もう笄と訓練する必要もなくなつたのでセシリアとアーリナに来たところ、鈴と出くわした。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

「……」

バチバチと火花を散らす一人。

繰り広げられる女の戦い。

争いとはいつかなる時も醜いものである。

「ちょうどいい機会だし、どちらが上かはつきりさせとくってのも悪くないわね。こないだは決着つかなかつたし」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではつきりさせようではありませんか」

「ふ、ふふふ」

「ふふふ、ふふ、ふふふふ」

「「「ふふふふふふふふふふふふふふ」」

「……」

不気味な笑い声をあげながら対峙する一人。

鈴が双天牙月を、セシリ亞がスター・ライトmk?を展開し、構える。

……強さはともかく、優雅さについては最下位決定戦になりそうである。

と、そこへ。

「……ツ！」

「……ツ！」

「オオンツ！」

「シンツ！」

「真改さんツ！」

突如飛来した超音速の砲弾を切り捨てる。

弾道を辿ると　　否、そんなことをするまでもなく、そこにいるのが誰であるかはわかっている。

漆黒の装甲、ドイツ製第三世代型T-15「シュヴァルツェア・レーゲン」、登録操縦者

「ラウラ・ボーテヴィッヒ………」

怒りの滲んだ、セシリアの声。

そして己を庇つように、鈴が前に出る。

「………どひこひつむり? いきなりぶつ放すなんて」

とん、と連結した双天牙用を肩に預けながら、鈴は衝撃砲を準戦闘状態へシフトさせる。

その顔は獰猛に歪んでいた。

「それもあたしの友達に向かつてなんて。……ハツ裂きにされても、文句はないわよね?」

「ちょっと鈴さん、なにをおっしゃりますの? それはわたくしの役目ですわよ?」

「中国の「甲龍」にイギリスの「ブルー・ティアーズ」か。……ふん、今は貴様たちに用はない」

「「なんですか?」

「井上真改」

いきり立つ一人を無視し、ラウラは己を睨みつけた。

「私と戦え」

「………」

敵意、憎悪、嫉妬……その眼差しには、様々な負の感情が込められている。

こんな日は、久しく向けられていなかつたな。

「貴様の力とやら、私に示してみせろ」

「……」

わて、何があつたのかは見当もつかんが、ラウラはかなり機嫌が悪いようだ。

幼いながらも整つた顔立ちが、いつも以上の冷気を放つている。

「ああ、私と戦え、井上真改……！」

「……断る……」

しかしラウラには悪いが、己はラウラと戦うつもりはない。

「……何故だ」

「……無益……」

怒りに任せた今のラウラと戦つたところで、得るものは何もない。なにより、それは「この役目ではない。

「そんなに戦いたいなら、あたしが相手してあげるわよ？」  
「真改さんの手を煩わせるまでもあつませんわ」

「……」

「貴様」

尚も闘志を滾りさせるラウラの前に、鈴とセシリアが立ちふさがる。

……気持ちはありがたいのだが。

「……退け……」

「シン……」

「真改さん……」

「……無用……」

今は退いてくれ。

それは、お前たちの役目でもないんだ。

「どうこいつもりだ。戦つ氣になつたか?」

「……呪……」

「……ふん、専用機を『えられたと聞いていたからどれほどの実力者かと思えば、とんだ臆病者だな」

「……」

「そんな様で、その機体、どうやつて手に入れた? 体でも使つたか? ……ああ、その左腕は、如月の変態どもが好みそうだな」

「……それ以上は、本当に」

「ブチ殺すわよ?」

二人から濃密な殺氣が放たれる。

しかしラウラはまるで気にした様子はない。

嘲りの笑みを浮かべ、尚も言葉を続ける。

「よかつたな? 傷物に欲情する物好きがいて。専用機が手に入り、体も慰められる。一石二鳥だな?」

「……ああ、もういいわ、アンタ」

「そんな言葉を吐き出す汚らしい口は、引き千切つてそしあげますわ」

「……」

完全に戦闘態勢に入った二人の前に出て、右腕と円輪で押しつぶめる。

「……退け……」

「……一ちょっと、シンー?」

「あそこまで言われて、黙つていようと……?」

「退け」

力を込めて、強く言ひ。

己の言葉に、二人が俯く。その肩は怒りに震えており、歯を噛み締める音が、大きく響いた。

「……ああ、もう……！アンタって子はつ………！」

「真改さん、わたくしはつ………！」

己の様子に、納得行かないながらも退がつてくれた。

そのまま尻に浮かんだ涙が、不謹慎にも、嬉しかった。

「……すまん……」

「謝るなつ！ぶん殴るわよ！？」

「……ありがとう……」

「そんな言葉が欲しいわけではありませんわ………！」

「……」

「ふん……とんだ茶番だな。そつやつていれば誤魔化せるとでも思っているのか？卑怯者が」

ラウラがそう言ひと、シュヴァルツェア・レーゲンのレールカノンが己を狙つた。

警告。ロックオンを確認。

「なら、そのまま消えろ」

「……」

至近距離からの発砲。

並のエラならば一撃で墜とすほどの砲弾を、再び月光で切り扱う。

「ふん、剣だけは達者だな。ならば」

「ふん、劍だけは達者だな。ならば」

三度装填される砲弾。己は月光を構え

よつとして、機体が動かないことに気付いた。

「……！？」

「所詮は近接戦闘特化機。教官ほどの実力があるならばともかく、このシュヴァルツェ・レーゲンの敵ではない」

解析完了。第三世代型兵器、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーA.I.Cと判明。対象の慣性を停止させ、動きを封じる特殊兵装

見れば、ラウラは口に向けて右手を突き出していく。これにより、A.I.Cとやらが発動しているのだ。

「貴様など、この停止境界の前には無力だ」

ガコン、と、レールカノンの装填音が響く。

その音に、水月の装填音が重なっている」と、ラウラは氣

付いていないようだつた。

「 消えろ」

「 .....」

ゴウンツ!!

重々しい炸裂音。

水月の特殊カートリッジが火を噴き、朧月に馬鹿げた運動エネルギーを与える。

「 なにっ.....! ?」

AIC ラウラ曰わく停止結界は、確かに強力な兵器だが、何事にも限界はある。

IIS自体を弾丸並に加速させる水月を抑え切れるほどの出力はないようだつた。

発射された砲弾を姿勢を下げて回避、ラウラに肉迫する。

「 おのれっ！」

シュヴァルツェア・レーゲンの両腕に取り付けられた袖のようなパ

ーツから、高熱のプラズマ刃が伸びる。

接近戦用の武装。

それを、ジャブのように鋭く突き出して來た。

「 .....」

月輪を起動し、素早く横に回避。

プラズマ刃の間合にから逃れた己に向け、鋭い刃が付いたワイヤーが射出される。

その数、六。

「逃がさんつー！」

「…………」

複雑な機動を描いて己を囲うそれを、円輪により高速回転しつつ円光で切り払った。

「貴様あつ…………！」

勢いのまま距離をとり対峙した己を、射殺すかのように睨み付けるラウラ。

朧月の主武装が月光であることは誰が見てもわかる。その月光が届かぬ距離まで白ら退がった己の意図を、正確に読み取つたようだった。

「どうあつても戦わないつもりかつー！」

「…………応…………」

己の返事に表情を怒りに歪ませ、殺意を剥き出しにして、ラウラが突撃してくる。

「消えろ…………消えろ、消えろおおおひーー！」

何がそこまでラウラを駆り立てるのか。

それがわからないままに、己はラウラの猛攻を凌ぎ続けた。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと

「第三アリーナだ」

「「わあっー?」

廊下をシャルと並んで歩いているところにいきなり予想外の声が飛び込んできて、俺たちは揃って声を上げた。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

声の発信元は、いつの間にか横に並んでいた篝だった。

「お、おっ。すまん

「ごめんなさい。いきなりのことびっくりしちゃつて

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

折り目正しくペニワと頭を下げるシャルに、さすがの篝も氣勢を削がれてしまったようだ。

「こほん。ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろ?」

おお、それはいいことを聞いた。やっぱり模擬戦は実戦に近い経験

値が得られるからな。

「……けどなんだ？なんかさつきから廊下が慌ただしくないか？」

それも、アリーナに近付くにつれて騒がしさが増している気がする。

「なんだ？」

「何かあつたのかな？観客席から先に様子を見ていく？」

「……そうだな、ピットから普通に入るより早い」

「どうやら、誰かが模擬戦をしているようだな。しかしそれにしては様子が……」

「ヴォンツ！」

「あの光は……！」

「月光！？」

「真改か！」

そう、アリーナで戦っていたのはシンだつた。

そして、その相手は

「何故だ、何故貴様が……！」

「ラウラ！？」

あの漆黒の装甲、長い銀髪、左目を覆う眼帯……間違えようがない、俺とシンを敵視している転校生、ラウラ・ボーディヴィッシュだ。

しかし様子がおかしい。いつもの氷のような鉄面皮からは想像もつかないほどに、怒りを顕わしている。

「認めん、認めんぞ、井上真改

！」

「……ッ！」

対するシンは、よく見れば戦っていない。

ただ只管、ラウラの攻撃を避け続けている。

「はああああっ！」

ラウラが操るエラ、シュヴァルツェア・レーゲンから、ワイヤー状のブレードが射出される。

複雑に動き回りながら迫るそれを、月輪による変則的な機動で回避。大型のレールカノンのシリンドラーが回転し、砲弾が連射される。最短距離を正確に、超音速で飛来するそれを、月光から伸びる紫色の光の剣で切り捨てる。

ラウラが右手をシンに向ける。

それが何を意味するのかはわからないが、シンは水月と月輪を使い、何かを避けるように高速機動を行つた。

「す、じ、……！」

鈴やセシリアと較べても凄まじい猛攻を、シンは全て避け切つていた。

機動力に長けているが扱い難い臘月を縦横無尽に操つて、アリーナの中を逃げ続ける。

日頃の訓練の成果を遺憾なく発揮しつつ、しかし決して攻撃を仕掛けようとしない。

その素振りすら見せない。

「何故だっ！何故戦わないっ！！！」

そんなシンの様子にラウラは益々怒りを強め、攻撃も激しさを増していく。

「……無益……！」

「益はなくとも意味はあるつ！……」

「……不詳……！」

「貴様が知る必要はないつ！……」

しかし一向にシンを捉えられない」とに業を煮やしたのか、ラウラの攻撃が次第に荒くなつていいく。

精度が落ち、シンの回避にも余裕が出てきた。よし、これなら――！？

「危ないつ！」

「きやあつ！」

「……つ……！」

狙いを外したレールカノンの砲弾が、まだアリーナ内に残っていた女子に迫る。

シンは水元を起動、ギリギリその女子の前に立ちふさがつて、砲弾を切り捨てた。

それを見て、ラウラがニヤリと笑った。

「これで――！」

「ええつ！？わああつ！？」

不運にもラウラの近くにいた女子にワイヤーを伸ばし、絡める。そしてそれを、振り子のように勢いを付け

「 どうだつ！」

「 うわああああっー！」

「 ……！」

シン曰掛けで、投げ飛ばした。

さらにはその女子にレールカノンを向け、躊躇つことなく発射。シンは投げられた女子を抱えるようにして受け止めつつ、砲弾を用光で切り払う。

そして。

「 捉えた」

「 ……！」

ラウラが右手をかざすと、シンの動きが止まる。

何があつたのかはわからぬ。

わかつたのは、ラウラがシンに何かをしたといふこと、そして

抱えられた女子」と、シンを撃ち抜くといふこと、これが  
とだけだつた。

「 おおおおっーーー！」

俺の中で、ナニカが切れた。

白式を展開、同時に零落白夜と瞬時加速を発動、アリーナを覆う遮断シールドを切り開き、中に飛び込む。

未だかつてない速さで行われた一連の動き。

だが間に合わない。

レールカノンの砲弾が装填され、しかしまだシンは動くことが出来

ず、ラウラが口元を歪ませ

世界が停止した。

無論、そんなものは錯覚だ。止まつたのは世界ではなく、俺とラウラ  
うだつた。

では何故、俺とラウラは止まつたのか？

簡単だ。さつきまで逃げ続けていたシンから、一瞬、心臓がその鼓  
動を停止するほどに、凶悪な殺氣が放たれたからだ

「あ」「そこまでつ……」

アリーナ内に、聞き慣れた声が響く。

千冬姉だ。

同時にシンの殺氣が初めからなかつたかのように霧散し、俺とラウ  
ラの硬直が溶けた。

「ガキの喧嘩と思つて黙つて見ていたが、第三者を巻き込んだうえ、  
遮断シールドまで破られては放つておけん。

決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

呆れているような、苛立つているような表情の千冬姉の言葉。

余波にあたられただけの俺と違い、シンの殺氣を直接向けられたラ  
ウラはまだ茫然としていたが、千冬姉の言葉で正気に戻つた。

「はつ……教官が、そう仰るのなら」

しかしそれもまだ完全ではないようだった。

IJSを解除したラウラに千冬姉が近づき、見下すかよつて尋ねる。

「で？ 理解できたか？」

「……ひー。」

いつもなら千冬姉には即答するラウラが、返事を躊躇つ。なんだ？ なんのことを言つてるんだ？

「ふん。その様子ならば、わかつたよひだな」「わ、私は……」

俯くラウラに構わず、千冬姉がアリーナ中に聞こえるよひで大声で言つた。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パンツーと千冬姉は強く手を叩き、去つていつた。ラウラも、心ここに在らずといった様子で去つていいく。

「……そうだ、シン！ 大丈夫か！？ その子はー？」  
「……無事……」

IJSを解除したシンが、こちらもIJSを解除した女の子を下ろしながら答える。

「うん、本当に怪我はなによつだ。」

「じつこひ」とだよ？ なにがあつたんだ？」

「……」

シンは黙つたままだ。ここにつけようと、まず何も話さない。

と、そこへ、近付いてくる一人の姿を見つけた。

「アーッ、いきなりケンカふつかけてきたのよ」  
「鈴……」

なにやらもの凄く怒つてる鈴とセシリアだ。

「いきなりって……いきなりか？ 何も言わずに？」

「色々言つてましたわ。口にするのもおぞましいような言葉を」

……氣にはなるが、聞かないほうが良さそうな氣がする。  
それくらい一人は殺氣立つていた。

「真改！ 怪我はないか？」  
「シン、大丈夫！？」  
「……無事……」

篝とシャルも駆けつけ、シンの無事を確認し、胸をなで下ろした。

「はあ～、ありがと、いのっち。助かったよ～」

あれ？ なんか聞き慣れた声が？

「つてのほほんさん！？」  
「いや～、びっくりしたよ～」  
「……」

「どうやら投げ飛ばされた女子はのほほんさんだつたらしい。

……「おつで、あの状況でもまだあんなどころぬと申つたら。

「むむむ～～おつむー、失礼な」と考へてない？

「せっはっは、そんなまたか」

相変わらず見かけや行動のスローつぶりに反して鋭い。油断ならぬ人物なのである。

そんなやり取りをしてると、シンがのほほんと頭を下げた。

「……すまん……」

「? なにが～？」

いきなりのシンの行動に、たすがのせせさんも少し困惑つてこるようだつた。

「……巻き込んだ……」

「……このつけのせこじやないよ」

「……」

「うへん、じゃあ、ケーキセシットで許してあげるよ～」

「……承知……」

「トウヒ、やつたあ～」口チになつま～す～」

おお、シンの扱いを極めてくる。

マジで油断ならんな、のほほんとく。

「……とにかく、もつあがつましつ。真改さんもお疲れでしょ」

し

「やつね。」のまま訓練しても荒れそつだわ、あたし

し

そして据わった目で言う「一人がかなり怖い。

……マジでなにがあつたんだ？

アリーナでの騒動から一時間が経つた。

訓練もお開きになつてしまい、他にやることもなかつたので、ちょっと早いが飯にしようということになつた。

今はシャルと一緒に食堂に向かっているところである。

「なんだつたんだろうな、さつきの」

「うん……凰さんもオルコットさんも、凄く怒つてたよね」

「……怖くて聞けなかつた」

「いや、あれは仕方ないと思つよ……」

あの後、鈴もセシリ亞も一言も話さず帰つていつた。

二トロ並に危険な状態だつたので、誰も声をかけられなかつたのだ。

「ラウラかあ……。シンとなにがあつたんだかなあ」

「なにがあつたつていうより、ボーテヴィッヒさんが一方的に突っかかるつてる感じだつたけど」

そう、シャルの言つ通り、シンはなぜラウラがあんなに怒つているのかわかつていなかつた。

多分ラウラは、千冬姉を通してシンのことを知つていたのだろう。それは休み時間での一人の会話からも伺える。

「荒れそうだな、学年別トーナメント」

「大荒れになるだろ？　シソもボーテ、ヴィッヒさんも、間違いな  
く、憂勞(ゆろう)を補(ほ)う。」

「優勝候補だし」

まあ、俺たって負けな『はなし』だけ

そんなことを話しながら共いいでいるとなじながら地鳴りが聞こえてきた。

……いや、比喩ではなく、それは本当に地鳴りだった。

卷之三

なんだ?なんの音だこれ?」

一夏二！あれ……！」

シャルが指差す方を見ると、そこには又の大移動みたいな迫力がある女子の大群が。

「な、な、なんだなんだ！？」

一瞬で飲み込まれる、もとい取り囲まれる俺とシャル。

いきなりな言葉と状況にビビりまくっている俺たちに、女子一同（

百人くらいいそうだ）が学内の緊急告知文が書かれた申込書を突き出してきた。

「な、なになに……？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」

「ああ、そこまでいいから…とにかく…。」

「わざわざ…と一斉に手が伸びてくる。怖い。マジで怖い。さつきの鈴とセシリ亞くらい怖い。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

どうしていきなり学年別トーナメントの仕様変更があつたかはわからぬが、今こうして取り囮まれている理由はわかつた。

学園で一人しかいない男子とペアを組むべく、先手必勝とばかりに突撃してきたのだろう。

「え、えつと……」

しかし、シャルは本当は女の子なのだ。

誰かと組めば当然その人と訓練する時間が増えるだろうし、いつどこで正体がバレてしまうとも限らない。

「……」

ちらりとシャルを見る。

彼女は困ったような顔で集まっている女子たちを見回して、そこで俺と田があつた。

「あ……」

一瞬目を逸らして、けどすぐにいかを決意したような顔をして、それから深呼吸をひとつ。

『……一夏』

『なんだ?』

シャルからプライベート・チャネル。

声を出さなくていいので、内緒話にはぴったりだ。

『また、助けてもらつて……いいかな?』

『遠慮すんなよ。……仲間だろ』

『うん。……ありがと、一夏』

シャルは嬉しそうな笑顔を浮かべてから、みんなに聞こえるように大きな声で言った。

「『めんなさい。誘つてくれたのは嬉しいです。でも僕は一夏と組むことにするよ』

しーん……。

いきなりの沈黙。シャルがすこし後ずさる。が、

「まあ、やうこひ」となら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士つていうのも絵になるし……『ほんと』ほん

とりあえず納得してくれたようだ。

女子たちは各自が仕方ないかと口にしながら去っていく。

それからまた改めてペア探しが始まつたようで、ばたばたとした喧騒が聞こえてきた。

「ふう……」

「なんとかなつたね……」

「よく言えたな、シャル」

「…………うん。一夏のおかげだよ」

そつ言つてはにかむシャルがとても可愛かつたので、俺はつい目を逸らしてしまひ。

「?..ビリしたの?」

「い、いや、なんでもないぞ。ただ、シャルが可愛かつたから……」

「…………え、ええ！？か、可愛い？僕が…………ほ、本当に？ウソついてない？」

「ついてないって。…………ていうか、なんでそんなに自信なさげなんだよ」

「え？だ、だつて…………僕つて男口調だし、自分のこと『僕』つて言うし……」

「別にそれは大したことじやないんじやないか？シンや筹も男口調だし、シンに至つては自分のこと『おれ』つて言つし

「え、そうなの？」

「そつなんだよ。滅多に言わないから、あんまり知られてないけどな」

「へえ……。けどなんか、シンらしいね」

「だろ？だからシャルも、口調とかそんなに気にしなくていいんじやないか？」

「うん……そうだね」

シャルも大分前向きになってきた。

それを嬉しく思いながら、再び食堂へと歩き出す。

……けど考えてみれば俺、みんなからは男って思われてるシャルに可愛いとか言ったよな、今。

……廊下に誰もいなくて良かつた。

さて、そんなこんなで六月の最後の週。  
今日から一週間かけて、学年別トーナメントが行われる。  
その慌ただしさは俺が予想していたよりも遙かにすごく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場整理、来賓の誘導を行っていた。

「しかし、すゞいなーりや……」

更衣室で着替えながら、モニターに映る観客席の様子を見る。  
そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、一年には一年間の成果の確認、それに一年の将来有望な人材のチェック。優秀なIFS操縦者はどこも喉から手が

出るべからざい欲しいだらうからね

「『』苦労なこつたな」

あんまり興味なかつたので話半分で聞いていたので、返事もおざなりだ。

観客席に見覚えのある変態がいたので不機嫌になつたのも、理由のひとつかもしれない。

「……ボーデヴィットヒさんとの対戦が気になる?」

「まあ、な。ラウラはシンのこと襲いやがつたし、俺のことも狙つてるみたいだし」

この先もあんな調子で狙われ続けたら堪つたもんじやない。  
早いところをつけてたい。

「彼女はおぞらべ、現時点では一年の中でも最強だと思ひ。必ず勝ち上がつてくれるよ」

「……シンはどうなんだよ。この間は、一発ももひつてなかつたろ」「あれは逃げに徹してたからだよ。あの猛攻を搔い潜つて接近するのは、こゝりシンでも難しいと思つよ」

冷静なシャルの分析。

俺はすぐに熱くなつてしまつタイプなので、相方が優秀なストッパーなのは実に頼もしい。

「さて、こつちは準備できたぞ」「僕も大丈夫だよ」

お互いにHISースツへの着替えは済んでいて、HISの最終チェックを終えたところだ。

ちなみにシャルのエスースは男装用の特別製で、ボディラインの肉付きを男のそれに見せる仕組みらしい。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

原因は不明だが、突然のタッグ戦への変更により、今まで使っていた対戦表作成システムが正しく機能しなかつたらしい。なので今朝から生徒たちが手作りによる抽選クジで対戦表を作つていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？ どうして？」

「待ち時間に色々考えなくて済むだろ。」  
「うごつのはやっぽ、勢いが肝心だからな」

「あはは、一夏らしいね」

ペアが決まってから今日まで一人で何度も特訓を重ねてきたことで、お互いの性格や考え方はかなり把握出来ている。

シャルも俺の猪武者的なところはわかつてくれているようだ。

「あ、対戦相手が決まったみたい」

モニターがトーナメント表に切り替わった。

俺とシャルはそこに表示された対戦相手を確認し

「…………うそ…………だろ…………？」

「…………そ…………そん、な…………」

揃つて絶句した。

発表されたトーナメント表。

一年の部、Aブロック一回戦一組目。

織斑一夏と、シャルル・デュノアの対戦相手は。

ラウラ・ボーデヴィッヒ、そして

井上真改

## 第18話 憤怒（後書き）

チーム「月兔」爆誕ツー！

経緯は次回で。

チーム「男子同盟（偽）」との対決に、期待ください。

千々さんの苦惱については第3話を参照です。

## 第1-9話 役目（開戦編）（前書き）

今回長くなりそうなので、ふたつに分けます。  
いやしかし、ほんとに戦闘描<sup>画</sup>つて難しいですね。

## 第19話 役目（開戦編）

井上真改に戦いを挑んだ日の夜。  
私は食堂で夕飯をとつていた。

「…………」

「…………」

正確には既に食事は終わっている。

今はなにも残つていらないトレイを、呆と眺めているだけだ。

「…………」

私がここ、E.S学園に転入する際には、学園そのものに対する興味  
は微塵もなかつた。

意識が甘く、世界最強の兵器であるE.Sをファッショソかなにかと  
勘違いしているよつた程度の低い者たちに交じつて、とうの昔に学  
び終えた理論を聞く。

それは誇りあるドイツ軍人である私にとって、屈辱でしかない。

「…………」

それでも私がここに来たのは、國からの命令であるからと云うのは  
当然だが、もうひとつ、私が尊敬する教官が、ここで教師をしてい  
るからだ。

「…………」

私はかつては優秀な遺伝子強化試験体であり、しかし最底辺まで転  
げ落ちた末、出来損ないの烙印を押された。

絶望に捕らわれ、深く暗い闇の底へと沈んでいくだけだった私に、ある日突然、手が差し伸べられた。

それが教官 織斑千冬だった。

「…………

ずっと闇の中に居続けた私に、初めて光が射した。

彼女の言葉に従うだけで、私は再び部隊最強となつた。

もしも神のお告げなんでものが実在するとしたら、教官の言葉一いつ句くがまさしくそれだった。

「…………

彼女に憧れた。

その強さに、その姿に、その在り方に憧れた。

彼女のようにになりたいと、心から思つた。

それが、何もなかつた私が、初めて持つた望みだつた。

「…………

だから、時間を見つければ話をしに行つた。

いや、話など出来なくともいい。

ただ教官の側に居られるだけで、私には十分だつた。

強く、凛々しく、自信に満ちたその姿を見ているだけで、十分だつた。

「…………

世界最強。

あまりにも分かり易く、そして絶対の称号。

この世で最も価値のあるもの。

それそのものである教官は、いかなる宝石も、いかなる芸術も、いかなる絶景も及びもつかない、美しい存在だった。

なのに。

「……井上……真改……」

教官が語った、教官よりも強い者。

それは私にとつてあまりに荒唐無稽な存在であり、教官の言葉だと  
いうのに、信じられなかつた。

そんな御伽噺よりも、教官の輝かしい経験に傷を付け、それでいて  
教官の優しい笑みを受ける、教官の弟の方が許せなかつた。

なのに。

「……井上、真改……」

教官が身を竦ませるほどに恐れたといつ、その女。

かつて教官から聞いた話をふいに思い出して、その女を実際にこの  
目で見て、苛立ちが募つた。

隻腕という障害を負い、ただ黙つてそこに居るだけの、そんな女が、  
教官よりも強いなど。

そんなことは有り得ない、有り得る筈がないと、それを証明するた  
めに、奴に戦いを挑んだ。

しかし奴は戦おうとせず、ただ逃げ回るばかりで、仮にも教官に認められた者のその無様な姿に、言いようのない怒りを覚えた。  
だからあの女を追い詰めた時、暗い愉悦が私の心を満たした。  
ああ、やはり、教官よりも強い者などいないのだと。

なのに。

「……井上、真改」

身が竦んだ、どころの話ではない。  
心が、魂が凍り付いた。

ただ発射を思考するだけで勝てたというのに、それすらも出来なかつた。

どんな兵器よりも強力に、あの女は、私の心臓を撃ち抜いた。

紙切れ一枚も貫けぬ筈の、目線で。  
それに乗せた、殺氣で。

「井上、真改」

教官は言った。

自分が怖じ氣づいているうちに時間切れになつただけの、引き分けだつたと。

なら、私はどうだ？

もしあの女が、初めから戦いに応じていたら？  
決まつている、何もせずに呆けている私を、一刀のもとに斬り伏せていただろう。

戦いにすら、ならなかつただろう。

「……何故だ……何故、貴様が」

まるで弟の話をしている時のような、教官の顔。  
ただ一人、教官が認める存在。

何故、貴様なんだ。

何故 私ではなく、貴様なんだ。

何故 !

「井上、真改！」

「……何用……」

「！？」

突然の声に驚く。

いつの間にかほとんど人がいなくなつた食堂の、私が座る席の前、そこに井上真改がいた。

「な、なんだ！？」

「……」

特に気配を消しているということはないが、全く気づかなかつた。

私はよほど深く考えに耽つていたらしい。

「な……何の用だ」

「……」

今まさに井上のことを考えていたので対応が拳動不審気味になつてしまつたが、しかし井上は気にした様子もない。

「……何の用だと訊いている」

「……」

再度問う私に対し、井上は手に持っていた書類ケースをテーブルに置き、中から一枚の書類を差し出して来た。

「……なんだ、これは」

「……通知……」

言われて、書類を読む。

内容を一言で言えば、学年別トーナメントがタッグ戦になつたということだ。

だが、そんなことは関係ない。

私の専用機、「シュヴァルツェア・レーゲン」は多数を相手取ることを想定して製作されている。

相手が一人になつたところで、問題はない。

「これがどうした？何故わざわざ持つてくれる？」

「……」

学年別トーナメントのペアは、締め切りまでに決めなければ抽選になると書いてある。

つまり、放つておいてもトーナメントに出場できなくなるようなことはない、ということだ。

わざわざ、それも井上が持つてくるようなものではない。

疑惑の込められた私の視線を受け、井上は書類ケースからもう一枚、書類を取り出す。

「……次はなんだ」

「……」

井上は答えず、田線を書類に向けるだけだった。

仕方なく、その書類の文面を読む。

そこには「いつ書いてあつた。

『学年別アーナメント参加ペア登録申請書』

「…………」

井上を見る。

「…………」

無言。

もつ一度、書類を見る。

その一番下、二人分の署名欄があり、その内の片方が埋まっている。そこに書かれている名前は、当然というか、目の前の女のものだつた。

「…………」

「…………署名…………」

「どうこいつつもりだと訊いている」

この状況で井上が私に何をしろと言つてゐるのか、わからない者はいまい。  
しかし逆に、井上が何故それを求めているのかがわかる者はいない  
だろう。

「私は貴様を認めない。教官が貴様をなんと言おうと、私は認めん」

「…………」

「教官は私闘を禁ずると誓つたが、……要は、戦いでなければいいのだろう。私は貴様を排除する。たとえ、どんな手を使ってでも」

「…………」

それは脅しの言葉。

井上を睨み付け、視線に有りつ丈の殺意を込め、低い声で言つ。

しかしその言葉は、井上を前にしては、ひどく軽く響いた。

「私と組むだと？正気か貴様？訓練中、どんな事故が起きるかわからんぞ？」

「…………」

唇の端を吊り上げて言つ私に、しかし井上はなんの反応も示さない。それどころか、もう一度、こんな言葉を吐いた。

「…………署名…………」

その言葉に、私の堪忍袋の緒が切れた。

「ふざけ……かるなあつ……！」  
「バーンツー！」

両手で机を叩き、立ち上がる。

その音に、食堂に残っていた数少ない生徒たちが驚くが、そんなことはどうでもいい。

「貴様は……！貴様はどれだけ、私を侮辱すれば気が済むのだつ！」

「…………」

「…………」

そう、これは侮辱だ。

私が何をしようとどうとでもなる、私の力では何も出来ない、私如きは取るに足りない存在だと、そう言つてゐるのだ、この女は！！

「力こそが私の全てだ！！教官の教えを受け、それに従い、そうして手に入れた、この力こそがっ！！強者たること、それだけが私の存在意義だ！！それを、貴様はっ……！！」

闇の中、ようやく見つけた、一条の光。

絶望の底で、差し伸べられた、暖かな手。

何もなかつた私が、初めて手に入れた、たゞたひとつ願い

それを、この女は踏みにじった。

「何故だつ！何故貴様が教官に認められる！何故私ではない？貴様の何が、私より優れていると言うのだつ！！」

「私と戦え、井上真改！！証明してやる、貴様の力など、教官の足下にも及ばないと…！教官こそが最強だとつ…。」

そうだ、教官は、私よりも遙かに強い。  
ならば私が井上を倒せば、教官より強いものなどいなくなる。

教官こそが世界最強だと、証明できる。

「逃げるなど許さん、貴様の力、私に示してみやう……その全てを叩き潰してやるつ……！」

「あ、私と戦え……井上、真改

「…………」

未だかつて感じたことのないほどの中情。  
魂の底から湧き上がる怒りを、そのまま直にして吐き出した、純粹な言葉。

それを受け、井上は

「…………断る…………」

やせつ、戦おうとは、しなかった。

「…………や、まあああつ…………！」

憎しみの限りを込めたつもりだったのに、その声は、まるで泣いているかのようだ。

私は信が驚いたその声を聞き、井上はよつやく話し出す。

「…………それは…………」

私と、戦つべめえ。

「…………己の役田では、ない…………」

井上真改ではない、と。

「……なに……？」

「……」

役目？役目だと？そんなものがあるものか、私と、戦ひ役目など。

「……一夏……」

「……！」

「……あれば、強い……」

織斑一夏。私の最初の標的。

それが、強いだと？あの、ただ男で工事の動かせるというだけで騒がれているだけの者が？

「織斑一夏が強いだと？本気で言つているのか？」

「……応……」

そんな世迷い言、信じられる筈がない。

だがしかし、続く井上の言葉は、無視出来ないものだった。

「……己よりも、な……」

ドクン。

心臓が、ひとつ大きく鼓動した。

井上は、自分よりも織斑一夏のほうが強いと言つた。

そんな言葉は到底信じられない。  
信じられないが

「私が奴に勝てば、貴様は、私と戦うか？」

「……勝てば、な……」

その言葉に、ニヤリと笑つ。

言質をとつた。

ならば後は、織斑一夏を倒すだけだ。

そうすれば、井上は私と戦う。

そうすれば、私は証明出来る。

教官の、力を。

「……その言葉、忘れるな」

「……」

井上が頷く。

ならば、私は織斑一夏を排除する。

元々それが目的だったのだ、糺余曲折あつたが、結局は最初に戻つたわけだ。

私のやることに、変わりはない。

しかし。

「何故、私と組む?」

そう、それは私が織斑一夏と戦う理由であつて、井上が私と組む理由にはならない。

私と組むといふことは、井上も織斑一夏と戦うといふことだ。

織斑一夏を守りつとしていた井上が土壇場で裏切る可能性は、否定できない。

「……己の、役目は……」

井上が、私と組む理由。

井上が、織斑一夏と戦う理由。

それは

「……一夏が越えるべき、壁だ……」

織斑一夏の成長の、礎となるためだつた。

「……そんなことのために?」

「……」

私の問いに、頷きもしない。

もはや話すことなど、その態度が示していた。

「織斑一夏には、私と戦う役目がある。貴様には、織斑一夏と戦う役目がある。しかし織斑一夏と戦う前に私と貴様が戦えば、どちらかの役目が果たされなくなる。だから、私と貴様が組む。……そうこうことか?」

「……」

肯定はしないが、否定もない。

多少の間違いはあるが、概ね正しい、そんな感じだらう。

「……貴様が織斑一夏を倒し、私が倒したのではないから約束は無効だ、などとは言わんだろうな」

「……反故にはせん……」

いいだらう、井上の思惑についてはまだ分からぬことはあるが、

私のやるべき」とは決まった。

織斑一夏を倒す。

その後、井上真改を倒す。

そして、教官の最強を証明する。

それだけだ。他のことなど、私には、どうでもいい

ラウラが書類に署名し、食堂を去つて行つたのを確認してから、驚かせてしまった生徒たちに頭を下げ、己も食堂を出ると、そこで、聞き慣れた声を掛けられた。

「損な性格をしているな、お前も」

「……」

壁に寄りかかりながら腕を組んで、呆れたよつた顔をしている千冬さんだ。

「とりあえず、礼を言ひつ。ラウラがああなってしまったのは、私の責任もあるからな」

「……無用……」

千冬さんから礼を言われるなど、いつ以来か。妙にくすぐつた。

「私からも、ひとつ訊きたいのだが」

「……」

「何故そこまで、あいつに肩入れする?」

「……」

さて、あいつとはどちらのことか。  
ラウラか、それとも一夏か。

「両方だ。そうだな、まずはラウラの方から聞こうか」

「……力だけでは……何も、得られん……」

ラウラは力に取り憑かれている。

そしてより大きな力を求めるあまり、他が何も見えなくなっている。

彼女は言った、『強者たることだけが、私の存在意義だ』と。

そんなことはない。

そんな存在を、千冬さんがこれほど気にかける筈がないのだから。

「流石は孤児院の年長者と言つたところか。道に迷つている子供は、  
放つておけんか」

「……」

それは買いがぶり過ぎだ。

己は見知らぬ他人など、必要ならいくらでも切り捨てる。  
ただラウラの在り方が、昔の自分に重なつただけだ。

「では織斑は?お前のことだ、まさかあれに惚れているなんてこと  
はないだろう?」

「……」

「ニヤニヤと笑いながら、からかうような口調で言つ。

まあ確かに、己が一夏に惚れる」となど有り得んだろうが。

「……弟のよう」、元の思つてゐる……」

「……ほひ」

千冬さんが、少し驚いたような顔をする。

意外だな、とうに気付いていたが。

「……役田を奪つつもりはない……」

「……当然だ。あれの姉は案外疲れる。私以外に務まるものか」

嬉しそうな、照れくさそうな、千冬さんの声。

この人がいる限り、一夏が道を外れることはあるまい。

己は精々、千冬さんの立場上手の届かない所を補うくらいだ。

「……信じていいんだな」

「……」

何を、とは問わない。

千冬さんからすれば、己のような訳の分からぬ者を一夏の側に置いておくのは不安だろう。

一年一組に國家代表候補生が集中していることや、シャルが男装してまで一夏のルームメイトになつたことからも分かるが、一夏の利用価値は計り知れないのだから。

だと、言つのに。

「……信じじるぞ、井上。何時までもうだうだ悩むのは性に合わん。

私はもう、お前を信じじてました

「……」

そんな「」とを言える「」の人は、やはり一夏の姉なのだと思った。

「……ありがとうございます……」

「礼などござりん。むしろ私が言つ側だ。

……そして、すまない。お前のことは幼い頃から知つていたと言つ  
のこ、私はお前を疑つていた」

「……」

「だが、それももつやめだ。お前は昔から何も変わらん、愚直なま  
まだ。疑う方が馬鹿を見る」

呆れたよつに詫ひの言葉には、しかし確かに暖かさがあった。

「これからも、宜しく頼む。織斑にはお前が必要だ。私にもな

「……」

「では、今日はもう休め。放課後的一件で疲れたうつ。お前の頑丈  
さは知つているが、無理はするなよ」

「……承知……」

そつとして寮に向か歩いて行へ。

その、背中に。

「お前が一夏を弟と思つてゐるよ。」

……私もお前のことば、妹のよつに思つてゐるよ、真改

「……」

優しさの中にも、からかいが含まれた声色。

本心から言つてくれてるのは分かるが、同時に己の反応も楽しも

うところのだね！」

……残念だが、そうはいかん。

顔だけ振り向いて、やはりニヤニヤと笑っている千冬を元に言つてやつた。

「……おやすみ……千冬姉、……」

「……な」

途端、かあつと赤くなる千冬さん。  
それを見届けてから、再び歩き出す。

……口元に浮かんでしまった笑みを、見られないうち。

「一戦田で当たるとはな。これでは井上と組んだ意味がない」

「……」

「……抽選で決まった、ってわけじゃあ、ないんだな」

「シン……どうこいつもりなの？」

アリーナ中央で対峙する四人。

織斑一夏 白式。

シャルル・デュノア ラファール・リヴィアイヴ・カスタム？。

ラウラ・ボーテヴィッヒ シュヴァルツェ・レーゲン。

井上真改 脣月。

全員が専用機持ちといつことで、この試合の注目度は群を抜いてい  
る。

さらに学園の生徒にとつては、学園で一人だけの男子のチーム、そ  
して一夏と真改、有名な幼なじみ同士の対決といふこともあり、ほ  
とんどの生徒がこの試合を見ている。

かくいう私も、山田君と一緒に観察席からモニターで試合の様子を  
見ている。

「まさか幼なじみが相手では戦えない、とは言わないだろ?」  
「言わねえよ。そりゃショックだけどさ、シンのことだ、何か理由  
があるんだろ?」

「……」  
「僕もシンを信じるよ。友達だからね。  
……だから、手は抜かない」

開放回線で行われる、四人の会話。

まだ一月も経っていないのに、デュノアにここまで信頼され  
るとは、本当に不思議なやつだ。

「どうなりますかね、この試合。ボーテヴィッヒさんと井上さんの  
ペアは、かなりの実力があると思うんですけど……」

「ああ、一年では間違いなく最強の二人だ。デュノアがどこまで食  
い下がれるかな」

山田君の言葉に答える。

軍人として極めて高い能力を持ち、ISの操縦にも精通しているラウラ、そして生身では一年どころか学園でも最強クラスの戦闘力を持つ真改。

この一人は、他のどのペアと比べても圧倒的だ。

「けど井上さんの月光は、織斑君の零落白夜とは相性が悪いですね？勝てる可能性もあるんじゃ……？」

「山田君は井上を剣士だと思っているようだな。それは間違いではないが、しかし井上はただの剣士ではない。剣が折れた程度では、あいつの力は微塵も衰えんさ」

「はー……。織斑先生は、随分井上さんのこと評価してるんですね」「む……まあ、私と互角に戦えるのはあいつくらいだからな」

しまった、話し過ぎた。

山田君は最近妙に私をからかってるので、あまりネタを『』えるわけにはいかない。

「んん！とにかく、単純な実力では話にならん。織斑とデュノアがどれだけ連携をとれるかが、勝敗を分けるだろうな」

ラウラの狙いは一夏を倒すことだけだ。

真改と協力するつもりは、おそらくないだろう。

「織斑一夏。貴様を排除する。貴様だけは、私の手で倒す」

「悪いが負けるつもりはないぜ。力じやかなわいかもしれない。けど足りない力はチームワークで補つてみせる。一人で戦うつもりのお前には負けねえよ。

行くぜ、シン、ラウラ。勝つのは　　俺と、シャルだ」

「伝えたいことがあるなら言葉にすればいいって、一夏が教えてく

れた。言葉にしなくても伝わることがあるって、シンが教えてくれた。だから僕は、言葉と、行動で伝えるよ。

絶対に、勝つ

「……推して参る……」

そして今。

開戦の狼煙があがる。

試合開始のブザーと共に、まず動いたのは、織斑一夏と井上真改。お互いに瞬時加速を発動、一瞬で間合いを詰める。

「おおおおっ！」

「……ッ！」

初撃は互いに居合いの形。

左腰にあてた右腕を、横薙に振り抜く。

零落白夜と月光、必殺の威力を持つふたつの刃が噛み合いの瞬間、月光が消滅する。

(いけるー月光じゃあ、零落白夜とは打ち合えないー)

そ

零落白夜はあるゆるエネルギーを消滅、無効化する武装である。膨大なエネルギーを刃とする月光にとっては、考え得る最悪の相性といえる。

なにせ敵の刃に触れただけで消えてしまうのだから。

「はあつー。」

一夏は勢いのままに零落白夜を振り上げ、一撃目を放とづとする。真改の月光は沈黙したまま。零落白夜により刃を失った月光は、再起動までに数秒の時間を要する。

その時間こそが、一夏にとつて唯一のアドバンテージである。

しかしその程度、真改が考えていない筈がない。

ガンツ！

「がはつ…………！？」

「…………」

一夏が剣を振り上げた瞬間、真改はさらに間合いを詰めた。そのまま一夏にタックルし、腰に右腕を回してしつかりと抱え込む。

そして水月を起動、抱えた一夏ごと、一気に加速する。

「ゴウンシー！

「つおおおおつー！？」

「…………」

爆発的な加速を受け、一夏の体勢が崩れる。

さらに月輪を噴かし、その光で螺旋を描きながら尚も加速、アーリナの遮断シールドに向か、錐揉みしながら一夏を投げつける。

「なん…………のおおー。」

しかし一夏の反応は速かつた。投げられた瞬間に瞬時加速を発動、遮断シールドに激突する直前で停止した。

「いきなり伊綱落としかよ……！」

ISの保護機能により、ブラックアウトはどうにか防いだ。体勢を立て直そうとする一夏に、真改の追撃が迫る。

再起動した月光を振り上げ、上段からの一撃。翳した零落白夜で打ち払い、続けて胴を薙ぐ。

真改は素早く後退してそれをかわし、月影を起動、散弾の雨を降らせ ようとして、突然回避行動をとった。

「させないよ！」

背後から放たれた、シャルロットの六一口径アサルトカノン「ガルム」の爆破弾を避ける。

一夏への攻撃を中断し、真改は武装をアサルトライフルに持ち替えたシャルロットと対峙した。

「貴様は私の獲物だ！」

「いいぜ、相手になつてやるー！」

ラウラはシャルロットを相手にするつもりはないようで、一夏に突撃していく。

一夏の援護に向かったシャルロットと、それを止めようともせず、一夏に執着するラウラ。

両チームの連携の差が、すでに大きく現れていた。

「僕が相手になるよ、シン！」「

「……来い……！」

友人であり、恩人でもある真改を前に、シャルロットの眼には闘志が漲っている。

（負けないよ、シン！僕は、戦つて決めたんだから！）

月輪による変則機動を繰り返しながら迫る真改に、アサルトライフルを連射。

高い機動力をもつ魔刃を牽制しながら、月光の間合いに入れないと下がり続ける。

こうして、試合は早くも、一対一の状況がふたつ出来上がった。

それこそが一夏とシャルロットの策であると、誰も気づかぬままに。

## 第19話 役目（開戦編）（後書き）

学年別トーナメントの決着は次回に持ち越しです。

一夏対ラウラ、シャル対真改の構図ができたわけですが、さて、どうなるか……。

自分で書いてわかりにくいと思ったので説明しますと、最後のほうでシャルがシャルロットとなっていたのは、三人称視点だったからです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0183w/>

---

I S イノウエ シンカイ

2011年10月8日18時47分発行